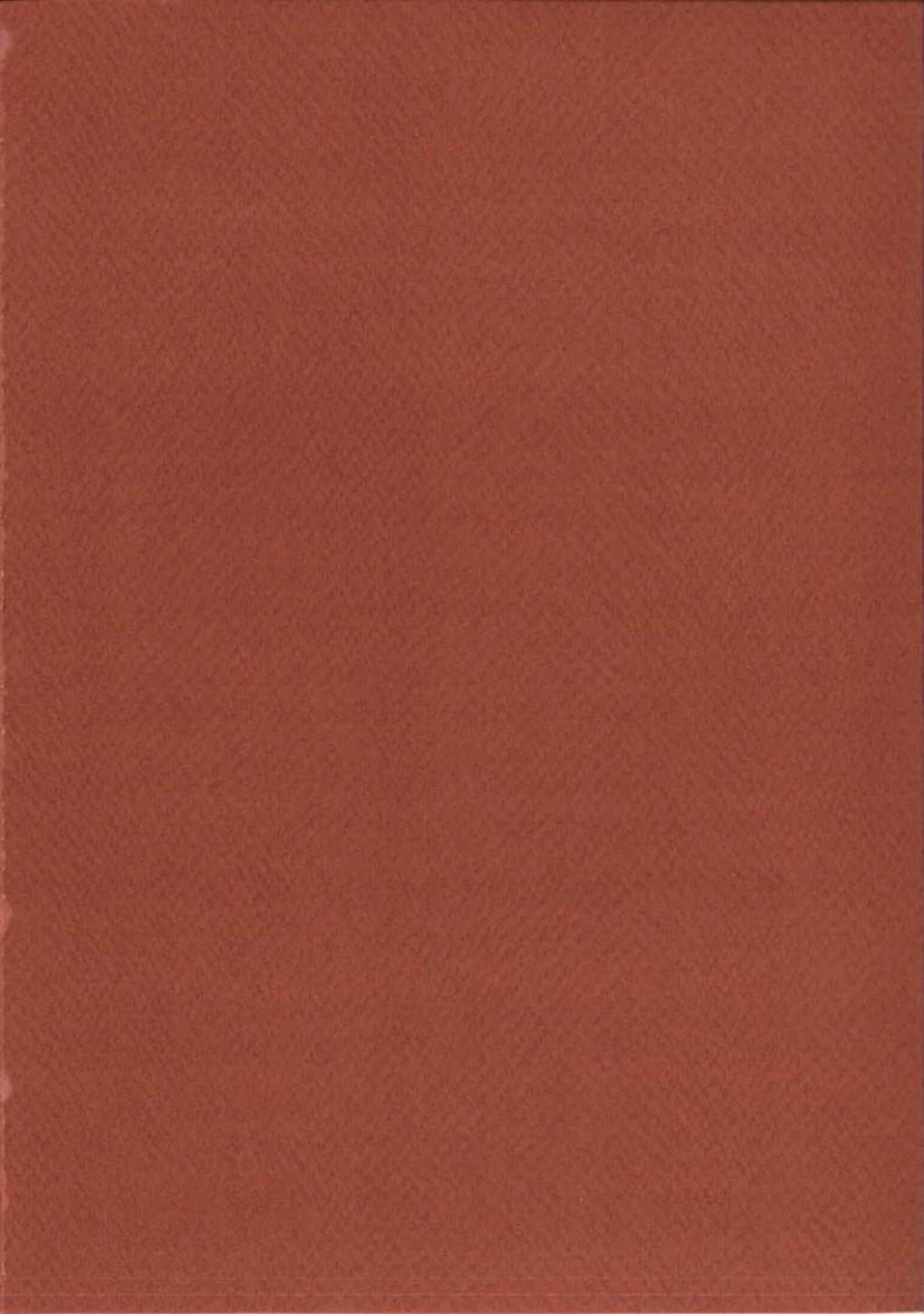


大阪府阪南市自然田所在

向出遺跡評価検討委員会報告書

2010年

阪南市教育委員会



## はしがき

今から十数年前、(財)大阪府文化財調査研究センターの調査により、立てられたままの状態で石棒が発見され、「西日本最大級の土坑墓群」が存在すると評された向出遺跡は、調査当初から縄文時代の葬制や祭祀の様相を伺う資料として重要視されてきました。その後、当市が平成10年度から行った範囲確認調査等による新たな資料の増加があることから、遺跡の実態を把握し、最新の研究成果をもって向出遺跡の評価検討を行うべく、阪南市教育委員会では、平成20年度に縄文時代各分野の研究者で構成する「向出遺跡評価検討委員会」を設置し、同年度から平成21年度にかけて、全5回におよぶ評価検討委員会を行いました。

とりわけ第4回委員会は、公開シンポジウム形式を採り、各委員の先生方によるご講演や、当市教育委員会による調査報告、発表者に阪南市長も交えた討論を盛り込んだことで、当日は100人近い参加者があり、会場はにぎわいを見せました。

向出遺跡は大規模な墓域としての認識がなされているところですが、評価検討委員会では西日本における他遺跡の葬制との比較検討や、遺跡内、もしくは周辺にあると思われる居住城の位置を推定する等、遺跡の構成や変遷過程について、度重なる議論がなされ、新たな知見を得ることとなりました。

今回、評価検討委員会で得た成果を報告することにより、縄文時代の大規模な墓域である向出遺跡の周知を図り、希少な文化財としての保護や、当市を特徴付ける遺跡としての活用を推進し、これらの事業への理解をより一層促すことができるものと考えます。また今後、縄文時代の遺跡としての向出遺跡が広く市民に知られ、阪南市の歴史的・文化的資源として活用されるよう、その保存活用事業の継続を図ってまいります。

最後になりましたが、向出遺跡に関する調査や、評価検討委員会に多大なるご理解およびご協力をいただきました土地所有者や住民の皆様に深謝申し上げますとともに、今後ともご尽力を賜りますよう、心からお願い申し上げます

2010年3月

阪南市教育委員会  
教育長 田渕 万作



第1図 阪南市位置図



## 例　　言

1. 本書は平成20年度から実施している向出遺跡評価検討委員会の成果をまとめた報告書である。

2. 向出遺跡の再検討にあたっては、平成20年度に「向出遺跡評価検討委員会」を設置した。

3. 向出遺跡評価検討委員会の構成は以下の通りである。

委員長　泉　拓良（京都大学大学院教授）

委員　　大野　薰（大阪府教育委員会文化財保護課）

中村　健二（財団法人滋賀県文化財保護協会）

欠野　健一（立命館大学教授）

オブザーバー　岡田　憲一（奈良県立橿原考古学研究所）

大阪府教育委員会文化財保護課

4. 当遺跡から出土した骨片の鑑定は、安部みき子氏（大阪市立大学大学院教授）に依頼し、第3章にて玉稿を賜った。

5. 第4章は、当検討委員会の委員およびオブザーバーから玉稿を賜った。

6. 本書では、第1章は山千代明日香、第2章は三好義三、山千代、第3章は安部氏、第4章の第1節は岡田氏、第2節は矢野氏、第3節は中村氏、第4節は大野氏、第5節は泉氏、第5章は三好、山千代が執筆した。

7. 本書の編集は、三好義三、田中早苗、上野　仁、山千代明日香が行った。

8. 本書での方位は磁北を用い、標高は東京湾平均海面値のT.P.+で示す。

9. 阪南市教育委員会が行った発掘調査および範囲確認調査の調査区名は、調査年度(西暦)の下2桁と年度ごとの調査区番号で表す。また、各調査では便宜上、トレンチに番号を付けている。

10. 文章の脚注や参考文献は、各章や節の文末に掲載している。

11. 掃図の出典は各図の下に示すが、特に記載の無い場合は阪南市教育委員会刊行の報告書に掲載している図面もしくは、今回新たに作図を行ったものである。

12. 本書に関する記録は、阪南市教育委員会にて保存しているので、広く活用されたい。

13. 発掘調査および範囲確認調査にあたっては、土地の所有者など、関係者各位のご理解及びご協力を得た。ここに感謝の意を表したい。

14. 本書の作成にあたっては、多くの機関、個人からご協力とご指導をいただいた。ここに記して感謝したい。（五十音順 敬称略）

泉佐野市教育委員会　大阪市立大学大学院　大阪府教育委員会　（財）大阪府文化財センター

京都大学大学院　（財）滋賀県文化財保護協会　自然田地区自治会　奈良県立橿原考古学研究所

文化庁　岬町教育委員会　立命館大学

岡田　賢　小川正純　中岡　勝　水之江和同　森尾直樹　横澤　滋

15. 本書に関する整理作業および図版の編集にあたっては、以下の協力があった。

和田旬世　井上祥子　井上　進　島田万帆

## 目 次

はしがき

例言

目次

第1章 向出遺跡の位置と環境 .....	1
第2章 成果報告 .....	3
第1節 向出遺跡評価検討委員会 .....	3
第2節 調査経過 .....	7
第3節 阪南市教育委員会による発掘調査 .....	7
第4節 調査結果の小結 .....	38
第5節 調査成果からみた遺跡の性格 .....	40
第6節 保存活用事業に関する経過 .....	40
第3章 出土骨についての所見 .....	41
第4章 評価検討委員会における考察、評価 .....	44
第1節 向出遺跡から復原する縄文時代の葬制と社会一向出遺跡の発掘調査成果とその意義ーー .....	45
第2節 向出遺跡の空間分析 .....	58
第3節 向出遺跡検出土坑の機能 .....	73
第4節 縄文時代の集落と墓地 一集落からみた向出縄文墓地の評価ーー .....	80
第5節 西日本縄文文化の転換という視点から見た向出遺跡 .....	88
第5章 総括 .....	101
第1節 再評価までの経過 .....	101
第2節 論点の整理 .....	101
第3節 向出遺跡の評価検討 .....	102
第4節 現状と課題 .....	103
第5節 今後の取り組み .....	103
あとがき .....	104
(添付CD-R)	
参考資料 関西における縄文時代の墓地遺跡集成	
「関西の縄文墓地遺跡」	
「大阪府の縄文土坑出土遺跡」	
凡例 .....	105
「関西の縄文墓地遺跡」掲載内容例 (一部抜粋) .....	106
「大阪府の縄文土坑出土遺跡」掲載内容例 (一部抜粋) .....	109

## 第1章 向出遺跡の位置と環境

阪南市は大阪府の南部に位置し、東は泉南市、西は岬町、南は和歌山県岩出市と和歌山市に接している。市の総面積は約36.1km<sup>2</sup>で、北西部には大阪湾が広がり、市域南部には紀泉高原等の山地が連なり、水と緑に囲まれた自然資源の多く残る地域である。市の北部を南北方向に流れる男里川は、和泉山脈の西端から発する金熊寺川、菟谷川、中山川が合流したもので、河口は市の北端に位置する。向出遺跡はその合流地点よりも上流に所在し、菟谷川と中山川に挟まれた段丘上に立地する。海岸線からは直線距離にして約2kmを測るが、(財)大阪府文化財調査研究センターの報告によると、遺跡が形成された縄文時代では、現在よりさらに海岸線から離れていたとされている。

市内には縄文時代以前に帰属する遺跡は数少ない。向出遺跡は、縄文時代中期後葉から晩期に形成されているが、後期を中心とする遺物の他に尖頭器(注1)の出土も見られ、これらを踏まえると縄文時代草創期には、当地において人の活動が始まっていたようである。向出遺跡より西へ約800m地点に所在する神光寺(蓮池)遺跡内では、有茎尖頭器が採取されているが、神光寺(蓮池)遺跡では縄文時代に属する遺構は未だ発見されておらず、阪南市全体を見ても中期以前の時期を中心とした遺跡は知られていない。

阪南市で、縄文時代の遺構が確認されたのは向出遺跡以外にはないにせよ、複数の遺跡で縄文土器や石器等が採集されている(第2図)。亀川北遺跡では北白川上層式3期にあたる注口土器の把手、久保田遺跡では後期前葉の土器、神光寺(蓮池)遺跡では官窯2式期の深鉢、下出北遺跡では福田K II式や下って滋賀里III a式へ篠原式にあたる土器、馬川遺跡では長原式期の深鉢、尾崎清水遺跡では滋賀里式や長原式にあたる土器、馬川北遺跡では滋賀里IV式期や凸帯文系の土器、亀川遺跡では凸帯文系土器が出土している。これらはいずれも縄文時代後期から晩期にあたり、これら土器に加えて、石器が出土している遺跡も多い。当時期には男里川と共に合流する河川周辺の各地において人が居住していたものと考えられる。



第2図 阪南市埋蔵文化財包蔵地地図

向出遺跡では、最も時期の遅る資料として、尖頭器が出上しており、草創期にまで遡る可能性が指摘される。しかし、縄文時代草創期から中期後葉に亘る資料は、これ以外に見られない。よって遺跡形成の始まりは縄文時代中期後葉であると考えられる。大型の墓域として成り立つの、時期が下つてからの後期中葉の頃である。以後、弥生時代後期になると円形を呈した竪穴住居が當まれ始め、やがて方形の竪穴住居も現れる。その後、庄内式併行期の住居は検出されておらず、布留式後半期に再び竪穴住居の営みが見られる（山元建ほか2000）。また、遺跡中央部（注2）ではTK208型式併行期の須恵器を伴う竪穴住居が確認されており、周辺においても同時期の須恵器の出土が見られる。その後、当遺跡の土地利用についての資料は乏しいが、中世期に属する瓦の出土（注3）が見られることから、付近に当時期の寺院の存在があったと考えられる（阪南市2005）。各時代を通じ近代に至るまで、十地の改変を繰り返したようである。

当市周辺の状況では、泉佐野市に所在する三軒屋遺跡や、岬町の淡輪遺跡が縄文時代の代表的な遺跡として挙げられる。三軒屋遺跡は向出遺跡の北東約6kmに位置する。広範囲に及ぶ調査が少なく資料に乏しいが、出土遺物では中津式から滋賀式IV期にかけての土器が見られ、石器製作または調理の場を示唆する上坑からは、多數のサヌカイト製石鐵等と共に、動物骨片や木の実が出土している（大野2008）。淡輪遺跡は向川遺跡の西約7kmに位置し、古くから縄文土器や石器が出土している。昭和55(1980)年に大阪府が行った調査では、縄文時代後期の円形ないしは楕円形を呈する竪穴住居が5棟、重複した状況で確認されている。土器は北白川上層2~3式にあたり、この時期の遺物が多く見られる（渡辺・藤永1981、藤永1987）。また平成17(2005)年、岬町教育委員会が行った調査では集石遺構が確認され、石の間からは多くの縄文土器が出土している（注4）。これらの遺跡は向川遺跡より後に出現し、向出遺跡と併せて各地域の中で重要な役割を担った遺跡として考えられている。

#### 注

- 1) 本検討委員会オブザーバーの岡田憲一氏から、「調整の剥離技術からすれば草創期と考えるのが妥当」とのご教示を得た。
- 2) 古墳時代の竪穴住居は00-2a区（第3図）で1棟確認されている。また、06-1区でも同時代の竪穴住居が検出されている。
- 3) 中世期に属する瓦は、88-3、99-1、99-3、99-2、00-3、00-7、01-4、01-5、03-3、03-4、06-1、07-7区で出土している（第3図）。
- 4) 岬町教育委員会の小川正純氏からご教示いただいた。

#### 引用参考文献

- 大野 薫 2008 「考古II Ⅲ石器・縄文時代」（『新修泉佐野市史』第1巻 通史編 自然～中世）、泉佐野市史編さん委員会
- 山元 建ほか 2000 『向山遺跡』（『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第55集）、財團法人 大阪府文化財調査研究センター
- 山本 章編 1980 『三軒屋遺跡－昭和54年度の調査－』、泉佐野市教育委員会
- 渡辺正宏・藤永正明 1981 『淡輪遺跡発掘調査概要・III』、大阪府教育委員会
- 藤永正明 1987 『淡輪遺跡発掘調査概要・VII』、大阪府教育委員会
- 島崎久恵 2002 『亀川遺跡』（『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第75集）、財團法人大阪府文化財調査研究センター
- 阪南市教育委員会 2005 『向出遺跡範囲確認調査報告書』（『阪南市埋蔵文化財報告』36）

## 第2章 成果報告

### 第1節 向出遺跡評価検討委員会

向出遺跡の評価は、平成10(1998)年3月に実施された(財)大阪府文化財調査研究センターに端を発する。多くの土坑が土坑墓であると考えられたことから、「西日本最大級の縄文墓地」と称され、同時に開催した阪南市教育委員会主催の「縄文と向出遺跡—講演・シンポジウム」では、土坑墓の多さや、「環状土坑群」の存在に注目が集中した。その後、調査報告書では確実に縄文時代に属する遺構が抽出され、「環状土坑群」の存在は仮説として今後の問題提起に留まつたが、膨大な資料を客観的に把握しまとめ上げた功績は、縄文時代研究に大いに貢献したと言える。

調査当時に提示された向出遺跡像は、現在と大きく異なるものではないが、10余年を経て、当市教育委員会では、範囲確認調査や開発に伴った40件を超える調査を実施しており、縄文時代の遺構は、時期的にも空間的にも広がりを見せた。縄文遺跡の事例の増加もあることから、向出遺跡を改めて評価する動きが高まり始め、史跡指定を鑑み、遺存良好な範囲を把握する必要が生じた。そこで、平成20(2008)年6月1日に、縄文時代における向出遺跡の評価及び今後の方向付けを行うため、当市教育委員会では、向出遺跡評価検討委員会を設置した。

委員会では、縄文時代研究に沿って、向出遺跡の構造について議論し、現況の遺跡遺存状況も加味した上で、未調査部にどのような重要なものがあるかを検討し、最終的な評価へと結びつけた。

#### [向出遺跡評価検討委員会の経過]

##### ・第1回 平成20年7月30日

委員会の設置目的、市の方針の確認、向出遺跡の調査経過についての報告  
岡田憲一氏による第二阪和国道建設に伴う発掘調査とその評価についての説明  
現地の視察

##### ・第2回 平成20年11月14日

範囲確認調査（08-4区）の経過報告および発掘現場の視察  
関西における縄文時代の墓地遺跡の状況についての集成作業報告

##### ・第3回 平成21年3月19日

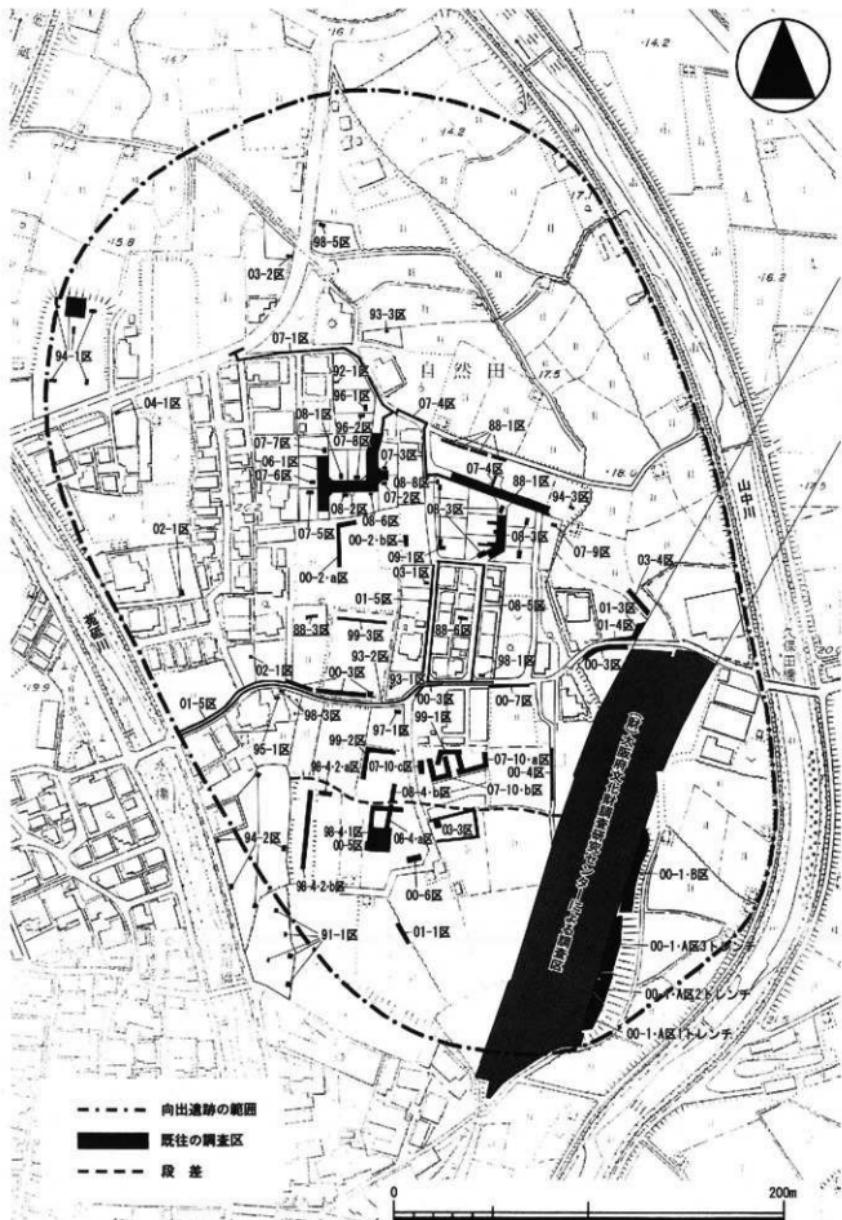
範囲確認調査（08-4区）の調査報告  
向出遺跡の評価について  
関西における縄文時代の墓地遺跡の状況についての集成作業報告  
大阪府における縄文時代の土坑検出遺跡の状況について集成作業報告  
矢野委員による向出遺跡の縄文時代遺構遺存状況についての報告

##### ・第4回 平成21年10月17日

公開シンポジウム『今、よみがえる向出遺跡—西日本縄文集落・墓地の転換期を考える—』  
阪南市立西鳥取公民館で開催（参加者97名）  
各委員・オブザーバーによる講演、当市教育委員会による既往の調査報告  
発表者5人に、安田 隆阪南市副市長と事務局三好を加えたパネルディスカッションを行う

##### ・第5回 平成22年1月25日

報告書発刊に向けての最終調整



第3図 調査区位置図

第1表 阪南市教育委員会による向出遺跡の既往調査一覧

調査区	検出遺構	出土遺物	報告書
88-1	ピット、落ち込み	サヌカイト、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、須恵質土器、瓦器、蛸壺、土錐、瓦、陶器、磁器、石臼	
88-3	土坑、溝、ピット	須恵器、土師質土器、瓦質土器、瓦、陶器	①
88-6	落ち込み	土師質土器、瓦	①
91-1			
92-1	土坑	サヌカイト、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦器	②
93-1		土師質土器、土錐	③
93-2		土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器	
93-3		サヌカイト、須恵器、黒色土器、土師質土器、青磁、鉄釘	③
94-1			
94-2			
94-3			
95-1	落ち込み	須恵器、土師質土器、瓦質土器	④
96-1		縄文土器、土師器、須恵器、瓦器	⑤
96-2		サヌカイト、縄文土器、弥生土器、土師器、瓦器	⑤
97-1		サヌカイト、須恵器、土師質土器、瓦器、蛸壺、陶器	⑥
98-1			⑦
98-2			⑦
98-3			⑦
98-4	土坑、ピット、落ち込み	サヌカイト、石器、縄文土器、須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、瓦、青磁、陶器、磁器	⑫
98-5	落ち込み	土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、製塗土器、土錐、瓦、陶器	⑬
99-1	土坑、ピット	サヌカイト、須恵器、黒色土器、土師質土器、須恵質土器、瓦器、瓦質土器、瓦、陶器	⑭
99-2	土坑、ピット、落ち込み	土師器、須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、土錐、瓦	⑭
99-3	土坑、溝、ピット	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、白磁	⑭
00-1	土坑、溝、ピット 落ち込み	サヌカイト、石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦、陶器、磁器、骨片、鉄釘	⑮
00-2	堅穴住居、土坑、溝、 ピット、落ち込み	サヌカイト、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、土錐、瓦、陶器、磁器、鐵錐	⑯
00-3	溝、井戸	サヌカイト、須恵器、黒色土器、土師器、瓦器、瓦質土器、蛸壺、土錐、瓦、陶器、磁器、鉄釘	
00-4	土坑、ピット	サヌカイト、石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	⑰
00-5	土坑、ピット	サヌカイト、磁石、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦、磁器	⑰
00-6			⑰
00-7	溝、落ち込み	サヌカイト、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、瓦、陶器、磁器	⑰
01-1	土坑、ピット、落ち込み	サヌカイト、石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦、陶器、磁器、骨片、鉄釘	⑰
01-2		土師質土器、瓦器、磁器	
01-3		土師質土器、瓦器、瓦	
01-4		土師質土器、瓦、陶器、磁器	
01-5		土師器、土師質土器、瓦、陶器、磁器、焼土	
02-1	溝	陶器、焼土	⑲
03-1		土師質土器、蛸壺、陶器、磁器	⑳
03-2			㉑

調査区	検出遺構	出土遺物	報告書
03-3	土坑、溝、ピット	サヌカイト、石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、製塙土器、 網走、瓦、白磁、陶器、磁器、鉄釘	⑪
03-4		サヌカイト、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、網走、瓦、 鐵器、焼土	
04-1		須恵器、土師質土器、瓦器、瓦、陶器、磁器	⑫
05-1	堅穴住居、土坑、溝、 ピット、井戸	サヌカイト、石器、縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、ガラス玉、古鏡、鐵錠	
07-1			
07-2	土坑	黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、製塙土器、網走、瓦、青磁、陶器	⑬
07-3	溝	弥生土器、土師器、黒色土器、土師質土器、瓦器、製塙土器、網走、焼土	⑭
07-4			
07-5	土坑、ピット	須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦質土器	⑮
07-6		サヌカイト、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、製塙土器、土錐	⑯
07-7		サヌカイト、弥生土器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、瓦、陶器、磁器	⑰
07-8		サヌカイト、石器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、網走	⑱
07-9		土師質土器、磁器	⑲
07-10	土坑、溝、ピット、 落ち込み	サヌカイト、石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、黒色土器、瓦器、 製塙土器、網走、土錐、瓦、陶器、磁器	⑳
08-1		黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦	㉑
08-2	溝	土師器、須恵器、土師質土器、瓦器	㉑
08-3	土坑、溝	サヌカイト、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器	
08-4	土坑、溝、ピット、 落ち込み	サヌカイト、石器、縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶器、 磁器、瓦、瓦窓道具	㉓
08-5			
08-6	溝、ピット	土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、瓦質土器	㉔
08-8		須恵器、土師質土器	㉕
09-1		土師質土器	㉖

#### 掲載報告書

- ①『阪南町埋蔵文化財発掘調査概要III』1989（『阪南町埋蔵文化財報告』VII）
- ②『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要VII』1993（『阪南市埋蔵文化財報告』X VI）
- ③『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要IX』1994（『阪南市埋蔵文化財報告』X VIII）
- ④『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X I』1996（『阪南市埋蔵文化財報告』XXX I）
- ⑤『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X II』1997（『阪南市埋蔵文化財報告』XXX II）
- ⑥『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X III』1998（『阪南市埋蔵文化財報告』XXX III）
- ⑦『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X IV』1999（『阪南市埋蔵文化財報告』XXX V）
- ⑧『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X V』2000（『阪南市埋蔵文化財報告』XXX VI）
- ⑨『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X VI』2003（『阪南市埋蔵文化財報告』31）
- ⑩『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X IX』2004（『阪南市埋蔵文化財報告』32）
- ⑪『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X X』2005（『阪南市埋蔵文化財報告』35）
- ⑫『向出遺跡範囲確認調査報告書』2005（『阪南市埋蔵文化財報告』36）
- ⑬『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X X I』2006（『阪南市埋蔵文化財報告』38）
- ⑭『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X X V』2008（『阪南市埋蔵文化財報告』42）
- ⑮『向出遺跡範囲確認調査報告書ー00-1区ー』2009（『阪南市埋蔵文化財報告』43）
- ⑯『向出遺跡範囲確認調査報告書II』2009（『阪南市埋蔵文化財報告』44）
- ⑰『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X XVI』2009（『阪南市埋蔵文化財報告』45）
- ⑱『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X XVII』2010（『阪南市埋蔵文化財報告』46）

## 第2節 調査経過

向出遺跡は、昭和62(1987)年度に阪南町教育委員会が行った埋蔵文化財分布調査により、数点の縄文土器と多数のサヌカイト製石器や石材片等が採集され、縄文時代の遺跡として周知された。その後、平成9(1997)年に第二阪和国道（国道26号線）の延伸に先立つ発掘調査を(財)大阪府文化財調査研究センター（以下、「府センター」と記す）が行い、8,975m<sup>2</sup>の調査区域からは縄文時代の土坑墓群や、石棒が立てられた状態を維持したまま発見されると共に、多くの縄文土器が出土し、当時代の主要な遺跡としての認識が高まった。このような重要性を踏まえ、阪南市教育委員会では国の史跡指定を視野に、向出遺跡の正確な範囲の確定を目的とした範囲確認調査を、平成10(1998)年度から4年間におよぶ事業として実施した。

平成19(2007)年および平成20(2008)年の各年では、これまでに得た成果を踏まえ、さらに遺構の分布状況を把握すべく、範囲確認調査を行った。また、後者の調査では、平成20年6月1日に設置した、向出遺跡評価検討委員会の助言や指導を受けた。特に平成20年度に調査を行った08-4区は、現在、現地に見られる段差がどの時期に形成されたのかを調査する必要性が検討委員会より挙げられ、実施したものである。その結果、段差の形成は縄文時代より下ることが判明した。

## 第3節 阪南市教育委員会による発掘調査

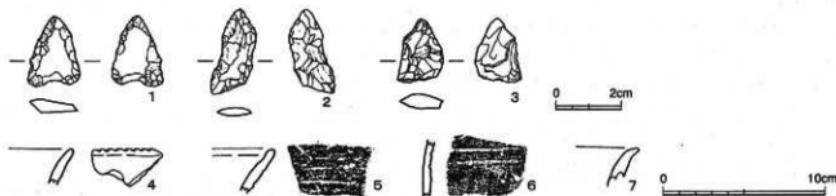
ここで、向出遺跡で行ったこれまでの調査について、縄文時代に関する成果をまとめる。なお、阪南市教育委員会による調査は、第1表の調査一覧及び、第3図の調査区位置図を参照されたい。

### 1. 98-4-2区（第4・5図）

遺跡南西部に位置する。範囲確認調査として、6.5m×2.0mのaトレンチと、40.0m×2.0mのbトレンチを設定した。当調査区で検出した全ての遺構は中世期に属するもので、縄文時代の遺物包含層は確認されていない。

bトレンチの南端部で検出した落ち込み1は、南西方向へ下がる形状で、菟谷川の氾濫時に削られたものと思われる。深さは1.34mで、遺構内には8層の堆積がある。出土遺物から、第1～3層は中世期、第4層は奈良・平安時代、第5・6層は縄文時代に属する。各層には時期差があるものの、掘削や堆積の状況は明確でないが、縄文時代に関連するものとしてここに報告する。

落ち込み1から出土した遺物のうち、1～3はサヌカイト製石器、4は縄原式に比定され、5～7は縄文時代晚期前葉に属する土器である。1は第3層から、2～7は第5層から出土した。

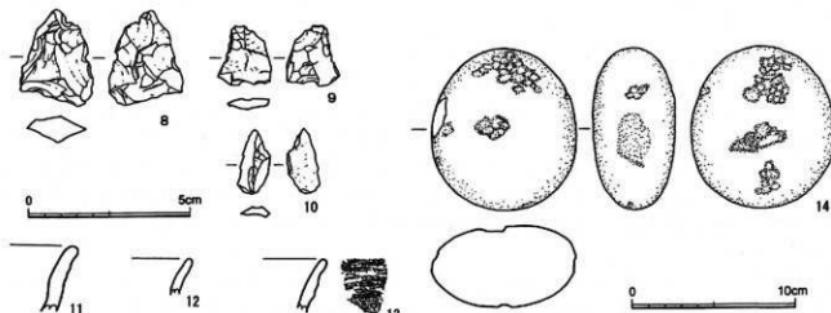


第5図 98-4-2区 bトレンチ 落ち込み1出土遺物

### 2. 98-4-1・00-5区（第6～15図）

遺跡南部に位置する当調査区では、縄文時代の遺物包含層は確認されず、他時代の包含層から縄文時代に属する遺物が出土している。8～10は近世期の包含層から出土したサヌカイト製石器の未成品である。11～14は平安時代の包含層から出土した。11～13は縄文時代晚期の土器で、14は和泉砂岩製の敲石である。

当区では、2面の遺構面があり、下層遺構面で縄文時代に属する遺構を検出した。



第7図 98-4-1・00-5区 包含層出土遺物

土坑12は、東西1.70m、南北1.45m、深さ0.50mを測る。縄文土器と石器が出土した。15は、和泉砂岩製の敲石である。

土坑13は、東西2.50m、南北2.20m、深さ0.32mを測る不定形の土坑である。サヌカイト、縄文土器が出土している。16は浅鉢で、晩期前葉に属すると思われる。

土坑14は東西0.61m、南北0.80m、深さ0.35mを測り、遺物はサヌカイト剥片、縄文土器が出土した。17は浅鉢で滋賀里I式に、18は後期後葉に属する。19はサヌカイト製スクレイパーである。

土坑20は、東西1.65m、南北0.88m、深さ0.16mを測る隅丸方形の土坑で、底部は皿状を呈し、周縁部には配石が施されている。形状や配石の状況から、土坑墓の可能性が挙げられるが、人骨は出土していない。遺物はサヌカイト剥片、縄文土器、和泉砂岩の石器が出土した。20~22は縄文時代晩期前葉の浅鉢で、20・21は、樅原式文様を呈する。23は和泉砂岩製の敲石である。

土坑28は、東西0.50m、南北0.79m、深さ0.18mを測り、サヌカイト剥片、縄文土器が出土した。

土坑29は、東西0.31m、南北0.64m、深さ0.15mを測り、縄文土器が出土した。

土坑30は、東西0.40m、南北0.43m、深さ0.30mを測り、埋土には炭化物が混じる。サヌカイト剥片、縄文土器が出土した。

土坑108は、東西0.42m、南北0.28m、深さ0.13mを測り、サヌカイト剥片、縄文土器が出土した。

土坑109は、東西0.50m、南北0.36m、深さ0.16mで、縄文土器が出土した。

土坑110は、円形を呈し、直径0.45m、深さ0.16mを測り、埋土には炭化物が混じり、サヌカイト剥片、縄文土器が出土した。

ピット6は、直径0.38m、深さ0.12mで、埋土には炭化物が混じり、縄文土器が出土した。

ピット9は、直径0.28m、深さ0.19mで、縄文土器が出土した。

ピット10は、直径0.32m、深さ0.26mで、縄文土器が出土した。

ピット13は、直径0.33m、深さ0.18mで、サヌカイト剥片が出土した。

ピット18は、直径0.36m、深さ0.18mで、サヌカイト剥片が出土した。

ピット23は、直径0.29m、深さ0.19mで、縄文土器が出土した。

ピット54は、直径0.25m、深さ0.08mを測り、サヌカイト剥片、縄文土器が出土した。24・25は深鉢で、滋賀里II式に比定される。

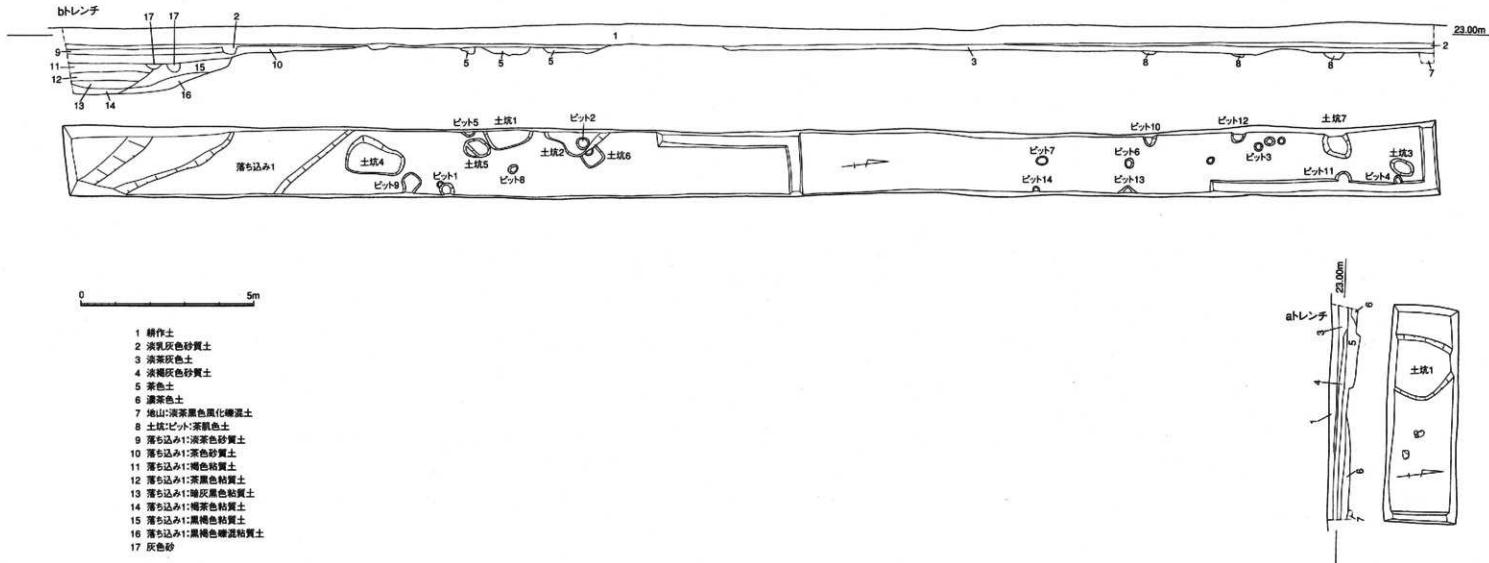
ピット120は、直径0.29m、深さ0.07mで、縄文土器が出土した。

ピット121は、直径0.31m、深さ0.07mで、サヌカイト剥片が出土した。

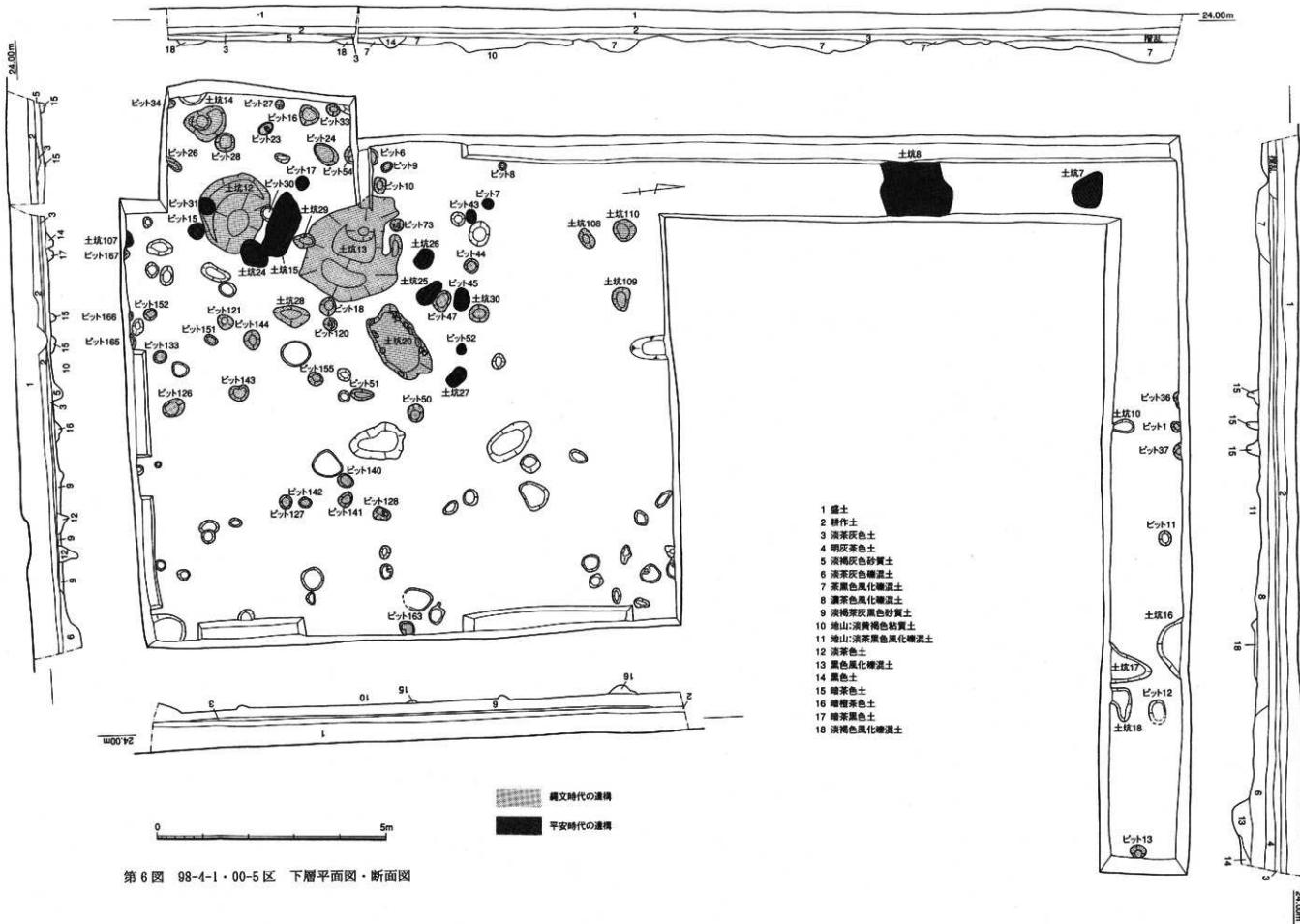
ピット126は、直径0.46m、深さ0.10mで、縄文土器が出土した。

ピット128は、直径0.31m、深さ0.20mで、埋土に炭化物が混じり、サヌカイト剥片、縄文土器が出土した。

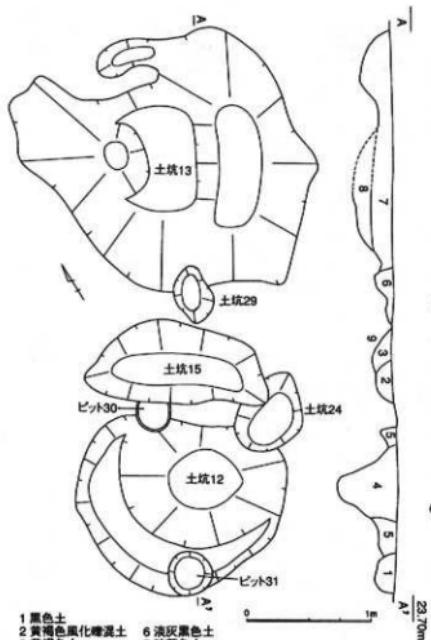
ピット142は、直径0.25m、深さ0.07mで、縄文土器が出土した。



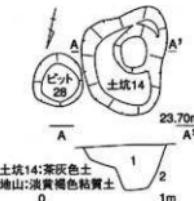
第4図 98-4-2区.a・bトレンチ 平面図・断面図



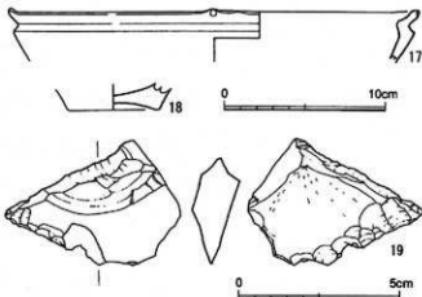
第6図 98-4-1-00-5区 下層平面図・断面図



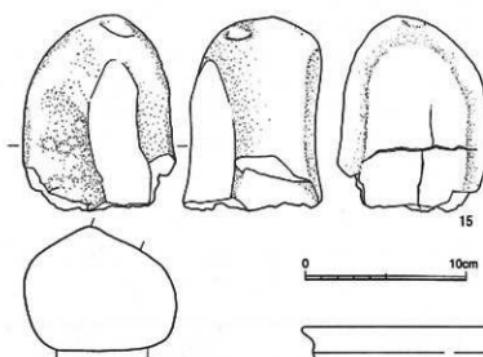
第8図 98-4-1・00-5区 土坑12・13・29  
ピット31 遺構実測図



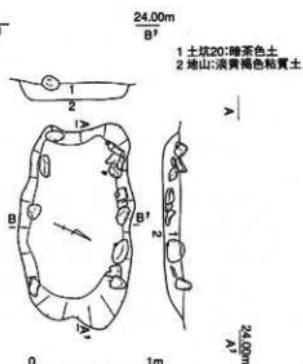
第11図 98-4-1・00-5区 土坑14 遺構実測図



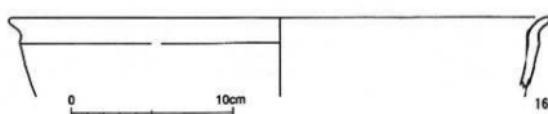
第12図 98-4-1・00-5区 土坑14 出土遺物



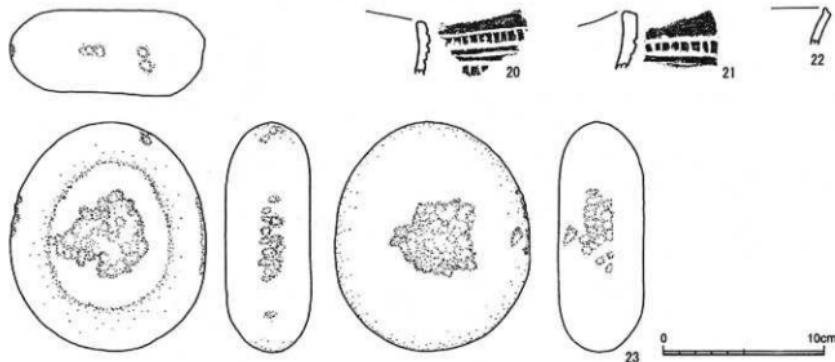
第9図 98-4-1・00-5区  
土坑12 出土遺物



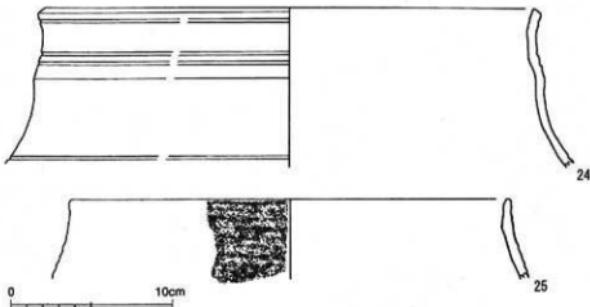
第13図 98-4-1・00-5区  
土坑20 遺構実測図



第10図 98-4-1・00-5区 土坑13 出土遺物



第14図 98-4-1・00-5区 土坑20出土遺物



第15図 98-4-1・00-5区 ピット54出土遺物

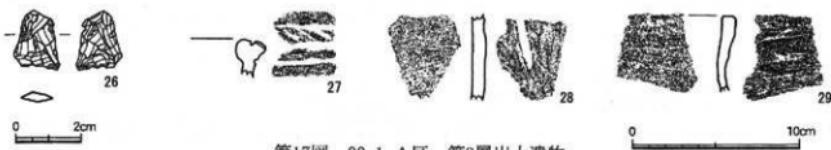
ピット144は、直径0.39m、深さ0.17mで、縄文土器が出土した。

ピット155は、直径0.32m、深さ0.13mで、サヌカイト剥片、縄文土器が出土した。

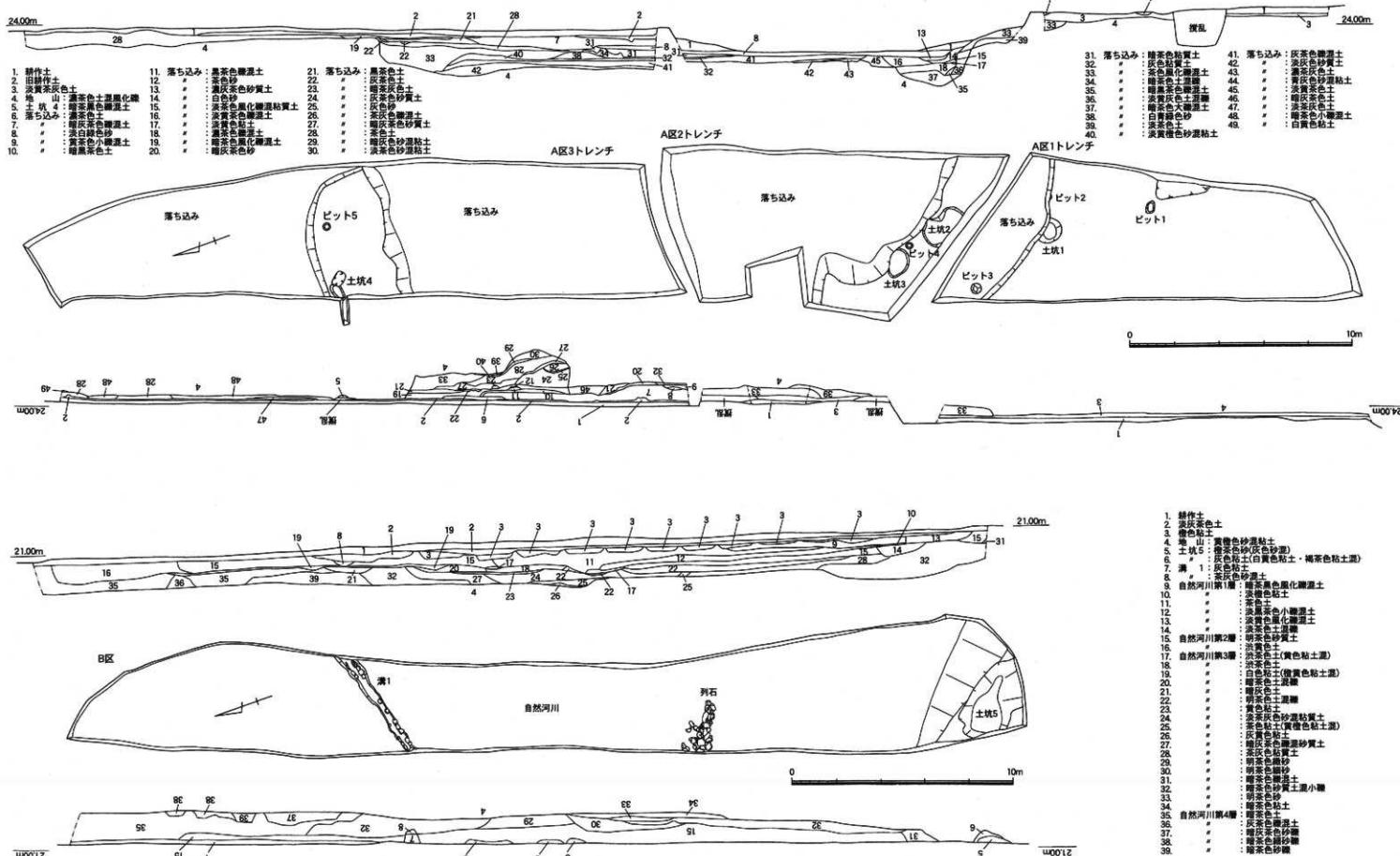
以上に記した遺構は、出土遺物から縄文時代に属することは明白である。さらに、遺物が出土していない遺構においても埋土の共通性から、27ヶ所のピットが縄文時代の遺構である可能性が高いことがあげられる。暗茶色土が堆積する遺構は、ピット1・8・26・27・34・36・37・44・47・50・73・163・165・166、茶灰色土が堆積する遺構は、ピット16・24・28・33・51・140・141・143・151、暗茶黒色土が堆積する遺構はピット127・133・152・167である。

### 3. 00-1区（第16～37図）

縄文時代後晩期の土坑墓が多数検出された、府センター調査区の東部に隣接する。農地切り下げに先立つ発掘調査は便宜上、A区1～3トレンチとB区を設け、調査報告もこの区割りに沿う。



第17図 00-1 A区 第3層出土遺物



第16図 00-1区 A・B区 平面図・断面図

A区では、縄文時代の包含層ではなく、近世期の包含層（基本層序の第3層）に縄文時代の遺物が混じっていた。26はサヌカイト製石鏃で、先端が欠損している。27～29は縄文時代後期に属する土器である。27は四ツ池式・廣瀬土坑40段階、28は北白川上層式I期と考えられる。

縄文時代にあたる遺構として、土坑を3基、ピットを2基確認している。また、落ち込みでは近年までの改変が認められるものの、下層からは縄文土器が多数出土している。

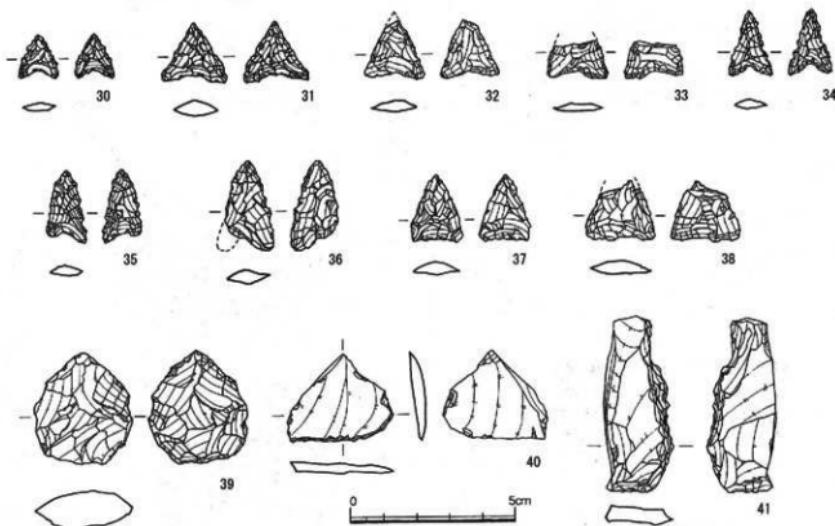
土坑1は、A区1トレンチ北部にあり、地山面で検出した。東西1.22m、南北1.12m、深さ0.30mを測り、円形を呈する。底部は平坦で、埋土には炭化物が混じる。

遺物は、サヌカイト製の石鏃・スクレイバー・剥片、縄文土器、骨片が出土した。骨片は、いずれも焼骨で、人骨と鑑定された。骨についての鑑定結果報告は、第3章に掲載している。以下の骨片鑑定についても同様である。

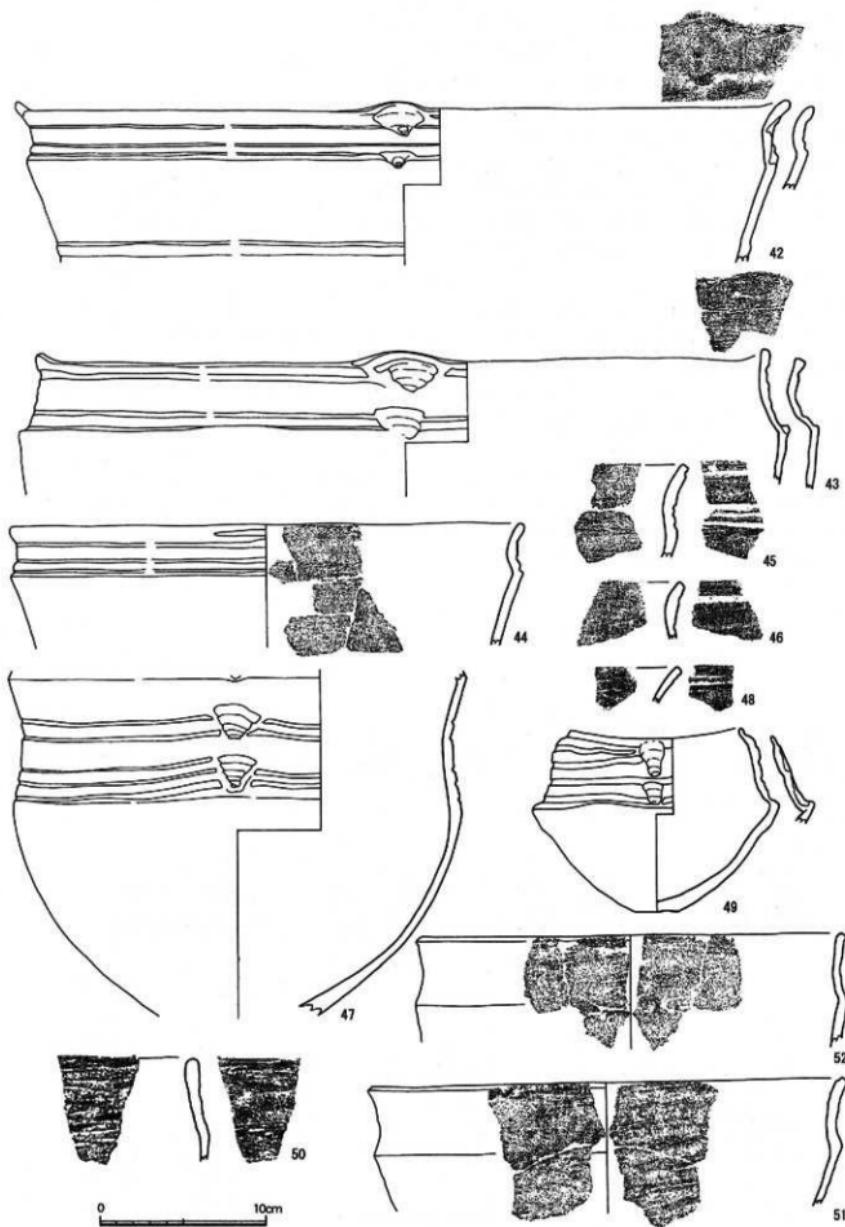
30～36は、凹基無茎式石鏃、37・38は、平基無茎式石鏃で、いずれもサヌカイト製である。39～41は、サヌカイト製のスクレイバーである。42～47は、縄文土器の深鉢である。48は、浅鉢もしくは深鉢の口縁部と考えられ、49は、小形の浅鉢である。50～58は、無文土器である。59は底部で、凹み底である。これらの土器は宮窓2式に比定される。



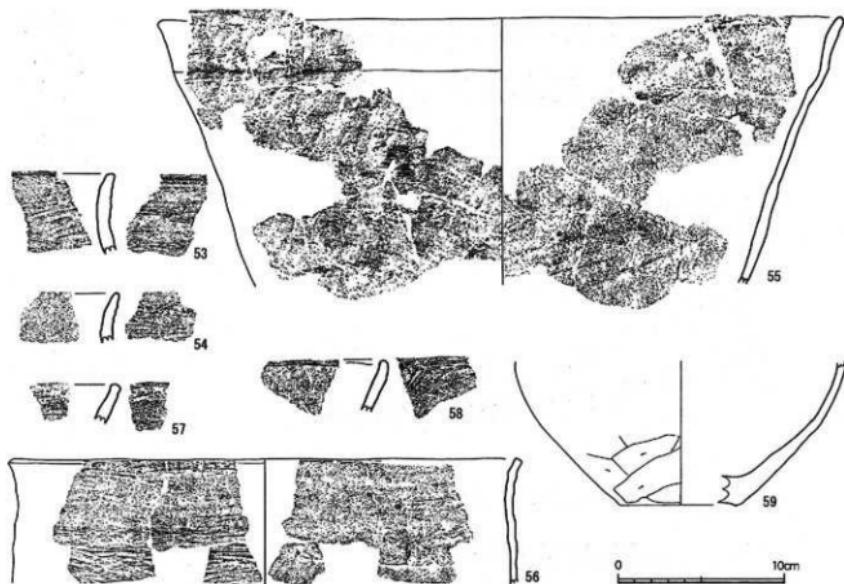
第18図 00-1 A区1トレンチ  
土坑1 遺構実測図



第19図 00-1 A区1トレンチ  
土坑1出土遺物(1)



第20図 00-1 A区1トレンチ 土坑1出土遺物(2)



第21図 00-1 A区1トレンチ 土坑1出土遺物(3)

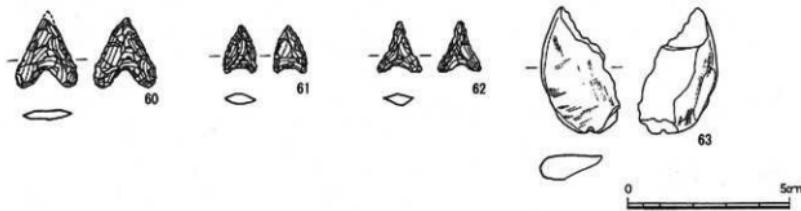
土坑3は、A区2トレンチの地山面で検出した。東西1.30m、南北0.95m以上、深さ0.25mを測る。埋土には炭化物が混じり、遺物はサヌカイト製の石核・石錐・剥片、縄文土器が出士した。また、第1層から骨片が出土しており、イノシシと同定されるものや、人骨の可能性が指摘できる小片を確認した。これらはいずれも焼骨である。

60~63はサヌカイト製の凹基無茎式石錐である。63は切目石錐で、大半が欠損している。表面は研磨痕が認められ、石材は片岩である。

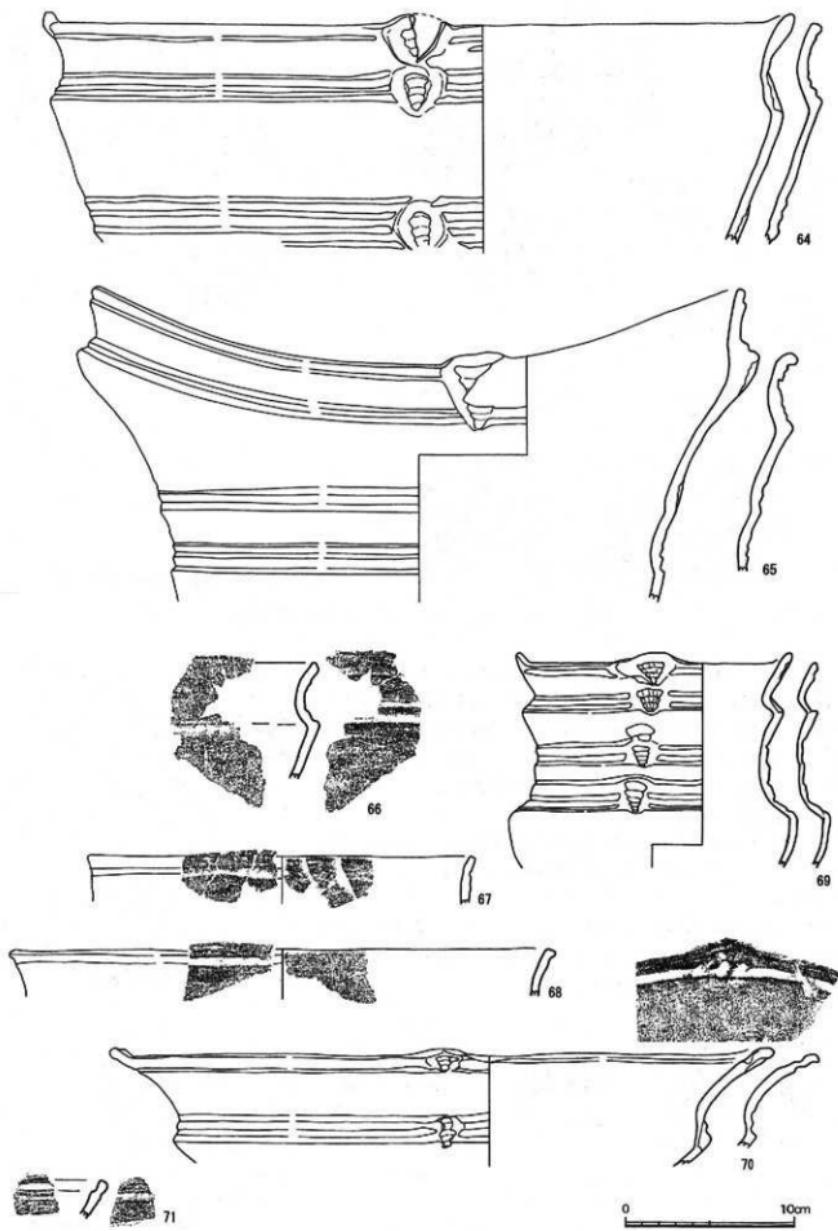
64~71は宮滻式に属する土器である。64~68は深鉢で、口縁は外反する。69は、鉢ないし注口土器と考えられる。70・71は浅鉢で、口縁が著しく外反する。



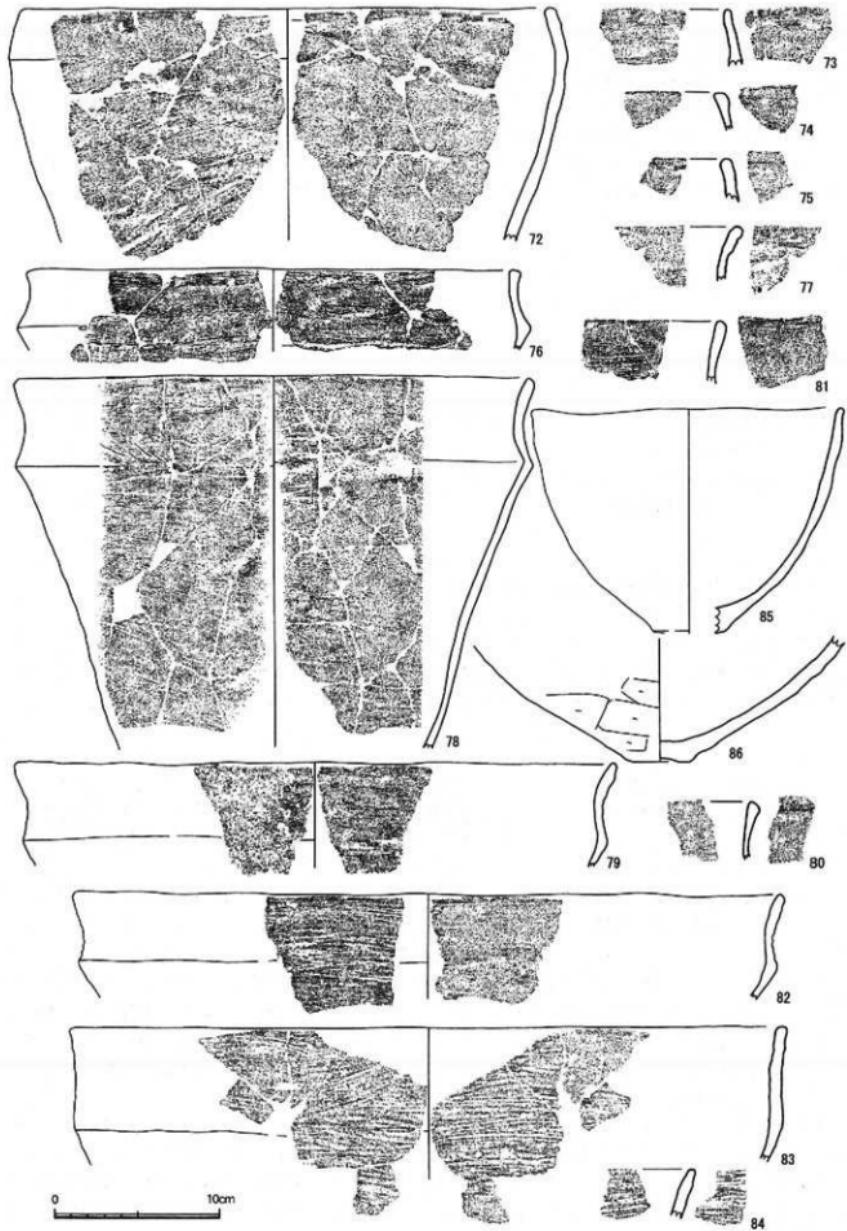
第22図 00-1 A区2トレンチ  
土坑3造構実測図



第23図 00-1 A区2トレンチ 土坑3出土遺物(1)



第24図 00-1 A区2トレンチ 土坑3出土遺物(2)



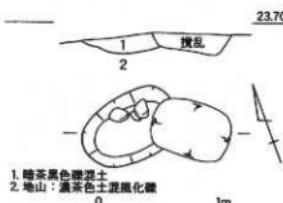
第25図 00-1 A区2トレンチ 土坑3出土遺物(3)

72~84は、無文の深鉢である。85は鉢である。86は鉢の底部で、凹み底である。

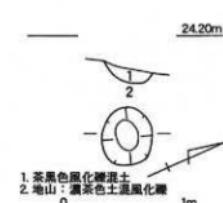
土坑4は、A区3トレンチ中央部の地山面で検出した。東西0.80m、南北0.45m、深さ0.12mを測る。遺物は、サヌカイト剥片、縄文土器が出土したが、図示できる遺物はなかった。

ピット3は、A区1トレンチの地山面で検出した。直径0.44m、深さ0.11mを測る。遺物はサヌカイト剥片、縄文土器が出土したが、図示できる遺物はなかった。

ピット4は、A区2トレンチに位置する。直径0.29m、深さ0.09mを測る。遺物は、サヌカイト剥片、チャート剥片、縄文土器が出土したが、図示できる遺物はなかった。



第26図 00-1 A区3トレンチ  
土坑4遺構実測図



第27図 00-1 A区1トレンチ  
ピット3遺構実測図



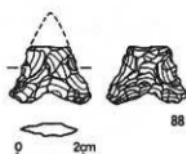
第28図 00-1 A区2トレンチ  
ピット4遺構実測図

なお、縄文時代の遺物が、後世の遺構に混在していたものがあり、これらの縄文時代に関する出土遺物について、以下に言及する。

A区2トレンチで検出した土坑2とピット5は、弥生時代以降の遺構である。87は、土坑2から出土した浅鉢の口縁部で、宮窓2式に比定できる。88・89は、ピット5から出土した。88はサヌカイト製の凹基無茎式石鏃である。89は凸帶文土器の深鉢で、滋賀里IV式期に属する。



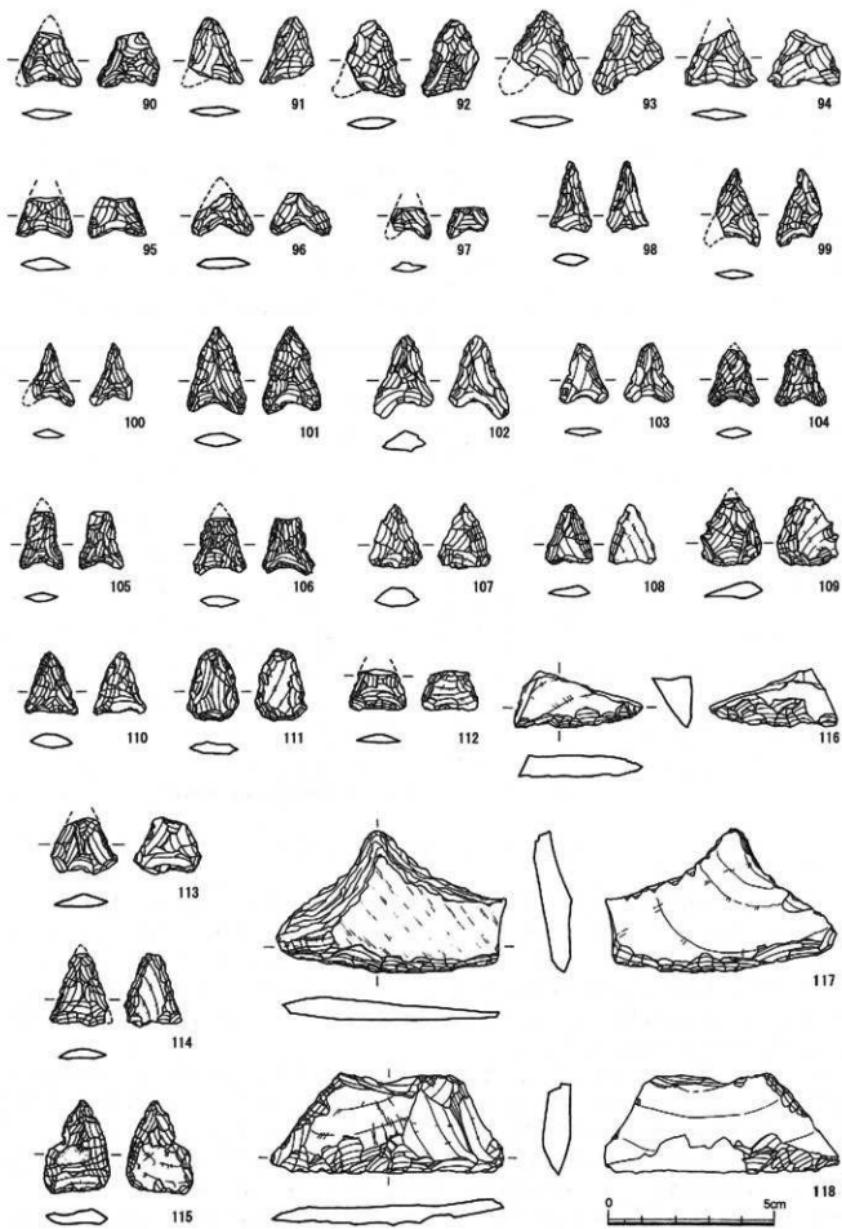
第29図 00-1 A区2トレンチ  
土坑2出土遺物



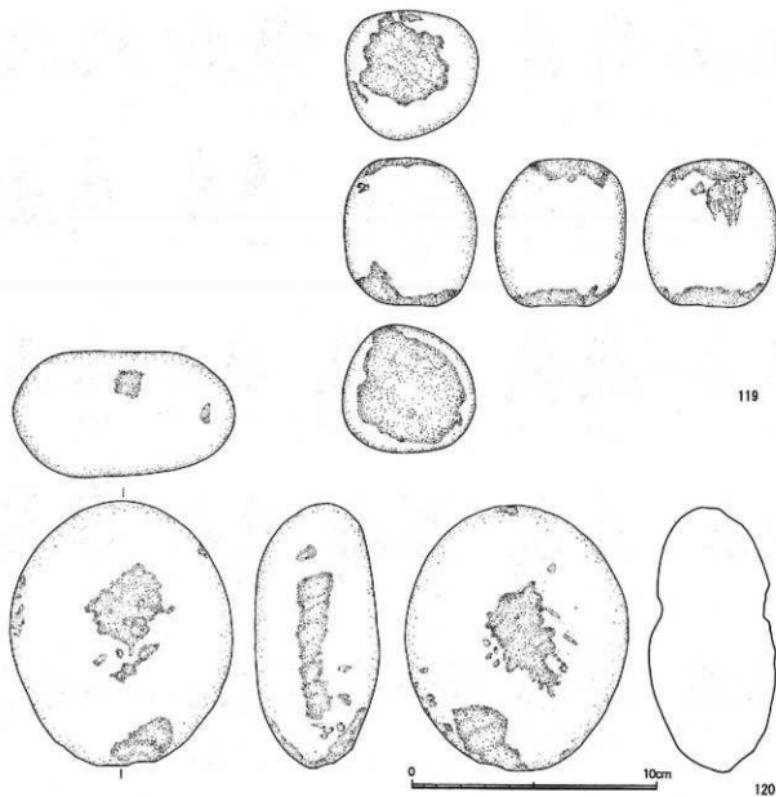
第30図 00-1 A区3トレンチ  
ピット5出土遺物

90~218は、落ち込みから出土した遺物である。A区1トレンチの北端から2・3トレンチまで広がる落ち込みは、多数の縄文時代にあたる遺物が出土しているものの、最下層において近代期の遺物が出土しており、同時期まで整地が行われていたようである。90~106は、凹基無茎式石鏃で、107~115は平基無茎式石鏃で、いずれも石材はサヌカイトである。116~118は、サヌカイト製のスクレイパーである。119・120は敲石で、和泉砂岩製である。

121~130は、中期後葉から後期前葉にあたると考えられる土器である。121~123は深鉢で、四ツ池式に比定できる。124は深鉢の胸部片で、北白川上層式1期と推定する。125は深鉢で、北白川上層式2~3期であると考えられる。126・127は北白川上層式2期の特徴を有する。128は、波状口縁深鉢の波頂部で、堀之内式系であると推定する。129・130は小片であるが、調整の特徴から、129は中期末、130は後期前葉であると考える。



第31図 00-1 A区 落ち込み出土遺物(1)



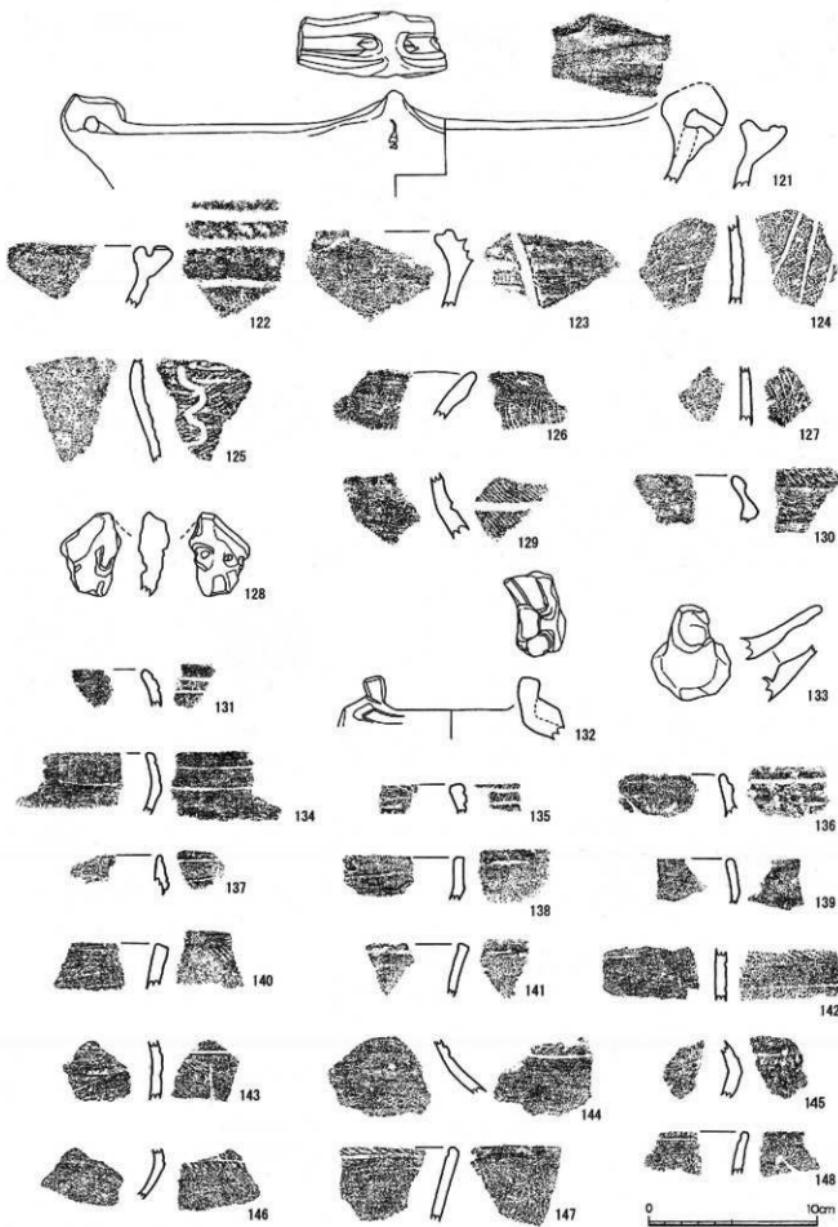
第32図 00-1 A区 落ち込み出土遺物(2)

131～148は、後期中葉にあたる土器である。131は深鉢の口縁で、一乗寺K式に比定できる。132・133は注口土器で、一乗寺K式から元住吉山I式と考えられる。134～143は鉢の口縁部、144～146は注口土器で、元住吉山I式にあたる。147・148は深鉢、元住吉山I式もしくはII式に比定できる。

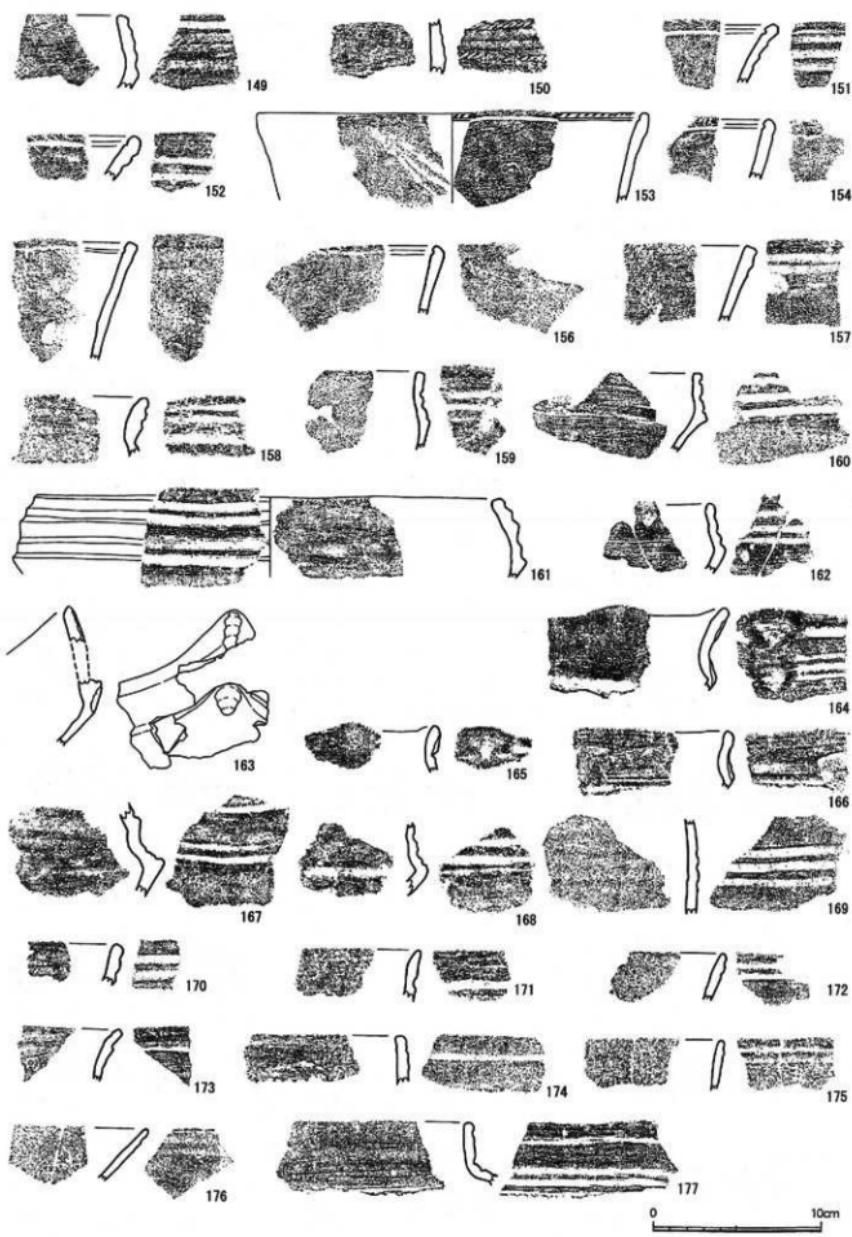
149～177は、後期後葉～末葉に属する土器である。149は浅鉢の口縁で、150は浅鉢の胸部である。149・150は同様の文様構成をとり、元住吉山II式に属する。151～154は、広口の深鉢ないし鉢であり、元住吉山式もしくは宮窓式にあたる。

157～177は、後期後葉の宮窓式で、落ち込み出土土器の主体を占める。159は深鉢で、160～162は浅鉢であろう。163～174は深鉢で、170～173は外反口縁である。175は鉢で、176は口縁が大きく開く器形で、浅鉢ないし鉢の可能性がある。177は直立する口縁がある器形で、注口土器の可能性がある。

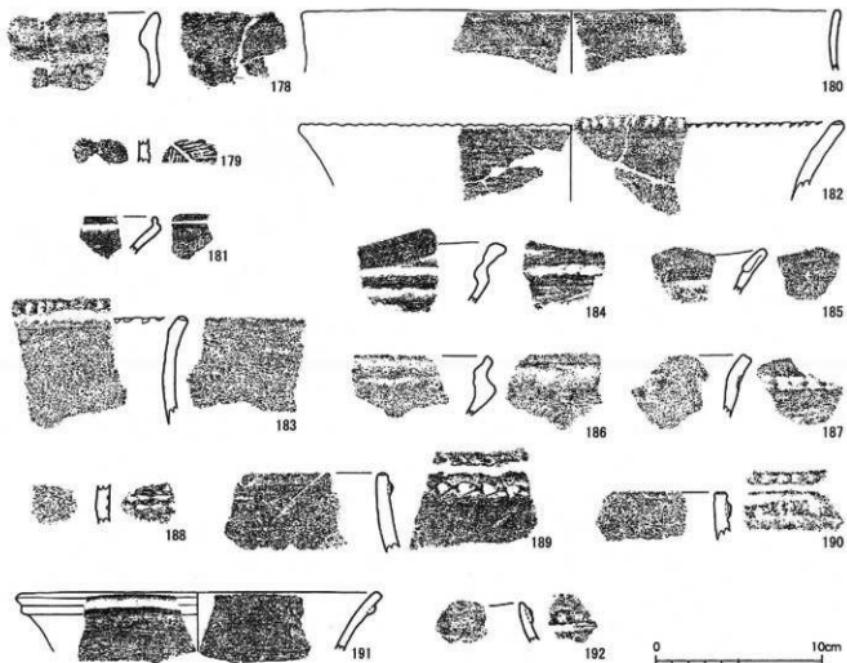
178～188は、後期末葉から晩期中葉の一群である。178は、浅鉢で滋賀里I式であろう。179は、滋賀里II式の浅鉢の可能性が高い。180は深鉢で、181は浅鉢である。180・181は滋賀里IIIa式にあたる。182・183は深鉢で、篠原式に該当する。184～186は浅鉢である。187・188は、外面口縁部や頸部に半截竹管の刺突を有し、これは瀬戸内地域の原下層式や谷尻式、前池式に特徴的に認められる。



第33図 00-1 A区 落ち込み出土遺物(3)



第34図 00-1 A区 落ち込み出土遺物(4)



第35図 00-1 A区 落ち込み出土遺物(5)

189～192は、晚期後葉の凸帯文土器である。189・190は深鉢、191は浅鉢で、これらは鬼塚期にあたり、従来の編年では滋賀里IV式に比定できる。192は鉢で、長原式にあたると考える。

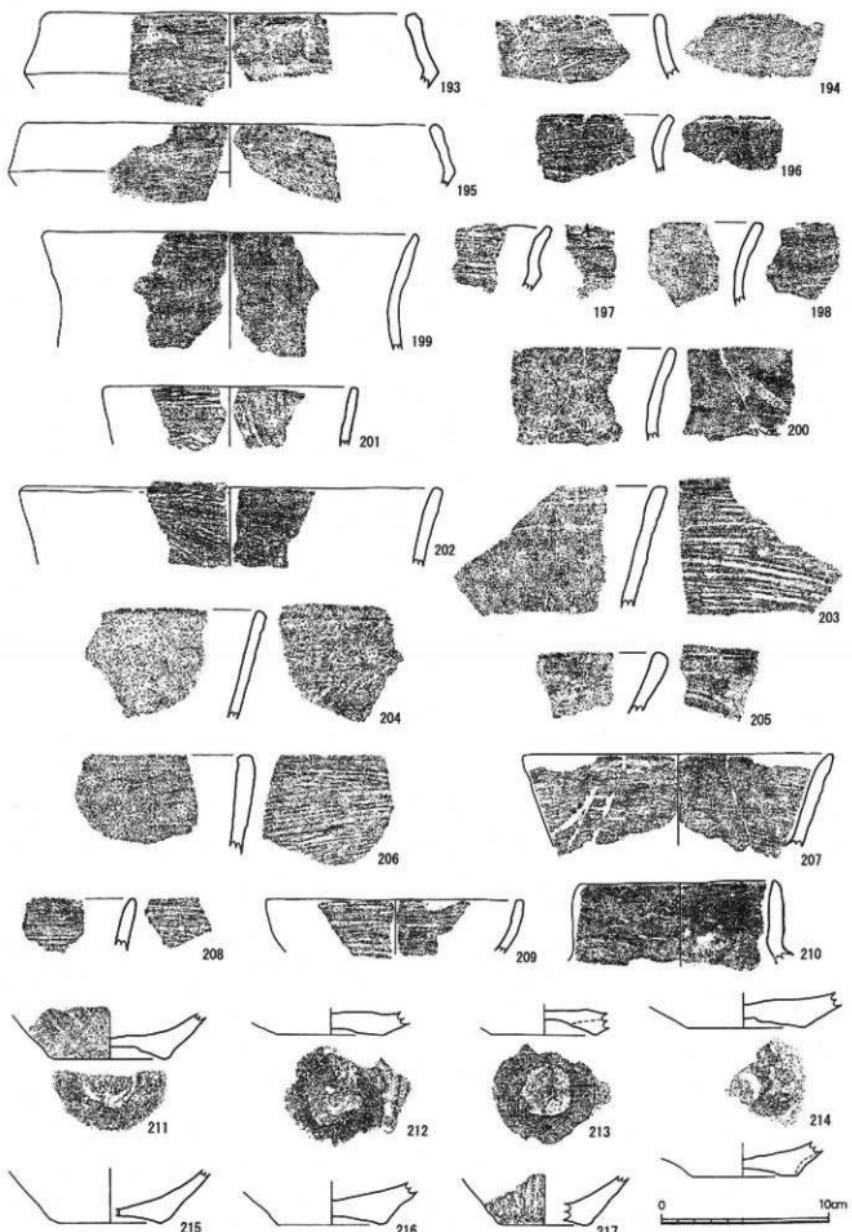
193～210は無文土器で、大半は官窯式に属するものと考える。193～208は深鉢、209は浅鉢である。210は口縁が直に立ち上がり、注口土器であると考える。211～218は土器の底部で、いずれも凹状をなし、官窯式に比定できる。

B区は、中山川の氾濫原にある。A区と同様に縄文時代の包含層はないが、近世期の包含層には縄文時代の遺物が混じっていた。219は石器の未成品で、サヌカイト製である。

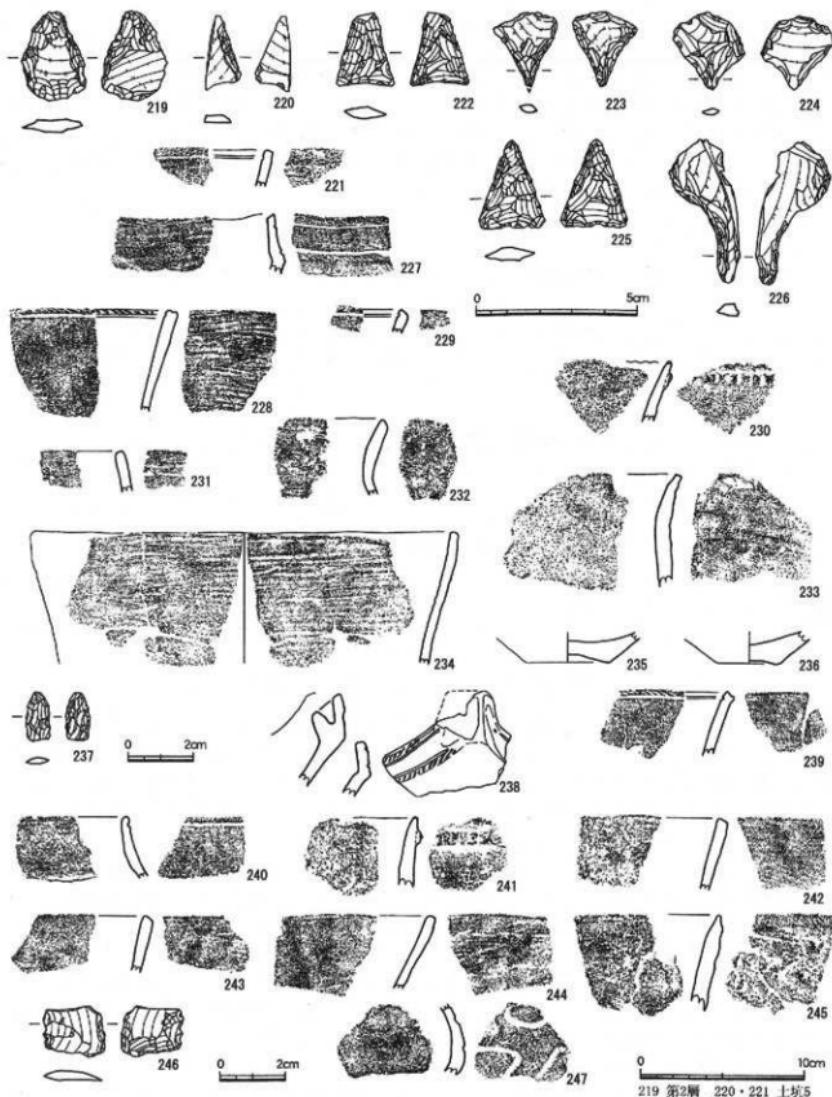
B区では、縄文時代の遺構は検出されていないが、縄文土器が他時代の遺構から混在して出土しており、これらの出土遺物について、以下に言及する。

220・221は、近世期以降に属する土坑5から出土した。220は、サヌカイト製の二次加工剥片である。221は深鉢で、官窯式に該当する。

222～247は、自然河川から出土した縄文時代の遺物である。この自然河川は、4層からなり、男里川の支流である中山川の旧河道であると考えられ、多くの弥生土器が出土している。222～224は、第1層から出土した。222は平基無茎式石錐、223・224は石錐で、いずれもサヌカイト製である。225～236は、第2層から出土した。225は平基無茎式石錐、226は石錐で、共にサヌカイト製である。227～236は縄文土器である。227は深鉢で、元住吉山I式に比定できる。228は、広口の深鉢ないしは浅鉢で、元住吉山II式であろう。229・230は深鉢で、229は官窯I式、230は滋賀里IV式に該当する。231～234は無文土器の深鉢である。235・236は底部が凹状を呈し官窯式に比定できる。



第36図 00-1 A区 落ち込み出土遺物(6)



第37図 00-1 B区出土遺物

219 第2層 220・221 土坑5  
222~247 自然河川

237~245は自然河川第3層から出土した。237は柳葉形の石鎌であろう。238は深鉢で、元住吉山Ⅰ式に比定できる。239は深鉢か鉢で、元住吉山Ⅱ式にあたる。240は深鉢で、元住吉山Ⅱ式～宮窓1式である。241は深鉢で、船橋式にあたる。242～245は無文土器の深鉢である。246・247は自然河川第4層から出土した。246はサヌカイト製の楔形石器である。247は深鉢で、中期末葉～後期初頭と考えられる。

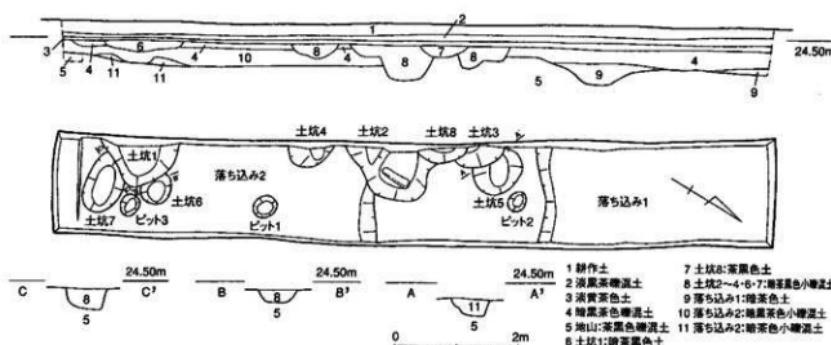
#### 4. 00-4区（第38図）

範囲確認調査として27.0m×1.0mのトレンチを設定し実施した。府センターによる発掘調査区の西側にあたるが、遺構の検出は顕著でない。地山直上である第4層から、少数ながら縄文土器が出土しており、図示が可能な遺物はないが、縄文時代の包含層と考えられる。その他、第2層は近世期、第3層は中世期の堆積である。第4層上面で検出した土坑1基から縄文土器が出土している。

土坑1は、東西0.46m以上、南北1.20m、深さ0.47mを測る。遺物はサヌカイト剥片、縄文土器が出土したが、図示できるものはなかった。

#### 5. 01-1区（第39～45図）

当遺跡の南部に位置する。範囲確認を目的として11.8m×1.7mのトレンチを設定し、調査を行った。



第39図 01-1区 トレンチ平面図・断面図

基本層序において、第2層は近世期、第3層は中世期、第4層は縄文時代の包含層であった。縄文時代の遺物は、第3層からも出土している。248～264は第3層から、265～270は第4層から出土した。248・249・265は石鏃、250・251はスクレイバーで、ともにサヌカイト製である。252～264・266～270は深鉢と浅鉢で、晚期前葉～中葉に属する。252は深鉢で縦原式に該当する。260は有文のポール形浅鉢で、滋賀里Ⅱ式と思われる。270は縦原式文様を呈する浅鉢である。

遺構は土坑が8基、ピットが3基、落ち込みが2ヶ所検出され、これらは全て縄文時代の遺構である。

土坑1は、西側が未検出で、東西0.70m以上、南北1.30m、深さ0.18mである。遺物はサヌカイト剥片、縄文土器が出土した。271は深鉢で、晚期前葉に属するものと考える。

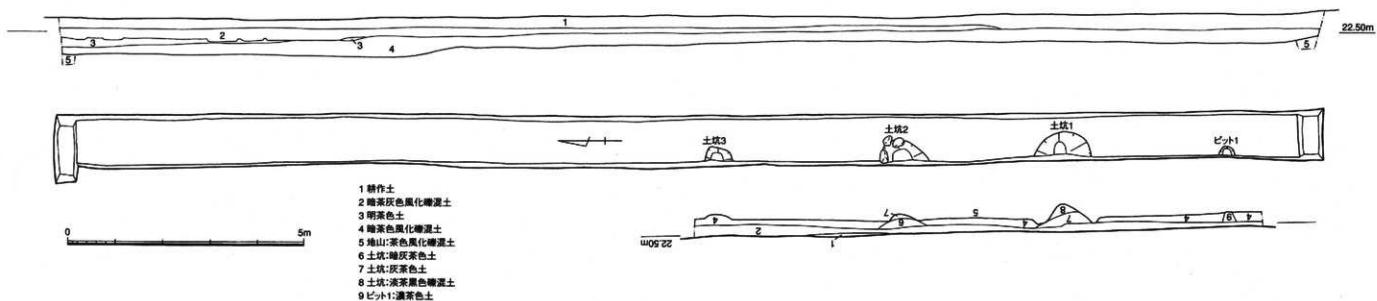
土坑2は、西側が未検出で、東西1.05m以上、南北1.50m、深さ0.58mを測り、不定形である。土坑内には右が据えられており、底部には長さ0.50m、幅0.10mの石が置かれていた。遺物は縄文土器、サヌカイト剥片、骨片が出土した。骨片は全て焼成を受けており、人骨と判明したものもあった。272～291は、縄文土器の深鉢ないし浅鉢で、晚期前葉～中葉に属すると思われる。272・273は深鉢で、縦原式に該当する。291は縦原式文様を呈する浅鉢である。

土坑3は、西側が未検出で、東西0.35m以上、南北0.80m、深さ0.36mである。遺物はサヌカイト剥片、縄文土器が出土した。

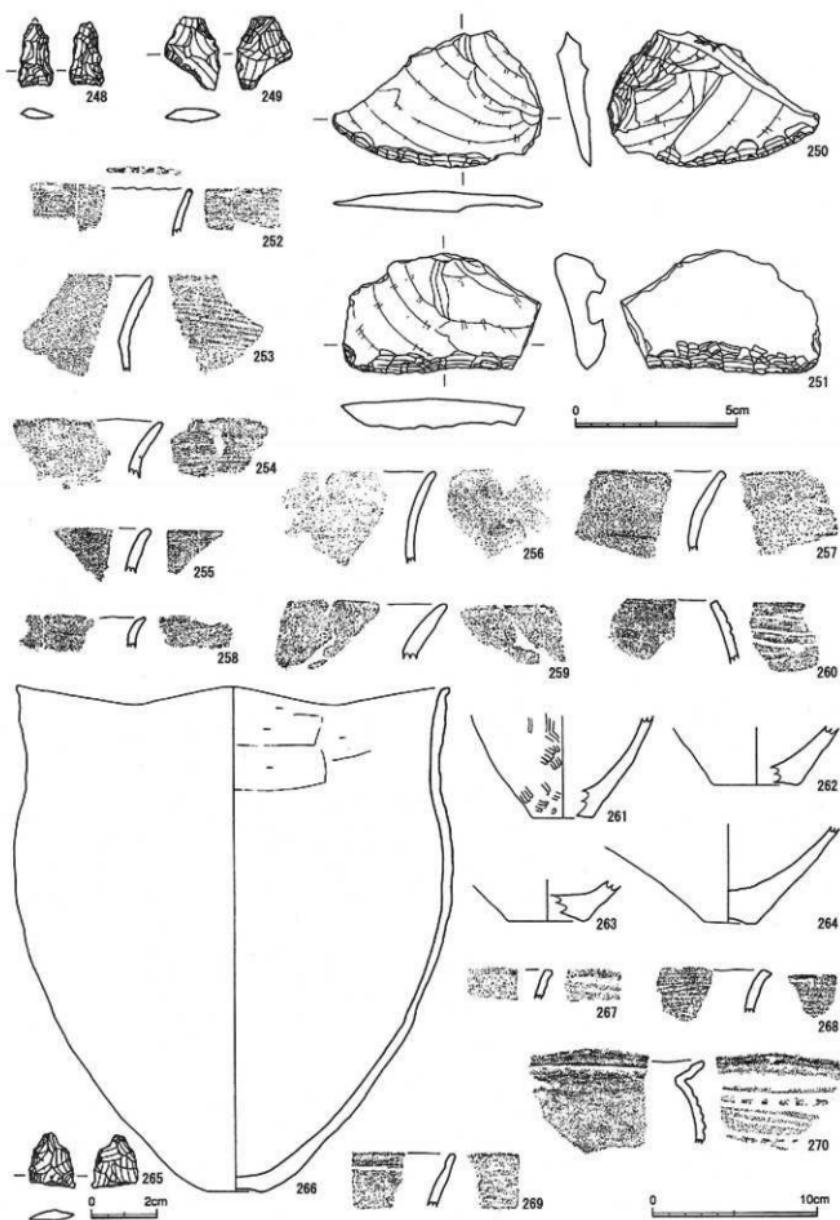
土坑5は、西側が未検出で、東西0.85m以上、南北0.80m、深さ0.28mである。縄文土器が出土した。

土坑6は、西側が未検出で、東西0.60m以上、南北0.42m、深さ0.20mで、楕円形を呈する。遺物は縄文土器が出土した。

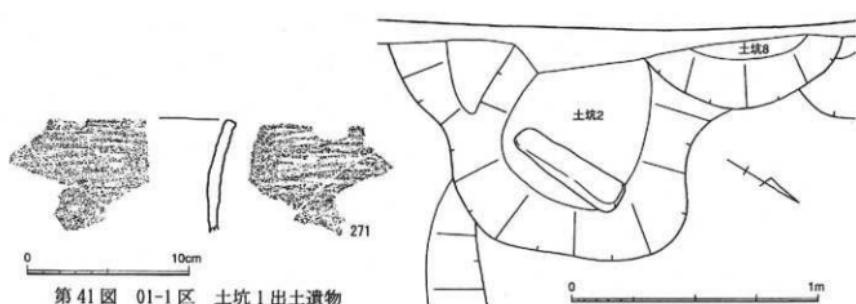
ピット1は、直径0.37m、深さ0.23mである。遺物はサヌカイト剥片、縄文土器が出土した。



第38図 00-4区 平面図・断面図

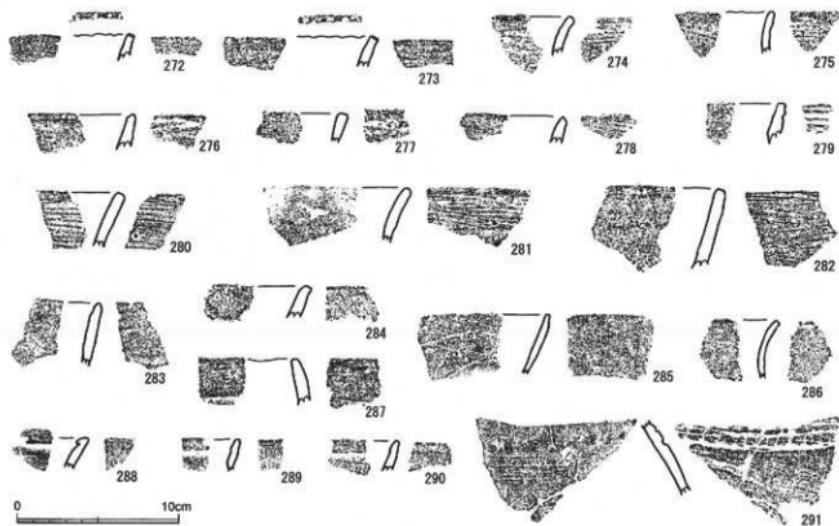


第40图 01-1区 包含层出土遗物

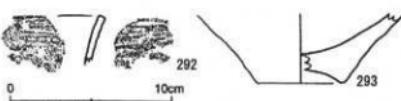


第41図 01-1区 土坑1出土遺物

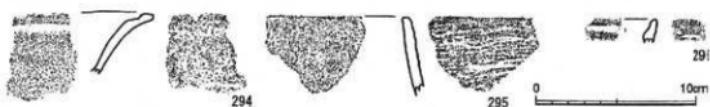
第42図 01-1区 土坑2平面図



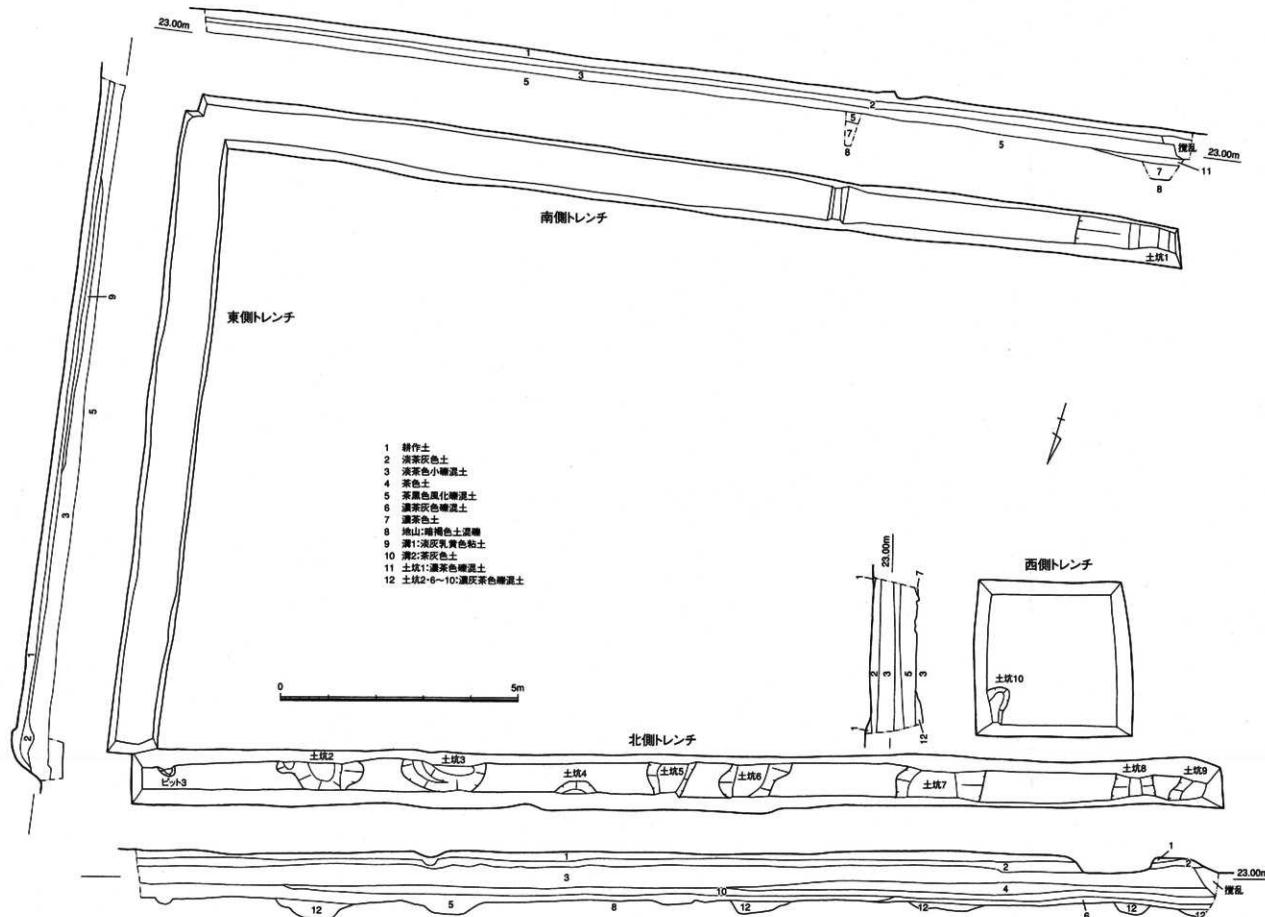
第43図 01-1区 土坑2出土遺物



第44図 01-1区 落ち込み1出土遺物



第45図 01-1区 落ち込み2出土遺物



第46図 03-3区 下層平面図・断面図

落ち込み1は、トレンチ北側で検出した。遺物はサヌカイト剥片、縄文土器が出土した。292・293は縄文土器、293は底部にあたり、底の形は凹状をなす。後期後葉～晚期前葉にあたるものと考える。

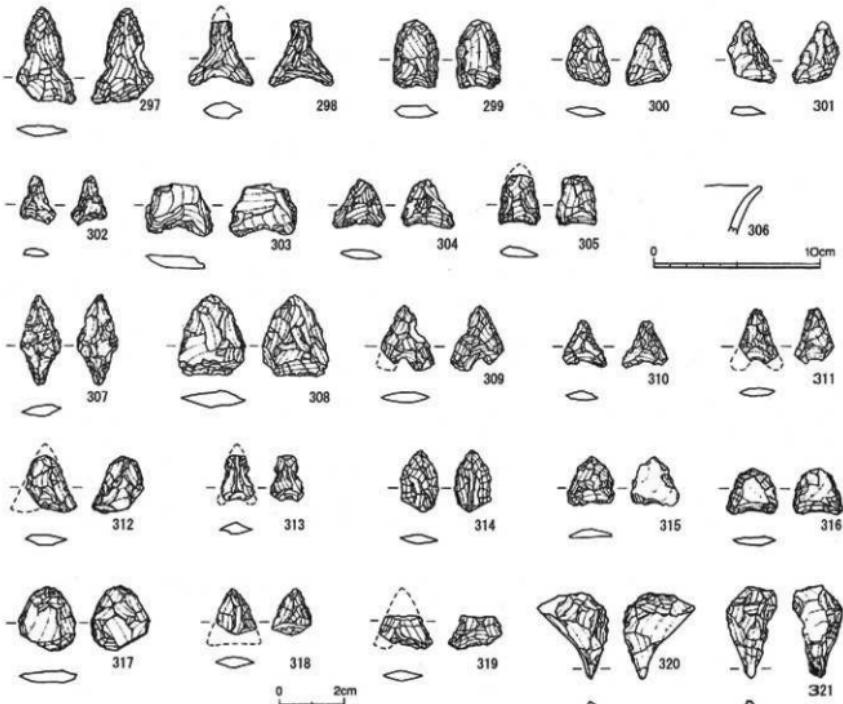
落ち込み2は、トレンチの南側で検出した。埋土の上層は、暗黒茶色小礫混土で炭化物を含んでいた。遺物は、2層ある堆積の両方から縄文土器が出土している。294～296は、上層から出土した縄文土器で、後期後葉～晚期前葉に該当する。

以上に記した遺構は、出土遺物より縄文時代に属することが判明したが、遺物が出土しないその他のすべての遺構においても、埋土から土坑やピットが縄文時代の遺構である可能性があげられる。埋土が暗茶黒色小礫混土である遺構は、土坑4・7、ピット2・3で、埋土が茶黒色土である遺構は、土坑8である。

#### 6. 03-3区（第46～48図）

遺跡南部に位置する。調査区に、「コ」字状のトレンチ、方形のトレンチを設定した。

当調査区では縄文時代の包含層が確認されていない。第2・3層が近世期、第4層は中世期、第5・6層は平安時代、第7層は遺物が出土していないので不明である。第2～6層では、他時代の遺物に混じり、サヌカイト剥片、縄文土器が出土している。297～306は、第2層から出土した。297～305は石礫で、すべてサヌカイト製である。306は縄文土器である。307～321は、第3層から出土した。307～319は石礫、320・321は石錐で、サヌカイト製である。



第47図 03-3区 包含層出土遺物

当調査区では地山面において、縄文時代と平安時代の遺構が検出された。以下では、縄文時代の遺構のみを掲載する。なお、これらの遺構から出土した遺物は小片のため図示し得なかった。

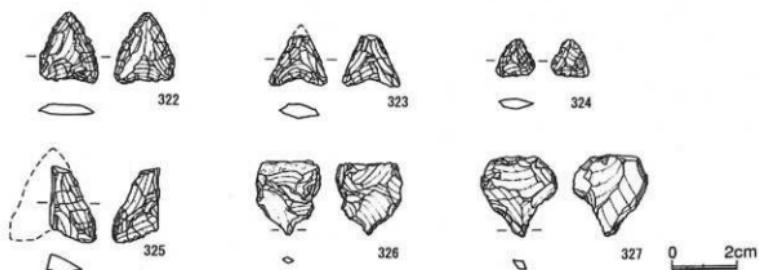
土坑7は、東西1.80m、南北0.80m以上、深さ0.14mである。遺物は、サヌカイト剥片が出土した。

土坑8は、東西0.90m、南北0.80m以上、深さ0.24mである。遺物は、サヌカイト剥片が出土した。

土坑10は、東西0.90m、南北0.80m以上、深さ0.14mで、埋土は土坑7と同様であり、位置から考えても、土坑7と10は同じ遺構である可能性が指摘できる。遺物は縄文土器が出土した。

以上に記した遺構は、縄文時代に属するものと考えるが、遺物が出土していない遺構においても埋土の共通性から、さらに3基の土坑が縄文時代の遺構である可能性がある。土坑2・6・9は濃灰茶色礫混土が堆積しており、縄文時代と判明している遺構の埋土と同様である。

また、溝2は茶灰色土が堆積する中世期の遺構であるが、中世期の遺物に混じってサヌカイト製石器が出土しているので掲載する。322～325は石鏸で、326・327は石錐である。



第48図 03-3区 溝2 出土遺物

#### 第4節 調査結果の小結

阪南市教育委員会が実施した調査成果は、第1表に掲載した通りである。これら約60地点の調査は、大半が小規模なものであるが、調査区は遺跡内に散在しており、北部での調査事例が少ないものの、ある程度遺跡の状況を伺い知ることが可能である。

向出遺跡において、中央部と南部を区画する現況で1m前後の段差が東西に走るが、縄文時代の遺構はこの段差より南側で多く検出されており、遺跡南部に集中するということになる（以下は便宜上、段差より南側を南部域と呼称する）。なお、段差は北側が低く、南側が高い。

07-10区では、縄文時代の遺構は見られず、地山面に中世期の遺構が広がっていた。07-10区の南側に位置する03-3区では、縄文時代の遺構が段差の際で検出されている。08-4区では、段差に対して垂直方向のトレンチ2ヶ所を段差の上下に設置し、調査を行った。両トレンチには堆積土に共通性がなく、段差上には平安時代まで遡ると思われる整地土が見られ、段差下には中世期の堆積があり、縄文時代と判明した遺構はなかった。以上のように、縄文時代の面を良好に残す箇所は少ないが、そうであっても遺構の中心的な部分は段差を画して南側の、南部域にあたるようである。遺構形成の復原ないし、遺構の残存状況については、矢野氏によって削平状況も踏まえた緻密な分析が行われているので、後に掲載するご考察を参照されたい。

向出遺跡の多くの遺構は、土坑やピットに限られ、また配置にも規則性がなく、その性格は不明であると言わざるを得ない。そこで、以下は遺構の属する時期を中心に取上げ、遺跡の変遷を追う（第49図）。

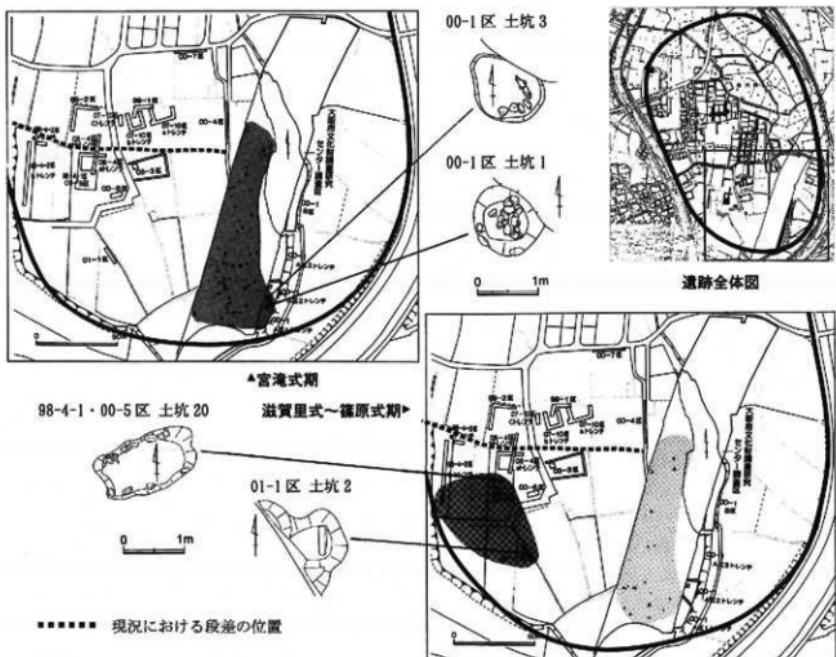
00-1区では、縄文時代以降にあたる包含層や、落ち込み、自然河川から、多くの縄文時代の遺物が出土している。縄文土器は、古くは四ツ池・広瀬土坑40段階式期から、新しくは長原式期に至るまで、極めて長い時期にわたるものである。これらの遺物からは、各時期の土地利用があつたことが推察される

が、当市教育委員会における既往の調査では、後期中葉の元住吉山Ⅰ式期より遡る遺構は確認しておらず、活発に活動が開始された時期は今のところ、元住吉山Ⅱ式期～宮滝式期であると思われる。

00-1区では、宮滝式期に属する遺構がまとまって検出されている。府センター調査区の様相を追認する状況であると言えよう。2基の土坑からは骨の出土があり、墓の可能性がある。第49図の左上図では、これら宮滝式期の遺構が分布する範囲をトーンで示す。調査区中央部には篠原式期に属する遺構が1基あるものの、群を成さず、落ち込みの影響もあり、当時期の状況は不明である。03-3区は段差付近に位置し、縄文時代の遺構を数基検出したが、時期を示す土器が伴わず、不明である。

南部域でも西側は、滋賀里式期に属する遺構が多い。98-4-1・00-5区では、大形かつ不定形の土坑やピットを中心して検出した。そのうち、時期が判明した遺構は数基であるが、埋土の共通性から50基に近い遺構は、滋賀里式期に属する可能性が高い。98-4-2区では、落ち込みの下層が縄文時代に該当し、晚期前葉の土器が出土している。01-1区で検出された遺構も、晚期前葉のものが多く、土坑2は篠原式で晚期中葉に該当する。第49図の右下図では、これら滋賀里～篠原式期の範囲を濃いトーンで示した。府センター調査区では、同図に薄いトーンで示す範囲に滋賀里Ⅰ式期の遺構が散在し、宮滝式期に比べ減少傾向にある。これらの状況から、滋賀里Ⅰ～Ⅲa式期や篠原式期においては、南部域でも西側の地域に活動の中心を設けたことがわかる。

南部域中央部の空白部分にも縄文時代の遺構が広がる可能性は高い。以上のことと踏まえると、向出遺跡の核は、この未調査部も含めた南部域であったと考えられる。



第49図 向出遺跡南部域における遺構の変遷  
府センター調査区部分は、報告書（山元ほか2000）第41図を転用

## 第5節 調査成果からみた遺跡の性格

向出遺跡では、府センターの調査で1600基を超える縄文時代の遺構が検出され、中には土坑墓が含まれていると認識された。その後、阪南市の調査によって、00-1区の土坑2基から人骨が出土し、墓ないし何らかの儀礼をおこなった遺跡とする裏づけがなされ、現在に至る。また、98-4-1・00-5区では長方形を呈した配石墓と考えられる晚期初頭の遺構を検出したことから、全体では後期中葉から晚期後葉の墓および関連遺構が形成されていることになる。

一方、用途が不明な土坑やピットが多数を占め、堅穴住居や平地式住居の検出は見られず、生活の痕跡に関する遺構は全く確認されていない。府センター調査区では、炉との関わりが考えられる焼上、焼粘土塊は出土しているものの、既往の調査全体を通しても、居住を直接的に示す資料は認められない。

向出遺跡は西日本の中でもとりわけ長期的に墓が営まれた遺跡であるが、これらの墓に埋葬された人々はどの地に住居を構え、そしてどのような集団であったのか。また、葬送や儀礼の在り方はどのようなものだったのだろうか。埋葬施設はあるが住居遺構がないという向出遺跡の現状を多様な視点で検討することにより、縄文時代後晩期の社会背景の復原を試みる資料として当遺跡を活用していただきたい。

## 第6節 保存活用事業に関する経過

向出遺跡の様相が明らかとなった府センターの調査以後の保存や活用に係る協議や検討経過について述べることとする。

府センターにより、西日本最大級の縄文時代土坑墓群として位置付けられ、将来的に史跡として指定される可能性が示唆されたことから、国土交通省（旧建設省）及び大阪府教育委員会、阪南市との三者協議により、第二阪和国道建設予定道路の一部設計変更を行い、遺構の現状保存を可能な限り実施することとなった。具体的には、縄文時代の遺構の損壊を防ぐため、高架道路部分については橋脚の設置箇所を変更し、遺構部分に鉄板を敷いて埋め戻しを行い、平坦道路部分についても一部区間で切土を行わずに施工した。損壊せざるを得ない重要遺構については、移築保存に対応できるよう遺構の削ぎ取りを行った。また、高架下のスペースを利用した簡易公開施設等の整備計画を検討し、将来の4車線化工事を見据えて遺跡内に限り追加的に橋脚工事を実施した。

さらに、国土交通省との協議により、歴史街道推進協議会が推進している「平成12年度歴史街道モデル事業整備プラン策定地区」の指定を受け、第二阪和国道周辺を中心に阪南市全体を見据えた歴史・文化・自然資源を活かしたまちづくりの方向性を検討し、市内全域に4つのゾーンを設定、それぞれのゾーンの特徴を活かした整備計画として、平成13年（2001）年3月に「阪南市歴史街道整備プラン」として取りまとめている。このうち向出遺跡は「自然田ゾーン」に含まれ、ゾーン内におけるモデル事業実施の拠点として位置付けられている。事業例としては、国の重要文化財である波太神社や、玉田山古墳群（1号墳は大阪府指定史跡、2号墳は阪南市指定史跡）とともに案内板などのサイン計画をはじめ、ゾーンシンボルの創出として、史跡指定予定範囲の確定と整備および活用、さらに「道の駅」や隣接河川の水辺環境整備等というような複合的な整備計画が立案された。

また、この「阪南市歴史街道整備プラン」と同じくして、平成13（2001）年3月に策定し、将来のまちづくりを見通した市の施策方針を示した現行の「阪南市総合計画」において、「歴史文化を活かす地域環境形成プログラム」計画のひとつとして、「向出遺跡をはじめとする第二阪和国道周辺地区的整備」を明記し、「新たな歴史空間などの創出を計画的に行い、いつまでも市民が誇りと愛着を持つことができるまちづくりを推進する」とし、向出遺跡を対象とした様々な施策も打ち出した。

しかし、向出遺跡はこうした計画に明記されながらも、これまでに具体的な取り組みが実行されていない。これらの要因としては、最終的な目標である史跡指定のためには、周辺地域の土地所有者の理解と協力が何よりも必要であり、かつ保存と活用に伴う整備といった事業展開に要する経費的な問題があった。その後、平成19（2007）年に民間開発事業の動きがあり、文化庁や大阪府教育委員会等の関係機関との協議を経て、現在に至る。

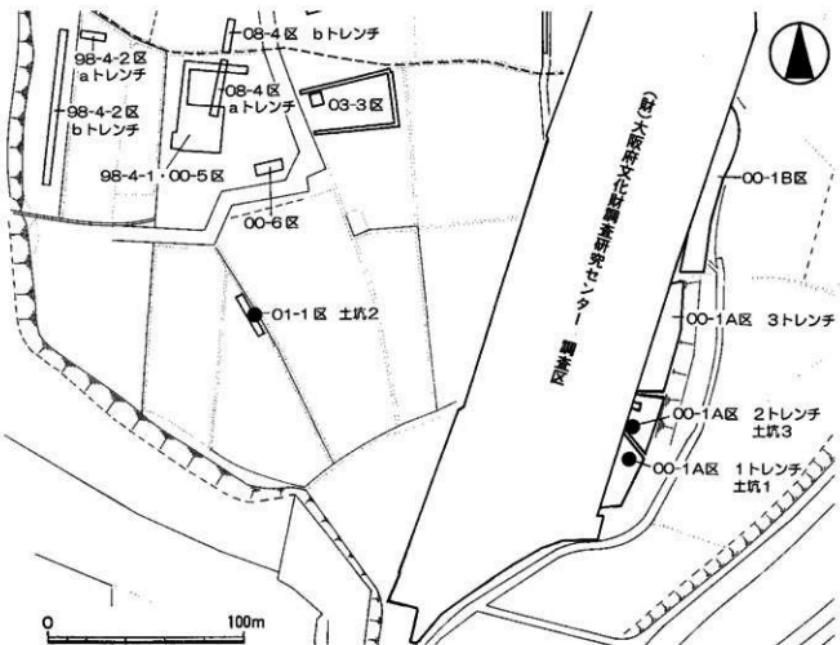
### 第3章 出土骨についての所見

安部 みき子（大阪市立大学大学院 医学研究科教授）

#### 1. 向出遺跡出土の焼骨

向出遺跡から出土した縄文時代の骨片は全てが焼骨で、数mmの骨細片となり、保存状態は悪かった。焼骨は長時間にわたり低温で焼かれたものと短時間に高温で焼かれたものでは形状が異なり、高温のものは特有のクラックができる。出土骨の多くは低温で焼かれたと思われるが、01-1区の土坑2から出土した資料番号Kの人骨にはクラックが認められた。

当遺跡の出土骨で種が同定できたものは人骨とイノシシであり、人骨は骨の骨梁の形質から、イノシシは関節部の形態から判断した。



第50図 骨片が出土した遺構 位置図（阪南市教育委員会作成）

#### 2. 00-1区出土骨の詳細

土坑3の焼骨は、人骨と思われる齒槽部の小片（資料番号A）と、イノシシの右橈骨遠位関節部の一部（資料番号C）が同定できた。しかし、資料番号B、D、Eは種の同定はできなかった。

土坑1からは人骨の焼骨片13点（資料番号F）がみられたが、部位の同定はできなかった。

旧耕作土からは大型哺乳類の海綿質のみ（資料番号G）が出土した。

#### 3. 00-7区出土骨の詳細

基本層序第2層明褐灰色砂質土からは人骨と推測される頭骨の小片（資料番号H）が1点出土している。

#### 4. 01-1区出土骨の詳細

基本層序第4層暗黒茶色疊混土からは種の同定のできなかった焼骨（資料番号I）がみられた。土坑2では、骨の部位が不明で高温で焼かれたと思われるクラックの入った人骨の破片（資料番号K）と種の同定ができなかった焼骨（資料番号J）が出土している。

#### 5.まとめ

本遺跡の出土骨は全て焼骨で、種および骨の部位の同定のできたものは少なかった。

00-1区からは人骨と哺乳動物の遺存体がみられた。

01-1区では高温で焼かれた人骨がみられた。

第2表 骨片鑑定結果一覧

資料番号	調査区	遺構・層位	種	詳細
A	00-1区	A区2トレンチ 土坑3	人骨？	歯槽の一部 焼骨
B	00-1区	A区2トレンチ 土坑3	哺乳類	焼骨片 9
C	00-1区	A区2トレンチ 土坑3	イノシシ	右桃骨遠位端の関節部の全面中央部のみ遺存 焼骨
D	00-1区	A区2トレンチ 土坑3	哺乳類	頭骨片？ 焼骨
E	00-1区	A区2トレンチ 土坑3	哺乳類	焼骨片多数
F	00-1区	A区1トレンチ 土坑1	人骨	焼骨13片遺存 焼骨
G	00-1区	A区1トレンチ 旧耕作土	大型哺乳類	海綿質のみ遺存 焼骨
H	00-7区	第2層明褐色砂質土	人骨？	頭骨片？ 焼骨
I	01-1区	第4層暗黒茶色疊混土	不明	焼骨片
J	01-1区	土坑2	不明	焼骨片
K	01-1区	土坑2	人骨	焼骨片、高温で焼かれたと思われるクラックあり

第3表 骨片出土遺構一覧（阪南市教育委員会作成）（注1）

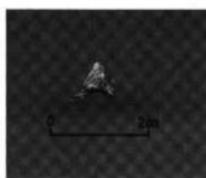
資料番号	調査区	遺構	遺構の規模 (南北×東西×深さ:m)	骨片出土土層	共伴遺物	遺構の時期	掲載 報告書番号	
A	00-1区	A区 2トレンチ	土坑3	0.95×1.30×0.25	黒色土(炭化物混)	サスカイト製石核・石器・剥片、 縄文土器、石器、炭化物	縄文時代後期後葉	
B								
C								
D		A区 1トレンチ	土坑1	1.12×1.22×0.30	黒色土(炭化物混)	サスカイト製石核・スクレイバー・剥片、 縄文土器	縄文時代後期後葉	
E								
F		A区 3トレンチ	旧耕作土		陶器、丸瓦(近世)ほか	(基本層序第2層、 近世期以降の堆積)	①	
G								
H	00-7区			明褐色砂質土	サスカイト剥片、土師器、須恵器、黒色土器、 白土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦	(基本層序第2層、 近世期以降の堆積)	②	
I	01-1区		土坑2	1.50×1.50以上×0.50	暗黒茶色疊混土	縄文土器		
J								
K					縄文土器、サスカイト	縄文時代晚期		

※掲載報告書

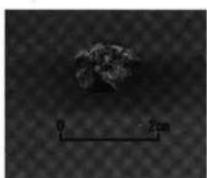
- ①『向出遺跡発掘調査報告書—00-1区—』2009（『阪南市埋蔵文化財報告』43）
- ②『向出遺跡範囲確認調査報告書』2005（『阪南市埋蔵文化財報告』36）

注

- 1) 第3表に掲載した骨片出土遺構の全てにおいて、遺構の被熱は認められていない。



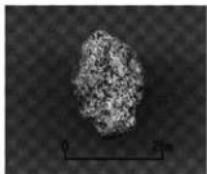
資料A



資料C



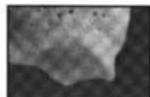
資料D



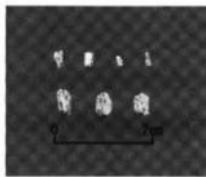
資料G



資料H



イノシシ骨  
□は資料Cの部分



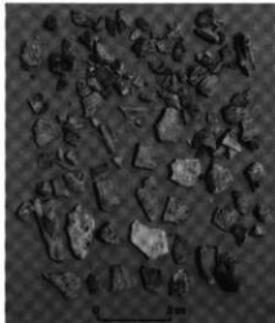
資料J



資料K



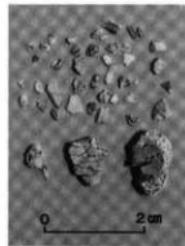
資料B



資料E



資料F



資料G

#### 第4章 評価検討委員会における考察、評価

## 第1節 向出遺跡から復原する縄文時代の葬制と社会 －向出遺跡の発掘調査成果とその意義－

岡田 憲一（奈良県立橿原考古学研究所）

### 1.はじめに

本稿では、向出遺跡の数次にわたる発掘調査の結果、発見された遺構について、多くの土坑が墓、ないしは葬送関連遺構であると認定し、その地でおこなわれたことを復原的に考察することによって、そうした墓地を媒介とした集団関係論を展望する。すなわち、向出遺跡は、縄文時代後期から晩期にかけての西日本有数の墓地遺跡であり、そこから当該期の縄文社会のあり方にせまり得ることを示す。

向出遺跡は、そもそも阪南市教育委員会（以降、「市教委」と省略）による詳細な地表踏査によって、濃密な遺物の分布が知られていた。多くの遺構を検出した大阪府文化財調査研究センター（現・大阪府文化財センター、以降「府センター」と省略）による発掘調査範囲は、その遺物散布地の東端を南北に継断することになった第二阪和国道建設に伴うものである。したがって、調査面積も広く、検出遺構の数が多いとはいえ、それが遺跡の全体を表すものでは決してない。事実、その後に実施された数次にわたる市教委の調査によっても、それ以上の縄文時代の遺構の広がりが明確に把握されている。府センターの調査範囲はその広がりのうち、3分の1程度の部分に過ぎず、こうした意味では、向出遺跡の実態は、多くが地中の中に保存されている可能性が高い。

そこで、今後の遺跡の調査、活用も視野に入れた上で、もっとも広範な面積の調査をおこなった府センターの発掘調査内容からわかるところをあらためてまとめ、その意義と今後の課題を示したい。

### 2. 向出遺跡の多くの土坑は墓であるのか？

第一の課題は、向出遺跡の数多くの土坑は、これまで喧伝されてきたように、果たして墓であるのか？ そして、その規模はどの程度のものなのか？ それを明らかにすることである。

結論から言うと、府センター調査区内において、時期判別のできた少なくとも80基程度の土坑については、縄文時代後期から晩期にかけての遺体埋葬のための所謂「土坑墓」であると考えられ、他に60基程度の葬送儀礼に関連する土坑があると推定する。

検出された土坑の内容は、大きく分けて3つある。第一は「長形土坑」としたもので、平面形態が長方形ないし長椭円形を呈し、長径80～200cm、深さ50cm以下の規模で、覆土構成の単純なもの。第二は、平面形態が円形ないし方形を呈する「正形土坑」としたもの。直径80～200cmで、深さには50cm以上のものがある。覆土構成は多様で、複数層確認できるものが多く、柱状堆積のあるものも含む。また、覆土中には、炭化物、焼上、骨片を含むことがある。第三は、所謂「ピット」と称される小穴である。それでは、これらの遺構の性格は何であるのか。

第一の長形土坑は、土坑規模、覆土構成からして、遺体埋葬用の所謂「土坑墓」と推測できる。特に府センター調査区の土坑454や、市教委98-4-1・00-5区の土坑20は、平面長方形の土坑側壁に礫が並べられ、東日本でしばしばみられる「配石墓」のようでもある（第51図1）。埋葬人骨の確認がないので、当然、確定することはできないが、土坑の形態的特徴からすれば、遺体の一・二次埋葬用の「土坑墓」である可能性が高い。また、大阪府日下遺跡、滋賀県滋賀里遺跡や長野県北村遺跡など、まとまった数の埋葬人骨のある土坑墓の規模と比較するならば、「北村領域」、「滋賀里領域」とした長径80～150cmまでの長形土坑は成人の屈葬、それ以上の「伸展領域」、「超伸展領域」としたものは伸展葬で埋葬された土坑墓であると考えられる。こうした形態、規模をもつ長形土坑の数は、あわせて126基を数える。ここから覆土中に土師器等を含む3基を除いた数、すなわち123基については、縄文時代の成人一次葬用の土坑墓の可能性があるとしてよい。なお、報告書（山元ほか2000）では、長径50～80cmの「乳幼児領域」を設定し、乳幼児を埋葬対象とした土坑墓である可能性を示した。その数は133基、覆土中に土師器等を含むものを除いた127基について、縄文時代の乳幼児墓である可能性を指摘することができる（第4表）。

第二の正形土坑は、府センターの調査報告時（山元ほか2000）や旧稿（岡田2000）において、葬送関連土坑としたものである。特に炭化物や焼土、焼けた動物骨の存在から、葬送に伴う儀礼用の土坑であると推測したが、この度、市教委00-1区の土坑1・3から、動物骨とともにヒトと同定される骨片が確認され（安部報告参照）、ますますその蓋然性が高まることになった。しかしながら、人骨の出土がすなわち墓であることを証明するわけではない。人骨といえども骨片となってしまえば動物骨との区別は難しく、それをヒトの骨として意識的に「埋葬」したのかどうかは定かでない。

このような「正形土坑」としたものの類例は、縄文時代後期から晩期にかけて散見される。規模や形態上の特徴からは、貯蔵穴とされる土坑に類似するが、一般的に「貯蔵穴」の認定が、堅果類の遺存を第一の要件とし、しばしば自然埋没の堆積特徴をみせることからすると、正確に合致するとはいえない。また、土坑の掘削時の目的と廃絶時の用途とが異なり、貯蔵穴としての利用後、廃棄行為がおこなわれたとの推測も成り立つ。しかしながら、少なくとも向出遺跡の正形土坑としたものに、堅果類貯蔵の痕跡を見出すことができず、特徴的な自然埋没の堆積状況をみせるものがない以上、それらを「貯蔵穴であった」と認定することは困難である。せいぜい可能性の指摘にとどまろう。

堆積状況の観察において、柱状堆積が確認できる正形土坑31例について、「柱穴」と認定し、何らかの地上構造をもつ施設と推測することも可能である。同形態の複数の土坑を組み合わせて建物を復原したり、散在的な立柱施設とみなすことも不可能ではない。その仮定を是とした場合、その柱径（平均61cm）や柱間（約5m）からして、かなり大きな規模の施設を想定することとなろう。しかしながら、一般的な建物の柱掘形に、炭化物、焼土、焼骨を意図的に混入するという事例は管見にして知らない。もし仮に、こうした状況を積極的に解釈するならば、設営ないしは廃絶に際して、何らかの儀礼が執り行われたとの推測も可能であり、むしろ特殊な施設であると考えることもできる。このことから、柱状堆積があるとはいえ、こうした特殊な堆積状況をみせる正形土坑は、住居などの一般的な建物を復原しうる柱掘形ではないと考えたい。

規模、形態のほか、堆積状況も加味した上で、向出遺跡の正形土坑の類例として認められるものは、大阪府池田寺遺跡や島根県平田遺跡、京都府伊賀寺遺跡などにある（第51図）。池田寺遺跡の土坑2503-00は、焼骨片中に動物のほかヒトが同定されており（安部1991）、後期初頭と時期の異なる事例ではあるが、向出遺跡00-1区の土坑1・3に共通する。ただし、前記したとおり、ヒトと動物の焼骨が混在する状況は、単なる廃棄土坑との見方も可能とするものであり、ただちに「墓」と認定することを躊躇させる。平田遺跡の例は、後期中葉のもので向出遺跡の時期に近い。成人1体分の人骨片が同定されているが、焼成の有無についての記載はない（井上1997）。動物骨の存在については触れるところがないので、破片化した人骨のみがある事例としてよからう。近年報告された京都府伊賀寺遺跡の土坑SK03からは、焼けた人骨のみが同定されている。時期は後期後葉であり、向出遺跡の時期と合致する。人骨は10個体以上の存在が指摘され、その遺存状態からは、いずれも遺体の腐敗が十分進行せず、軟部組織が残るうちに火葬に付されたと推定される（岩松・大藪2008）。報告者によると、この土坑には、複数のヒトの「死直後に焼かれた火葬」骨がまとめて埋葬されたとの解釈が示されるが、「軟部組織が残るうち」＝「死直後」との理解は性急である。土中における遺体腐敗の進行速度が遅いとの法医学的な法則（Casper's law）が適用できることすれば、ヒトの死から火化、埋葬までの間に、別遺構への埋葬、所謂「初葬（一次葬）」の過程があったと推測することも不可能ではない（注1）。その場合には、正形土坑が「再葬（二次葬）」施設としての土坑、すなわち「墓」であったとの解説も成立つ。

こうして類例を概観してみると、向出遺跡の正形土坑としたものには、単なる葬送関連土坑というのみならず、所謂「再葬墓」として利用されたものも含まれる可能性が高いと考えたい。正形土坑は長形土坑とセットをなし、長形土坑が遺体の初葬のための埋葬施設であり、正形土坑が初葬を経た再葬、あるいは葬送に関連する儀礼用の施設であると推測する。ただし、再葬という行為自体が、象徴性が高く、儀礼的行為であるがゆえに、その装置としての土坑を単純に「墓」と称してよいものかどうかについては、依然として議論の余地が残されよう。

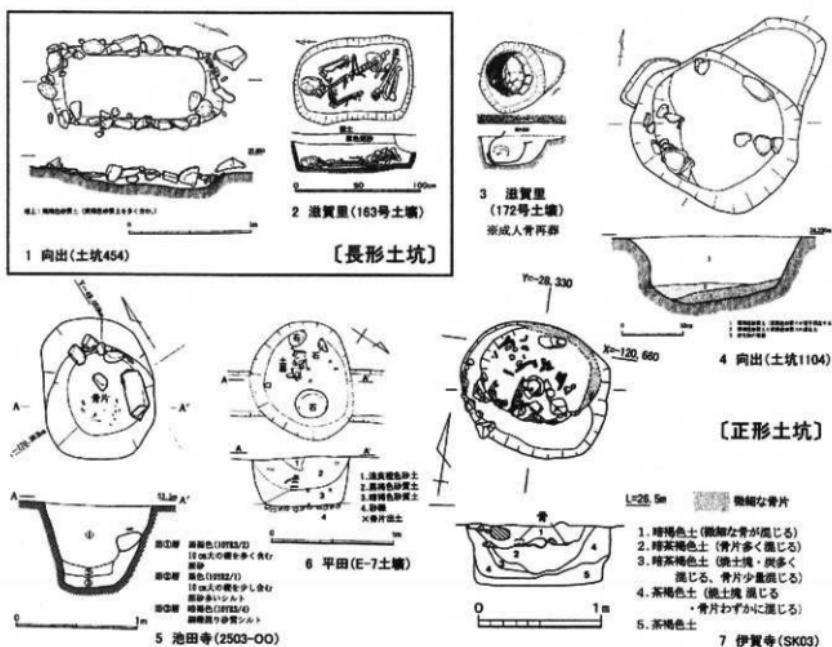
第4表 向出遺跡（府センター調査区）における土坑形態の消長

時 期 (土器型式)	長形土坑					大型正形土坑	
	乳幼児 (乳幼児)	成 人		伸展葬 (伸展)	(超伸展)		
		屈葬 (北村)	滋賀里				
I	1	0	1	0	0	1 0	
II (元住吉山式)	4	1	5	0	0	6 3	
III (宮施1式)	2	2	8	2	3	15 2	
(宮施2式)	5	2	10	3	1	16 32	
(滋賀里式)	2	2	1	0	0	3 9	
後 期 計 (含繩引不能分)	33	10	30	5	6	51 51	
晩 期 (IV)	8	7	10	2	0	19 2	
後晩期 計 (含繩引不能分)	48	21	44	12	6	83 56	
弥生以降	6	1	2	0	0	3 1	
不 明	79	19	14	6	1	119 6	
総 計	133	41	60	18	7	126 63	
		(小計)	101	(小計)	25		

(凡 例) 数値は既刊の報告書(山元ほか2000)掲載の遺跡一覧表を用いて再集計したもの。これまで公表した数値と若干の差異がある。

各時期の小計は、包含土器型式比定ができるとしても、大別時期比定が可能であったものの数値を加えている。

総計は、時代判別に関係のない各土坑形態の最大数を示すため、墓の可能性のある土坑の最大数をあらわす。



第51図 向出遺跡の主要土坑形態と参考資料

### 3. 向出遺跡でおこなわれたこと

前章で記したとおり、向出遺跡では、長形土坑と正形土坑を経時的なセットとする、初葬から再葬を伴う葬送儀礼が執り行われたと推測した。土坑各類型の年代的な推移を、土器型式を時間軸として概観しよう（第4表）。対象とする時期は、向出遺跡で確認できた縄文時代中期末から晩期末までの年代幅のうち、後期中葉（II期）から後期後葉（III期）である。なお、当然のことながら、土坑覆土中の土器の型式比定ができるものの数を数えているため、実際に存在した数はこれ以上となる。

表を一見して明らかかなことは、次の2点である。

①長形土坑、正形土坑ともに後期後葉の宮滻2式に最多となる。

②長形土坑と正形土坑とは増加傾向に差異があり、正形土坑が長形土坑に遅れて急増する。

再度確認しておくが、この2点はあくまで後期中葉から後葉までを対象として看取できることであり、晩期を加えた場合には異なる。これについては後記しよう。また、若干の留意点についても指摘しておかねばならない。まず、①については、物理的な時間軸における土器型式とは、年代的単位としては作業概念に過ぎないこと。すなわち、ここでは時間軸を土器型式に求めているため、それぞれの時間幅が等価でないことを考慮する必要がある。本来であれば、曆年代で等分した上で、各土坑の数的推移を判断することができればよいのであるが、これは実際には難しい。さらに、土器の型式比定についても、出土する破片資料からでは、細分型式にまで踏み込むことは困難である。もちろん、数少ない型式比定可能な破片資料が、その遺構の年代そのものを示すとも限らない。しかしながら、各土坑から曆年代資料を得ることは望むことができない上、遺構間の重複関係もない中、それらの年代的位置づけを図ろうとするならば、覆土中の上器型式をもって、可能性を示すしか方法がない。それゆえ、ここでは土坑覆土中の比定可能な土器型式をもって、時間軸として提示する。したがって、各土器型式における土坑数は、あくまで傾向に過ぎない。特に宮滻2式は、型式学的観点からは細分が可能である（岡田2008）、「最多」としたその数は、内包される時間の累積のためと考えることもできる。もし仮に、宮滻2式が2細分され、その土坑数も二分されると仮定するのであれば、正形土坑については変更が必要ないとしても、長形土坑では宮滻1式が最多数となるであろう。こうした理解が妥当ならば、①に掲げた長形土坑と正形土坑の最盛期を宮滻2式と限定することはできず、それは宮滻1式から同2式にかけてと訂正する必要が生じる。さらにまた、2つの土坑類型の最盛期にはズレがある。この補訂によって、先に②に示した点が、より明瞭に析出される。すなわち、長形土坑は宮滻1式から同2式をピークとして、漸次、増加、減少するのに対し、正形土坑は宮滻1式には少なく、長形土坑が減少に向かう、宮滻2式から滋賀里式にかけて多くなる。

ここで、前章で推定したとおり、長形土坑が遺体初葬用の「土坑墓」、正形土坑が再葬も含む儀礼用の葬送関連土坑であるとの理解を、向出遺跡における府センター調査区の各土坑類型の量的推移に充当してみよう。そうした場合に、この地で繰り起したことは、以下のようになる。

この空間の積極的な土地利用の開始期である後期中葉には、遺体初葬用の土坑墓を主体とし、若干の再葬を含むような儀礼用土坑が設営される。続く、後期後葉の宮滻1式の頃には、同様のことがおこなわれながらも、遺体埋葬数が増し、初葬行為のピークを迎える。続く宮滻2式の頃、遺体初葬用の土坑墓造営が引き続き積極的におこなわれる一方、儀礼用土坑の設営が急増、そして滋賀里式の頃になると、遺体初葬行為自体が減少し、儀礼用土坑の設営のみが積極的におこなわれる。

これをまとめると、当初、遺体初葬がおこなわれていたところへ、それを追うようにして再葬を含むような儀礼用土坑の設営が増していく状況が看取される。すなわち、先に想定した、経時的に初葬から再葬を伴う葬送儀礼が執り行われたとの推測は、遺構数の推移からも矛盾のないことがわかる。

なお、表には参考として、IV期とした晩期中葉から後葉の数も掲げた。長形土坑の数が比較的多いが、これは、型式比定をケズリ調整のある脛部破片によっておこなったためで、時期判別要素の多さに起因しており、後期中・後葉の数と直接対比することは難しい。また、19基の長形土坑に対し、正形土坑2基と、後者の数が明らかに少ないことがわかる。これに先の解釈をあてはめるなら、当該期には、遺体初葬行為が積極的におこなわれたのに対し、再葬を含む儀礼用土坑の設営が少ないと理解され

るが、この時期の場合には、土器埋設遺構の存在をあわせて考える必要がある。

縄文時代晩期には、「土器棺」と呼ばれる土器埋設遺構が多くある。この用途は、その名が表すとおり、一般的には土器を埋葬容器とする墓と考えられており、事実、人骨出土例も存在する。この大半が墓、ないしは葬送に関連するものであることを共通認識としても、未だ議論のある点は、その埋葬対象が乳幼児であるのか成人であるのか、そして葬送過程の初葬にあたるのか内葬にあたるのかといった部分にある。また、この議論の特徴は、出土人骨の推定年齢と棺として用いる土器の法量とを踏まえることにより、埋葬対象を乳幼児とみる場合は初葬（単葬）（前田2000）、成人の場合は再葬（中村1991）と考える傾向が強い点にある。特に棺とする土器の法量からすれば、成人の初葬墓と考えるのが困難であるのは容易に想像できる。一方、この議論で見落とされがちながら、乳幼児の再葬事例（厳密には白骨化後の埋葬事例）である。これまで滋賀県滋賀里遺跡の例よりその存在が示唆されていたが、近年調査された奈良県觀音寺本馬遺跡の埋設土器内より、解剖学的位置を保たず、並べたように検出された4歳前後の部分人骨例は、こうした事例の存在を端的に物語る（奈良県立橿原考古学研究所2009）。したがって、埋設土器内検出入骨が乳幼児に限定される東海地方は別としても、少なくとも近畿地方において、墓としての上器埋設遺構には、乳幼児、成人ともに対象とした再葬墓が含まれると考えることができる。なお、再葬とされるものには、先の觀音寺本馬遺跡例や滋賀里遺跡172号窓棺のように火化されていない白骨化した部分人骨を埋納する事例（出辺・加藤1973）のほかに、滋賀県土田遺跡では、成人と推定されるものを含む埋設土器内人骨3例に火を受けたものがある（多賀町教委2004）。

こうした点を考慮するならば、この種の土器埋設遺構が、向出遺跡で正形土坑と分類したものと同様の用途をもつ可能性を模索することもできるであろう。土器埋設遺構は、後期前葉には「埋甕」として、近畿地方にも普遍的に存在するが、後期中葉から後葉までの間に明確な形で知られず、再び晩期になって「土器棺」として多量に出現する。こうした事象に対し、後期後半の上器埋設遺構空白期をうめるものとして、「破碎土器埋納土坑」があるとの指摘（立岡2000）は、まさにその空白期にあたる向出遺跡の正形土坑の性格を考える上で示唆的である。このことから、晩期の向出遺跡において、長形土坑に対して、正形土坑が極端に少ない理由は、それにかわる土器埋設遺構があるため、そして、後期中葉から後葉においては、晩期に土器埋設遺構が担った用途を正形土坑が果たしたものと推測したい。

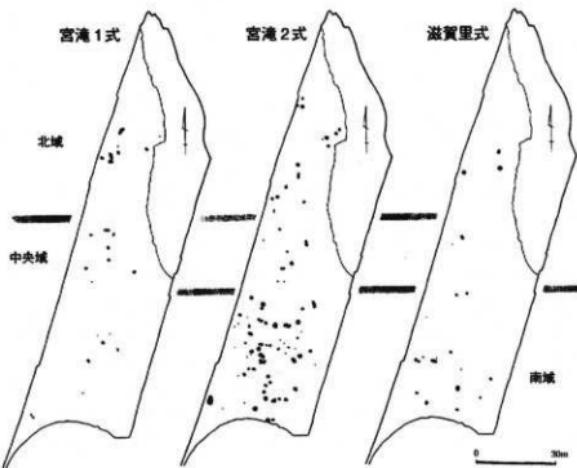
この地でおこなわれた、初葬および再葬を含む儀礼といった一連の葬送は、後期中葉以来、晩期まで、若干その形態をかえながらも執り行われていたものと考えられる。

#### 4. 向出墓地に葬られた人々

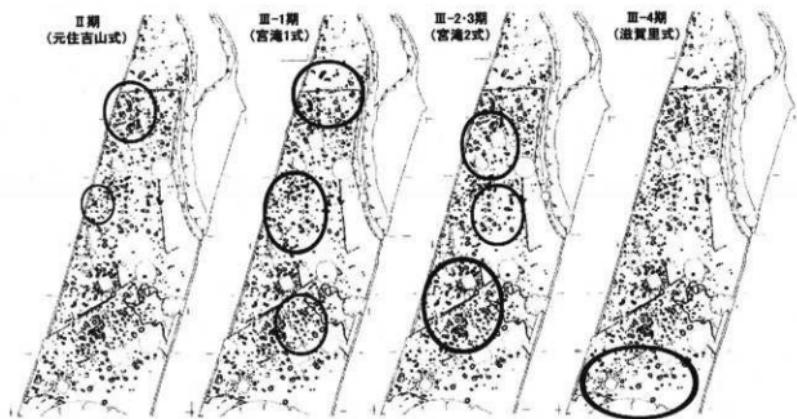
##### (1) 長形土坑の空間分布の検討

ここではまず、各土坑類型の年代的な空間分布の推移をみる。土器型式を時間軸とした全体的な遺構分布は、第52図に示した。この図をみると、一見、南北に散漫に広がりをみせるようであるが、宮滝1式土器出土土坑の分布を例にとると、北、中央、南の3箇所に、それぞれ空間地をおいて群在している様子を見て取ることができる。これを経時的にみると、元住吉山式、宮滝1式における調査区北域および中央域を中心とした分布から、宮滝2式で全域に拡散し、滋賀里式においては南域を中心にまとまるといった、分布重心の移動傾向が明瞭に看取できる。さらに、ここから長形土坑のみ抽出したものが第53図になる。この図では、年代的な空間分布の重心移動傾向は、より一層明然とする。すなわち、元住吉山式における北域を中心とした分布、宮滝1式および2式における北域、中央域、南域の3群展開、続く滋賀里式における南域への集約である。なお、より細かくみると、宮滝2式には、宮滝1式同様、基本的に3群分布を引き継ぎながらも、北域の一群が中央域に寄る傾向がある。

これらの長形土坑を遺体埋葬用の土坑墓であると認めるならば、こうした分布の偏りを「埋葬区」（林1977）、「埋葬小群」（春成1980）といった概念に対比することは許されよう。山田康弘氏は、こうした概念を整理し、「考古学的事実として数体もしくは十数体を単位とした埋葬例の数的最小単位としての“かたまり”」を「埋葬小群」と呼び、それが複数集まった「かたまり」を「埋葬群」とする（山田2008）。そし



第52図 土器型式別にみた遺構分布の推移



第53図 土器型式別にみた長形土坑分布の推移

て、個別具体的な埋葬人骨の抜歯型式および頭蓋形態小変異の検討から、「埋葬小群は、家族や世帯といった三世代間程度までにわたる小家族集団の歴史の一部が墓域に残されたもの」、「埋葬群は小家族集団よりもさらに上位の人間集団」に対比できるとの推定をおこなう（山田2008）。

向出遺跡の大きく3箇所に分かれる長形土坑の群在が、「埋葬群」、「埋葬小群」のいずれに対応させられるものかは定かでない。また、春成秀爾氏や林謙作氏の研究をうけた山田氏の推定をどこまで敷衍して論じることができるのかには問題もある。しかし、もし仮に、こうした遺構の空間的偏在に、何らかの血縁関係にある人間集団を対応させられるとすれば、向出遺跡においては、複数の人間集団によって、経時的に地点をかえていきながら、埋葬行為がおこなわれた可能性を指摘することができるかもしれない。

## (2) 長形土坑の長軸方向の検討

次に、埋葬小群とともに何らかの人間集団を反映する可能性が指摘されてきた「頭位方向」について検討する。当然、向出遺跡では埋葬人骨の検出がないので、その検討対象は土坑長軸方向になり、頭位方向の「正」、「逆」は区別できずに、同一のものとなる限界がある。

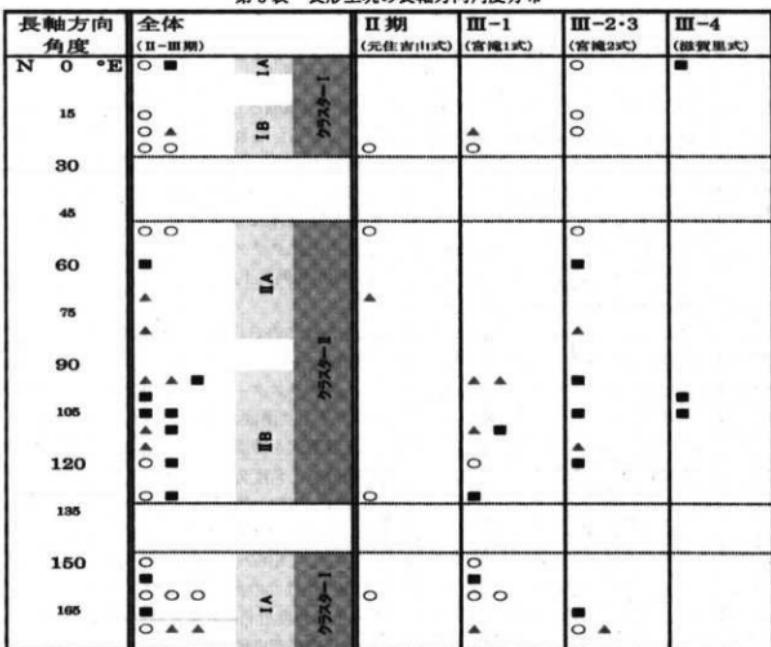
第5表には、向出遺跡長形土坑のうち、北村領域から超伸展領域としたものの長軸方向の角度分布を示した。なお、時期は繩文時代後期中葉から後葉に限っている。これを一見すると、全体のあり方としては万遍なく分布するようにみえるが、N30°～50° E付近、N135°～155° E付近の2箇所に分布の希薄な部分がある。統計学的な有意性こそ示していないものの、この空白部分を境としてクラスターIとクラスターIIの2群に区分する。クラスターIは16例、クラスターIIは18例となる。さらに細かくみると、N10° E、N90° E付近にも若干の間隙があるので、これをもとにクラスターIをIA、IB、クラスターIIをIIA、IIBと仮に区別する。この場合、IAが11例、IIBが12例、IB、IIAが各5例となるので、前二者が主要な長軸方向であると判断することができる。

同表には、先に検討をおこなった空間分布の3群別もあわせて表示した。この両者、すなわち空間分布の別と長軸方向の角度分布との相関関係は、比較的明瞭である。北域とクラスターI、中央域および南域とクラスターIIとの相関がうかがえる。さらに、各クラスターの細分との関係をみれば、北域の7割がIAおよびIBに、中央域の7割弱がIIAおよびIIB、そして南域の6割強がIIBに集中する。

さらにこうした土坑長軸方向の角度分布について、土器型式を時間軸とした変遷としてみる。先に空間分布の年代的な重心移動傾向を指摘し、ここで空間分布と角度分布の相関を上記したところであるから、長軸方向の角度分布が年代的に偏りをみせるのは、当然、推測される帰結である。詳細に追跡してみよう。元住吉山式の土坑長軸方向の角度分布は、散漫にひろがりをみせ、各クラスター細分のすべてにおよぶ。ただし、大きくみるとN75°～130° E、そしてN165°～180° E、N0°～25° Eの2箇所に空白部分があり、それはそれぞれIIBの大部分、IAからIBにかけての多くを占める。つまり、先にこの時期の長形土坑の空間分布が北域主体であるとしたが、その角度分布は北域と高い相関をみせるIAおよびIBに偏るわけではない。一方、北域に少ないとしたIIBが空白部分となる点は整合的である。続く宮滝1式の角度分布は、先の空白部分、IIBに主体的なまとまりの出現する点が特徴である。また、IA、IBの分布が、元住吉山式の分布を引き継ぎながらも、この頃になって明瞭となり、大きく3つのまとまりを見出すことができる。宮滝2式では、こうした3つの角度分布を引き継ぎながら、IIAにも分布を確認することができる。そして滋賀里式では、IIBとIAの2箇所に分布が集約される。先に検討した長形土坑の空間分布の経時的な変遷では、滋賀里式に至って、南域への集約が認められたが、長軸方向の角度分布についても同様に、ある一定方向へ収斂する状況が確認できることになる。ただし、その分布は、南域との高い相関をみせるIIBに限られるわけではない点は注意したい。

表には、より細かく空間分布の3群別を記号として表示してあるので、長形土坑の経時的な空間分布と角度分布の変遷を看取することができる。この中でもっとも特徴的な点は、宮滝1式の頃、中央域および南域に、IIBの長軸方向をとる長形土坑がまとまって出現することである。この点は、その前の元住吉山式の空間分布、角度分布に対する大きな画期とみてよい。この中央域および南域のIIBは、その後、徐々に南域に収斂して、滋賀里式の角度分布の主体となる。これと対置されるべき北域のIAおよびIBは、元住吉山式から宮滝2式まで継続して認められ、角度分布の視点からすれば、中央域、南域へと経時に空間分布をひろげるようみるとできる。なお、角度分布のIBは北域に限られる傾向が強いようにみえるが、宮滝2式のこの一群の空間分布は、実は北域の中でも中央域に寄ったものであり、中央域と統合してみることも可能である。また、宮滝2式の角度分布がIBの中でもIA寄りとなる点も特徴的で、こうした傾向はIAの角度分布にも認められる。つまり、宮滝2式の頃には、北域の一群が中央域に寄るという空間的統合傾向のほか、IBとIAの長軸方向がまとまる傾向を見出すことができる。特にその寄りあう角度分布の中心が、元住吉山式の頃に空白部分として認識された箇所にあたり、なおかつ、滋賀里式のIAとした角度分布に連なる点は、経時的な再編過程を考える上で示唆的である。

第5表 長形土坑の長軸方向角度分布



[凡例] 長軸方向角度は、北から東まわり180度までの角度を計測したもので、5度差隔級の度数分布として示した。

各記号は空間分布域を表示する。北域: ○、中央域: ▲、南域: ■

以上の検討の結果、向出遺跡における長形土坑の長軸方向には、経時的な再編、統合過程が認められることが明らかとなった。こうした傾向は、空間分布のあり方とも整合的である。こうした変遷の中で、特に注意したいのは、宮窪1式の頃、II-Bの長軸方向をとる長形土坑が、中央域および南域にまとまって出現することを再編の契機とする点である。先に指摘したように、こうした空間分布上のまとまりを「埋葬小群」や「埋葬群」とみなし、これに何らかの血縁関係にある人間集団を対比させられると仮定するならば、この時期の中央域、南域への埋葬空間の展開は、新たな被葬者集団の出現と解釈することもできる。そして、土坑の空間分布と長軸方向の変遷の整合性からは、この新出集団が、これまでとは異なる頭位方向を指向して出現したと理解されよう。さらに、土坑の空間分布と長軸方向の収斂からは、この新旧の集団が、最終的には一つの集団となった可能性が示唆される。

この一つの集団とは何か。空間分布の検討では、滋賀里式の頃には、当初、主体的なまとまりのみられた北域における分布がなくなり、南域に収斂してしまうことから、北域集団が淘汰され、新出の南域集団のみ残ったという解釈も可能である。しかしながら、宮窪2式の頃に、北域の一群が中央域に近づく傾向が認められるほか、長軸方向の検討を通してみると、北域で主体的とした I-A および I-B の長軸方向が、中央域および南域にも展開し、滋賀里式の頃には、その角度分布をひとつに収斂させて南域に分布をみせる点は、こうした空間的偏在をみせる複数の集団が排他的存在でないことを表そう。むしろ、この最終的な一つの集団とは、新旧の集団の統合過程とみなすのが合理的な解釈であると判断する。

### (3) 正形土坑についての解釈

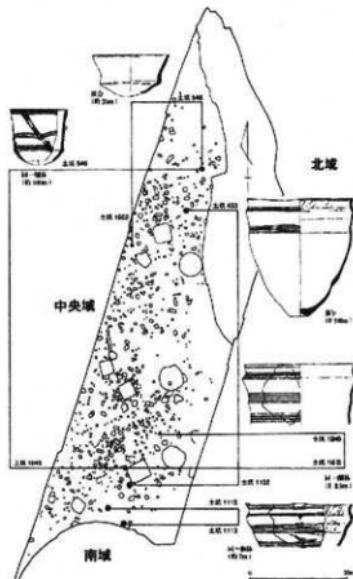
こうした解釈を傍証するのが、再葬も含む儀礼用の葬送関連施設と仮定した正形土坑の存在である。着眼すべき点は2つあり、ひとつは正形土坑の経時的な量的推移、いまひとつは正形土坑同士の遺構間接合土器の存在である。

量的推移については、前記したとおりであるが、ここに確認しておくと、元住吉山式や宮滝1式には少なく、宮滝2式から滋賀里式にかけての増加が著しい(第4表)。また、正形土坑が再葬を含む葬送儀礼に用いられたものとの仮定が妥当ならば、その急増の意味するところは、葬送儀礼の頻繁な実施となる。前項における長形土坑の空間分布および長軸方向の検討からは、宮滝2式の頃に、複数の被葬者集団の再編、統合が読み取れるとした。これと正形土坑の増加に示される葬送儀礼の盛行が時期的に一致することは、偶然ではないと考えたい。すなわち、被葬者集団の統合を儀礼的に執り行う施設として、正形土坑があつたものと理解する。

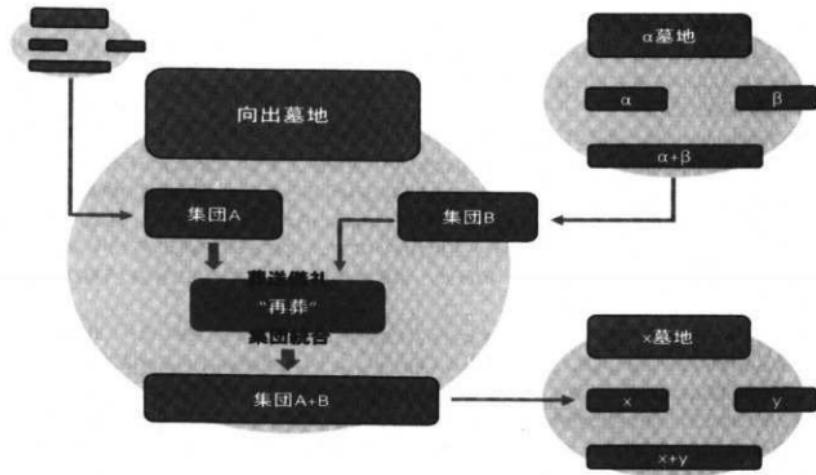
遺構間接合土器は、北域同士、南域同士といった10m前後の近距離間の接合例のほか、100m近く離れた北域と南域を結ぶ正形土坑間の接合例もある(第54図)。いずれも宮滝2式から滋賀里式にかけてのもので、遺構は南域に集中し、北域における長形土坑の分布は少ない時期にあたる。それにもかかわらず、北域と南域の正形土坑の間に遺構間接合土器が存在するという事実は、2つの空間の有機的な連関を物語る意図的な分割、埋置のあつたことを想起させよう。北域と南域、2つの「埋葬小群」ないし「埋葬群」、それぞれの被葬者集団の統合を象徴する葬送儀礼が、正形土坑を用いて執り行われたものと考えたい。

ところで、本稿では、正形土坑について、再葬を含む葬送儀礼に用いられたものとしてきたが、そもそも再葬(二次葬)とは、埋葬者集団にとって社会的かつ象徴的な儀礼行為である。民族学的言説によれば、個人としての一次埋葬から、取り出し、火葬(死体の破壊)および祭宴を経て、収集・収納して祖先としての二次埋葬にいたると解説される(van Gennep 1909)。すなわち、再葬とは、埋葬者集団の要請によって集団的儀礼として執り行われる。向出遺跡で想定した複数集団の統合とは、新たな関係の生起による祖先の統合を意味しており、まさに再葬に象徴されるような集団的儀礼の格好の対象であつたろう。

このような再葬のあり方を端的に示す事例に、千葉県権現原貝塚の複数個体からなる多数合葬例がある(渡辺1991)。直径1.4m、深さ0.4mを測り平面円形を呈する、向出遺跡というところの正形土坑より検出された18個体の人骨は、それぞれの交連状態に差異があることから、当該土坑に納められた時点における遺体の腐朽程度が異なるとされた。これと同じ状況は、茨城県中島貝塚の105個体におよぶ合葬例にも知られる(宮内・西本1995)。こうした状況に対する解釈としては、それぞれ別の時期に死亡し、初葬(一次葬)された遺体が、何らかの機会に一齊に掘り起こされ、当該土坑に再葬(二次葬)されたとするものである。これは関東地方貝塚地帯の縄文時代中期末から後期初頭の事例であり、比較対象としてけっして適当ではないが、こうした再合葬例について、形質人類学的な検討を踏まえた上で、そもそも故地を異にする2グループからなる集落開拓者を、第二世代の人々が、一縦めにして象徴的に集積したものとする渡辺新氏の仮説(渡辺1991)



第54図 土器の遺構間接合関係



第55図 向出墓地を媒介とする集団間関係の連鎖モデル

向出墓地における再葬を含むような集団的禮を媒介として、複数の血縁的(?)集団が再編、統合を確認する。このモデルで表現する明確な空間的要素は、「墓地」として囲った場のみであり、そこに集う各「集団」がどのような形態の空間的表現をとるものかは定かでない。仮説的には、「埋葬小群」などの初葬空間が充當されようが、集落などの居住単位が一対一で対応するのか否かについては、現在のところ判断材料に欠ける。

は、向出遺跡でおこなわれた葬制を考える上で魅力的である。

これに類似した事例が西日本にないわけではない。広島県帝釽寄倉岩陰の2つの埋葬人骨群は、ひとつが22体分以上、もうひとつが20体分以上の集積と鑑定された例で、時期は向出遺跡と同じ縄文時代後期後葉とされる。人骨の出土状況について、少数の解剖学的位置を保つものに対し、多くの頭骨や四肢骨が並べられたような状態にあることから、再葬（報告では「追葬（改葬）」）によるものと推測されている（戸沢ほか1976）。また、先にあげた京都府伊賀寺遺跡の例は、やはり縄文時代後期後葉の10体以上の複数個体からなる火葬例である。これについては初葬か再葬かの判断が困難であるものの、当該期の葬制に再葬が稀ではないことから、筆者は再葬墓である可能性が高いと考える。そして、この縄文時代後期後葉の近畿地方においては、向出遺跡でいうところの正形土坑を用いた再葬が、葬制の一形態としてあったものと考えたい。ただし、これは向出遺跡の正形土坑のすべてが再葬墓であったということを意味しない。

以上の検討の結果、向出遺跡は、縄文時代後期中葉から後葉にかけて、複数の集団が寄り集まつた墓地として設営され、宮窓2式の頃になって、集団の再編、統合に際し、再葬を含む儀礼的行為がこの地で盛んに執り行われたものと推測する。そして、このような葬制のあり方は、向出遺跡に限らず、当該期の近畿地方において、一般的なあり方であったものと考える。

##### 5. 向出遺跡の示す展望と課題

さて、先に結論したところの向出墓地を営んだ「複数の集団」が、どのような関係にあるのかについては、良好な状態での人骨出土がない限り言及することは難しい。各時期の土坑群の空間分布のあり方と、「埋葬小群」や「埋葬群」といった概念の対比からは、それぞれが何らかの血縁関係にもとづく集団である可能性を指摘することもできる。

先に例示した権現原貝塚の多数合葬（人骨集積）例を検討した渡辺氏は、合葬された人々が、他所から移住してきた集落開拓の第一世代で、なおかつその初葬空間が2箇所に分かれることから、「移住していく

以前の結びつき、すなわち旧地縁による」と考えられる2つのグループの存在を想定した。さらに、これら合葬人骨の歯の形態小変異の検討から、遺伝的繋がりをもつ2つのグループを把握し、これと先の2グループを対応させることにより、「2つのグループの移住以前の土地が通婚圏を超える距離を置いていたことにより、地域差として現れたものと考えられる」と結論する。すなわち、異なる血縁関係にある上、婚姻関係のない別地に居住していた2集団が寄り集まって権現原集落を開設し、ともに集落を維持すべきその第二世代が、従来、別個の空間に埋葬されていた第一世代の遺体を掘り出し、ひとところに合葬した、との解釈である。また、同地域の多数合葬例を集成、検討した山田康弘氏は、合葬人骨の形態小変異および遺伝子解析の成果と、同時期の集落の動向とを踏まえた上で、「多数合葬例は新しく集落を開設するときに、異なる血縁関係者を含む集団が複数集合し、至近距離において共同生活をはじめたときに生じる社会的な緊張を解消するための手段として執り行われた葬送儀礼である」(山田2008)と理解する。こうした再葬を含むような葬送儀礼が、向出遺跡においても執り行われたと仮定するならば、向出墓地をめぐる人々の動向について、第55図のようなモデルを描くことができるであろう。なお、誤解のないよう付け加えておくならば、この場合の「集団」は、即、居住の単位である「集落」を意味するものではない。

ところで、権現原貝塚にみるような多人数合葬のある関東地方の縄文時代中期末から後期初頭の遺跡では、結果として環状に巡るような配置をとる住居群（所謂「環状集落」）があり、そこに近接した位置に墓域が営まれる。では、向出遺跡においても、近接して住居群が存在したのであろうか。

調査地内には、長形土坑、正形土坑のほかに、所謂「ピット」と呼ばれる小穴が多数存在する。一般的には、これらが平面的に四角形や多角形に結ばれ、建物となる可能性は十分ある。したがって、そこに住居のあったことを否定することは難しい。一方、住居不在の可能性については、筆者はかつて、当該期に特徴的な石臼炉のないことをもって証明できると考えたが、縄文時代遺構面が大きく削平されているとすれば、それら認識することはできないであろう。したがって、その有無について、即座に結論を出すことは不可能で、今後の調査に委ねる課題となる。しかしながら、同時期の集落として知られる京都府森山遺跡（小泉・岡田1997）、滋賀県穴太遺跡（仲川1997）、三重県森派遺跡（奥・御村1988）等では、まとまった数の住居群の存在は知られても、長形土坑や正形土坑といった墓の存在は確認されていない。この場合、遺構面の削平について考慮する必要がないので、仮に居住空間に埋葬空間が近接して存在していたとするならば、埋葬遺構のみ検出することができなかることになるが、こうした理解を上記3遺跡のすべてにあてはめるのは困難であろう。やはり、居住遺構のみ検出される遺跡があると想えるべきで、一方、向出遺跡のように埋葬遺構のみ検出される遺跡があることも有意であると考えたい。

縄文時代 C 地区分	土器型式	向出遺跡 出土土器種類（復元）
前期南		尖底器
早期		
中期		
後期	中型 輪郭付 凹入 北内川上層 北内川上層 北内川上層③	麻センター調査区内 出土遺物量の消長
後期	大型 輪郭付 凹入 北内川上層① 北内川上層② 北内川上層③ 宮原1 宮原2 宮原3	麻センター調査区内 遺構の消長
後期	底面付 輪郭付 輪郭付 輪郭付 口向外 輪郭 丸底	市教委調査区内 遺構の消長



第56図 府センター調査区と市教委調査区検出遺構の年代的補完関係

それでは、向出遺跡の場合、府センターの調査区を埋葬空間とし、それとは重複しないながらも隣接する空間に住居があったと考えるべきなのであろうか。これについては、府センター調査区より西に離れた位置における市教委の調査内容（田中2005）が示唆を与えてくれる。そこにおいては、埋葬遺構は検出されていても、居住の確実な痕跡は確認できていない。また、注意すべきは市教委の調査によって確認された埋葬遺構の時期が、府センター調査区内の遺構の過疎な時期にあたり、それを補完するような関係にある点である（第56図）。市教委01-1区では、晩期中葉の篭原式の頃の正形土坑が検出されている点において府センター調査区に共通するが、包含層出土の遺物には、晩期中葉のほか晩期初頭のものがあるのみで、府センターで主体をなす後期中葉から後葉にかけてのものは確認できない。98-4-1区・00-5区では、晩期初頭の滋賀里式2期の配石をもつ長形土坑、正形土坑が確認されており、まさに府センターの遺構の空白期に相当する。このことの意味するところは、府センター調査区の西側、すなわち、遺跡の中心部にあたると目される空間には、府センター調査区で検出された主要な埋葬遺構と同時期の土地利用形跡を認めることができず、異なる時期の埋葬空間としての利用のみを確認することができるという事実である。そして、ここから導かれるのは、府センター調査区の隣接地に、縄文時代後期中葉から後葉にかけての埋葬空間に対応する居住空間があつたと想定することが困難で、なおかつ、そこには相互補完的な別時期の埋葬遺構が設営されており、全体として経年累積的に広大な墓域を形成しているという仮説である。すなわち筆者は、この遺跡全体が、少なくとも縄文時代後期中葉から晩期中葉にかけての墓地であり、複数想定される埋葬者の集団は、別地に居住していたものと考える。もし、この点を証明し、強調することができるのならば、居住空間に埋葬遺構が近接して営まれるような縄文時代後期前葉までのあり方とは異なり、後期中葉に集落構成に画期的な変化があつたと指摘することもできよう。そして後期中葉以降、こうした埋葬空間を核として、居住地を別地に営む個別小集団の再編、統合を確認する儀礼が執り行われる場があつたものと考えたい（岡田2005）。当然、こうした遺跡は各地に存在することが考えられようが、中でも向出遺跡は、長い年月にわたり継続して、こうした役割を担うような約された土地であったことが特筆される。それが「大規模葬祭空間」としての向出遺跡の重要性にほかならない。そしてまた、こうした仮説の検証可能性が残されているという点こそが、この遺跡の現代的価値を示すものにほかならないのである。

#### 注

- 1) 弥生時代の再葬墓群として著名な福島県根古屋遺跡の土器棺出土の人骨は、「軽部の付着した状態で（洗骨を再葬したのではなく）、強い火で長時間焼かれたことは確実である」（馬場ほか1986）と鑑定されており、京都府伊賀寺遺跡出土人骨の所見と共通する。なお、伊賀寺遺跡出土人骨の觀察所見については、大藏由美子女史に丁寧なご教示をいただいた。また、丸山真史氏には、同遺跡出土骨について、確実に動物骨と同定できるものがなく、その有無については「不明」とすべき点、ご教示いただいた。

#### 引用参考文献

- 安部みき子 1991 「池田寺遺跡出土の骨」『池田寺遺跡IV』（『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第71輯）、財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 井上晃孝 1997 「平田遺跡出土人骨」『平田遺跡』、木次町教育委員会
- 岩松 保・大藏由美子 2008 「長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について」『京都府埋蔵文化財情報』第107号、財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター
- 岡田憲一 2000 「土坑「墓」認定の手続き」『関西の縄文墓地—葬り葬り去られた関西縄文人』（『第2回関西縄文文化研究会 発表要旨集』）、関西縄文文化研究会
- 岡田憲一 2005 「大規模葬祭空間の形成—近畿地方における縄文時代後晩期集落のあり方—」『関西縄文時代における石器・集落の諸様相』（『関西縄文論集』2）、六一書房
- 岡田憲一 2008 「四線文系土器（宮窓式・元住吉山Ⅱ式土器）」『総覧縄文土器』、『総覧縄文土器』刊行委員会
- 岡田憲一 2009 「向出遺跡の発掘調査からわかること」「今、よみがえる向出遺跡—西日本縄文集落・墓地の転換期を考える—」（『向出遺跡評価検討委員会シンポジウム』）、阪南市教育委員会

- 奥 義次・御村精治 1988 『森添遺跡発掘調査概報II』、度会町教育委員会
- 小泉裕司・岡田憲一 1997 『森山遺跡発掘調査報告書』（『城陽市埋蔵文化財調査報告書第』32集）、城陽市教育委員会
- 多賀町教育委員会 2004 『土田遺跡第4次調査・第5次調査』、多賀町教育委員会
- 立岡和人 2000 「近畿地方における縄文晩期上器棺の成立と展開」『関西の縄文墓地』（『第2回関西縄文文化研究会 発表要旨集』）、関西縄文文化研究会
- 田中早苗 2005 『向出遺跡範囲確認調査報告書』（『阪南市埋蔵文化財報告』36）、阪南市教育委員会
- 田辺昭三・加藤 修 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』、滋賀県教育委員会
- 戸沢光則ほか 1976 「帝釈寺倉岩陰遺跡の調査」『帝釈峠遺跡群』、亜紀書房
- 仲川 靖 1997 『穴太遺跡発掘調査報告書II』、滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会
- 中村健二 1991 「近畿地方における縄文晩期の墓制について」『古代文化』第43巻第1号、古代学協会
- 奈良県立橿原考古学研究所 2009 「観音寺本馬遺跡記者発表資料」  
([www.kashikokon.jp/from-site/2009/kannonji/20090730.pdf](http://www.kashikokon.jp/from-site/2009/kannonji/20090730.pdf))
- 馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986 「根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『靈山根古屋遺跡の研究』、靈山根古屋遺跡調査団
- 林 謙作 1977 「縄文期の葬制 第II部 遺体の配列、とくに頭位方向」『考古学雑誌』第63巻第3号、日本考古学会
- 春成秀爾 1980 「縄文合葬論」『信濃』第32巻第4号、信濃史学会
- 春成秀爾 1982 「縄文社会論」『縄文文化の研究 第8巻 社会・文化』、雄山閣
- 宮内良隆・西本豊弘ほか 1995 『中妻貝塚』、取手市教育委員会
- 山田康弘 2003 「頭位方向は社会組織を表すのか」『立命館大学考古学論集III』、立命館大学考古学論集刊行会
- 山田康弘 2008 『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』、同成社
- 山元 建ほか 2000 『向出遺跡』（『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第55集）、財團法人大阪府文化財調査研究センター
- 渡辺 新 1991 『縄文時代集落の人口構造』（私家本）
- Van Gennep, Arnold., 1909, *Les Rites de passage* (綾部恒雄ほか(訳)『通過儀礼』、弘文堂、1977)

## 第2節 向出遺跡の空間分析

矢野 健一（立命館大学教授）

### 1. 地表面の推定

遺跡では、縄文時代の地表面はほとんど残っていない。理由は、(1) 洪水や土石流で流されてしまう、(2) 発掘では細かい起伏を無視して、水平に掘り下げられていく、(3) 遺跡はかつて田んぼであったり、畑であったりということが多いので、耕作によって深く地中が掘り返されて、縄文時代の地層が壊されてしまう、といったことが影響しているからである。特に江戸時代後半からそれ以降にかけて、畑あるいは田んぼが土壤改良工事によって掘り返されているため、地表面が残っていない場合が多いのではないか、と考えている。

実際に、地表面が残っていないことを実感できるのは、堅穴住居の深さである。八尾市の八尾南遺跡で発見された堅穴住居は1mぐらいの深さがある。縄文時代でも場合によっては1mあるいはそれ以上深さがある住居があり、堅穴住居はこのような深い住居が一般的であったはずである。しかし、多くの場合、20~30cm程度の段差しか残っていない。このような堅穴住居は、当時の地表面が残っていないので、浅い状態で見つかったのである。

向出遺跡の大坂府発掘調査区域（第57図）の弥生～古墳時代の住居の深さは5~50cmとばらつきがあるが、平均は20cmほどで、少なくとも古墳時代には、地表面が数十cm削られていたのは明らかである。では、当時の地表面は、遺跡全体一律の厚みで削られたのだろうか。この点を明らかにするために、発掘区域内の構造のうち、長径約1m以上の土坑の深さを地点ごとに調べてみた（第58図、第6表）。

その結果、まず、標高の高い部分が今より広かったということが推定出来た。ただし、川に近い標高の低い部分、あるいは崖に近い部分については今より低かったかもしれない。そこでは当時の地面が残っていると考えても良い。しかし、基本的には次のように考えることができる。

- (1) 発掘区域を含めてかなりの部分は、数十cm当時の地面が削られている。というのは、大阪府八尾南遺跡の弥生時代の堅穴住居の深度は100cm程度だが、向出遺跡の弥生～古墳時代の堅穴住居は5~50cm程度で、平均20cm程度である。
- (2) 縄文時代の土坑は弥生～古墳時代の土坑よりも数cm深い区域が多い。両時代の土坑の深さが同じであると仮定すると、縄文時代と弥生～古墳時代との地面の高さは、平均数cm程度、縄文時代の方が低いことになる。
- (3) 発掘区で最も標高の高い部分の北側に等高線がえぐれている部分があるが、その部分の土坑の平均深度が他より数cm深い。これは弥生～古墳時代の土坑も同様なので、古墳時代以後に削られたためである。したがって、縄文時代には、標高の高い部分が、より北側に広がっていた。

### 2. 向出遺跡の発掘区域内の復原

基本的に発掘区域内は墓地だと言われてきたが、土坑が全部、墓というわけではない。

- (1) 特に注目されるのは木柱痕（第59図）。これは、柱よりも柱穴がかなり大きいので、単なる木柱ではなく、重量のある建物を支える柱である可能性が一番高い。これは、発掘区内の1区域に集中している。先に述べたように、当時の地表面は数十cm削られているのだから、この太い柱を支える補助的な細い柱のための浅い柱穴は、削られて消失した可能性がある。そのため、太い柱のための柱穴が、10m近い間隔をあけて、残ったのだろう。
- (2) 焼土がある土坑（第60図）。儀礼用の穴であろう。動物の骨が出上るので、動物をそこで調理したり、生贋にするための穴かもしれない。あるいは人間を火葬するための穴かもしれない。具体的にはよくわからないが、墓以外の儀礼用の穴であろう。
- (3) 確実な墓（第61図）。人骨が出ているもの以外に、石をきれいに並べた穴は墓であると考える。それ以外に土坑の形態や大きさからの分析は岡田憲一の分析（岡田2000）に従う（第7表）。

(4) 他にも用途不明な小さな穴がたくさんあるが、仮に縄文時代の住居の柱穴と考えた場合でも、平地式建物とみなすべきである。というのは、古墳時代の堅穴住居よりも縄文時代の堅穴住居の方が深いところに存在するはずなのに、床面が検出されていないということは、縄文時代の堅穴住居は本来なかったことを示唆するからである。したがって、通常の住居ではない平地式建物が存在したとすれば、それは、通常の住居ではなく、墓に関係する建物、もしくは住居以外の特別な建物、と考えるべきである。

つまり、発掘区域内には、墓、儀礼用の穴、特別な建物があった可能性を考えてよい。これらは、全体として、発掘区域内が墓地であることをしめしている。

### 3. 向出遺跡発掘区域に隣接する区域の推定

では、発掘区域外はどうか。墓を多く含むと考えられる土坑の分布から見て、土坑の数が多い宮滻2式の時期には、土坑の分布密度は発掘区南半の中央部で高く、発掘区の境界付近で低い（第62図）。したがって、土坑は発掘区の外には少ない、と推定できる。また、大阪府の発掘とは別に、阪南市の調査地点（大阪府の発掘区のある丘陵の西部部分）では、縄文晚期の墓の可能性もある遺構が出土しているが、出土土器は縄文晚期のみで、確実な縄文後期の遺構はない（田中2005）。したがって、縄文後期の墓は、発掘区域外には少なかったと推定できる。

では、墓以外の遺構として、堅穴住居や貯蔵穴はどこにあるのか。

- (1) 堅穴住居は発掘区域の中にはない可能性が高い。先述したように古墳時代の堅穴住居が遺存しているので、それよりも深いところに存在するはずの縄文時代の堅穴住居も、もし存在していたのであれば、遺存しているはずである。したがって、縄文時代の堅穴住居が発掘区域内に出土していないということは発掘区域内には本来堅穴住居はないと考えるべきである。
- (2) 貯蔵穴は、特に縄文時代後期と晚期には、川の近くあるいは低いところにあることが普通である。したがって、可能性があるのは、山中川もしくは菟砥川のそばである。

以上より、貯蔵穴が発掘区域の東側もしくは西側の標高の低い部分に存在した可能性が高いとすれば、住居は逆に、発掘区域のすぐ西側の標高の高い部分に存在した可能性が高い（第63図）。

では、発掘区域外に住居が何棟あるか。岡田の分析によれば、宮滻2式には、確実に一次葬である成人の墓は14しかない。時期がはっきりとわからないものもあり、発掘区域外にある墓も計算を入れる必要はあるが、30を超えることは考えにくい。20から30ほどが宮滻2式の成人の墓だろう、と推定する。

仮に、ある集落に10人の成人が住んでおり、縄文時代の成人（15～20歳）の平均余命を20年とみなす。もし、その集落の人口が10人の成人を維持したとすれば、20年間で10基ずつ墓が増えていくことになる。そうすると、60年間で30個、120年間で60基、というように増えていく。宮滻2式の存続期間が60年間より短いことは考えにくい。というのは、その前後の型式の遺構や遺物も出土しているので、向出の集落は宮滻2式の存続期間いっぱい存続したはずである。したがって、向出遺跡の発掘区域内の墓地は、多くても10人、場合によっては数人の成人からなる集団によって利用された、ということになる。

したがって、堅穴住居内に平均成人2人前後が住んでいたとすれば、この墓地に対応する住居数は平均5棟を超えることは考えにくく、場合によっては平均2棟以下のこともありうる。つまり、向出遺跡の墓地は、1つの集落に対応するものである。この集落規模は小規模だが、縄文時代の集落としては、平均的なものである。

### 4. 縄文集落の構造

向出遺跡から集落の復原を試みる場合、参考になるのが、奈良県曲川遺跡（縄文晚期）である（樋原市2004）。ここでは、住居、墓、貯蔵穴が100×200m程度の範囲で、それぞれ場所をずらして、出土している（第64図）。近年の調査で、調査区の南西部にも同時期の住居群が存在していることがわかった。

っている。ここで、貯蔵穴が出土する範囲は径50m程度の範囲で、これは関西で最も多くの貯蔵穴が出土した奈良県本郷大田下遺跡（岡林2000）と同じ広さである。したがって、本郷大田下遺跡の貯蔵穴群も、曲川遺跡と同じような広さの集落の一部、と考えてよい。

向出遺跡の発掘区内で墓などの遺構が集中する広さは150m×50m程度で、曲川遺跡で墓が集中する範囲と同じような規模である。したがって、向山遺跡においても、曲川遺跡と同じような広さの範囲に、住居や貯蔵穴が存在したと推定でき、そこは発掘区域外にある。

向出遺跡の墓の数から推定すると、集落人口は成人10人を超えない規模になるが、本郷大田下遺跡の貯蔵穴の数から推定した集落人口も、同じく、小規模になる（矢野2009a）。成人10人とすれば、未成年人は20～30人程度となるので、住居数からみれば、5棟前後となる。

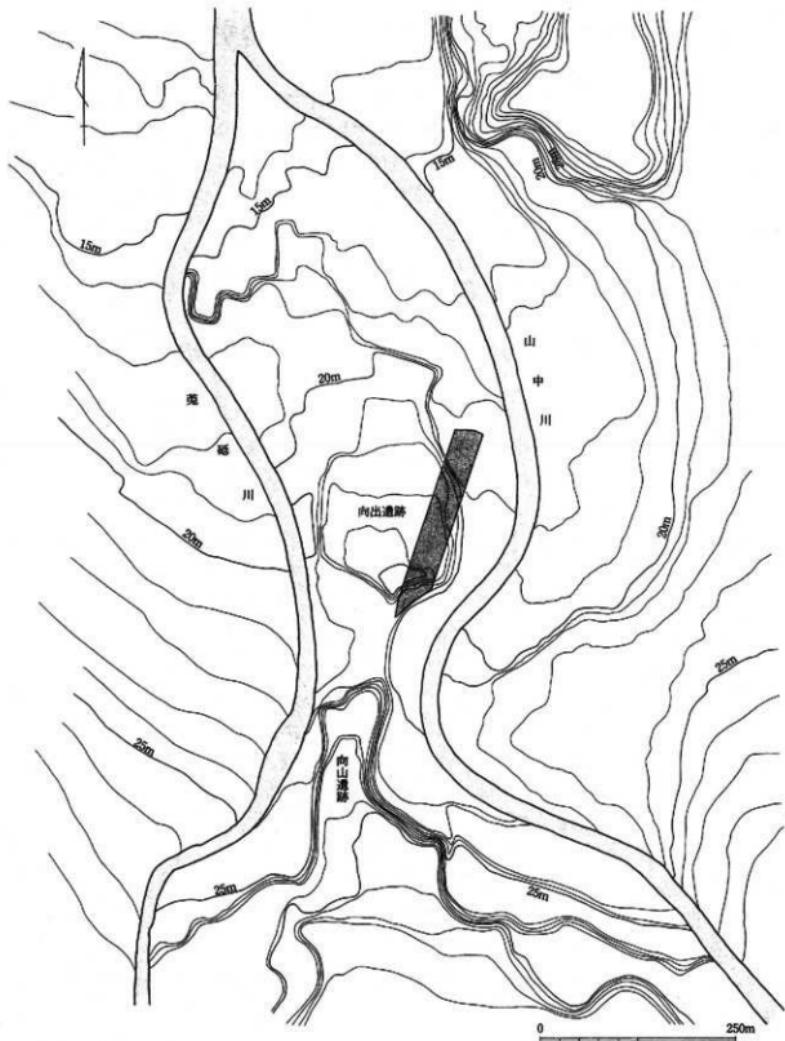
このような小規模な集落は、集落人口が増減し、場合によっては、場所を近くに移動することもあるが、縄文時代後期後半の宮滝2式前後の時期、300年間程度は継続している。このように長期間存続するのは、この集落が比較的有力な集落であったという事を示している。このように小規模でありますながら、集落を存続していくためには、遠く離れた諸集落と婚姻関係を維持し続ける必要がある。成人10人の規模の集落を維持するためには、成人の平均余命を20年間とみなせば、4年間に1人が婚姻のため転出し、1人が婚姻のために転入する必要がある（矢野2009b）。このような婚姻による転入転出の均衡が活躍動き、場合によっては集落が廃絶するにいたるような、集落人口増減の一つの重要な要因となるのだろう。

もう一つ考慮すべき点がある。奈良県曲川遺跡にても比較的短時間で別の場所に移っている。向出遺跡も、移動を繰り返したはずで、断続的な居住の累積が、長期間に及んでいる可能性がある。この場合の移動とは、京都市北白川遺跡群のように、数kmの範囲を集団が小刻みな移動を繰り返す移動である。

滋賀県の琵琶湖の東南の大津市から彦根市にかけての遺跡の分布を見ると、縄文後期には、10km四方の範囲に5つ、遺跡が集中する径2.5kmの区域がある（第65図）。阪南市においても、似たような規模の集落が5～10個くらい存在していたと考えている。ただし、向出遺跡のように長期間継続するものは、数が多くはないので、その点で、阪南市程度の広さの中で、中心的な集落であったといえる。

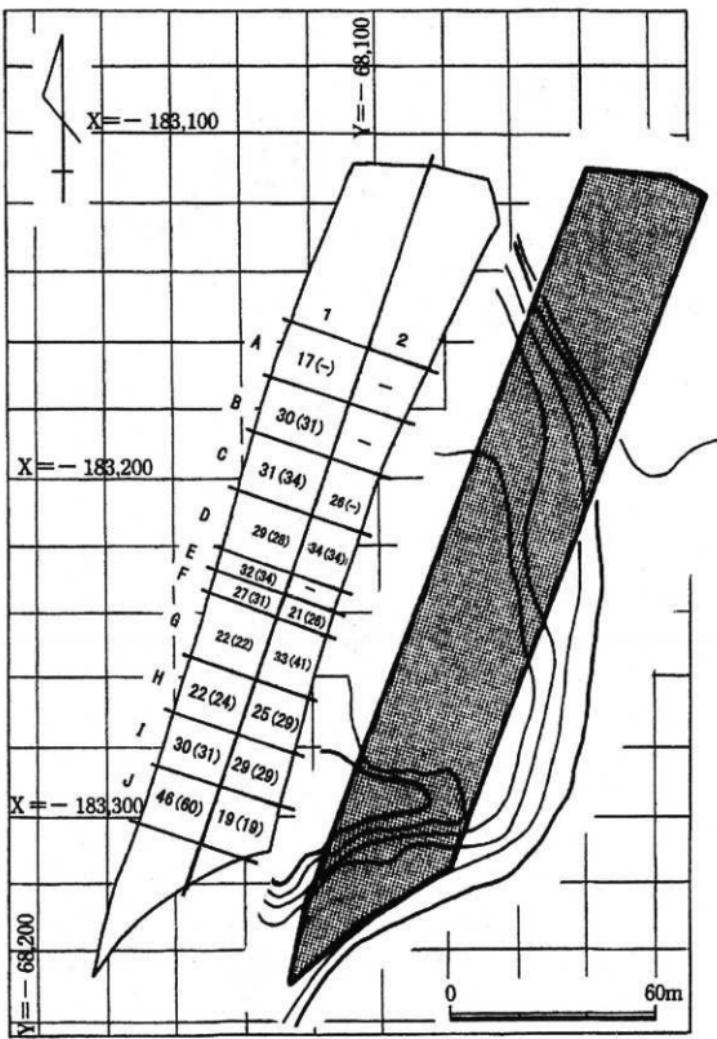
#### 引用参考文献

- 岡田憲一 2000 「土坑「墓」認定の手続き」『関西の縄文墓地—葬り葬り去られた関西縄文人』（『第2回関西縄文文化研究会 発表要旨集』、73～82頁）、関西縄文文化研究会
- 岡林孝作 2000 『本郷大田下遺跡』（『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第83冊）、奈良県教育委員会  
橿原市千塚資料館 2004 『平成14年度埋蔵文化財発掘調査成果展 かしはらの歴史をさぐる11』
- 田中早苗 2005 『向出遺跡範囲確認調査報告書』（『阪南市埋蔵文化財報告』36）、阪南市教育委員会
- 矢野健一 2001 「西日本の縄文集落」『立命館大学考古学論集II』1～18頁、立命館大学考古学論集刊行会
- 矢野健一 2006 「関西地方の後晩期住居」『弥生集落の成立と展開』（『第55回埋蔵文化財研究集会発表要旨』、275～290頁）
- 矢野健一 2009a 「貯蔵穴の貯蔵量からみた集団規模—関西地方での事例研究」『南の縄文・地域文化論考』上巻（『南九州縄文通信』No.20、37～51頁）南九州縄文研究会
- 矢野健一 2009b 「小規模集落の長期定着性」『関西縄文時代の集落と地域社会』（『第10回関西縄文文化研究会発表要旨集・資料集』、103～111頁）、関西縄文文化研究会
- 山元 建ほか 2000 『向出遺跡』（『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第55集）、財团法人  
大阪府文化財調査研究センター



第 57 図 向出遺跡大阪府発掘調査区

\* (山元ほか 2000) 第 11 図を引用。



第 58 図 区域ごとの土坑の深さ (cm)

\* (山元ほか 2000) 第 12 図 (左) と第 11 図 (右) を変改。左図の各区域内の数字は全時期の土坑の深さの平均 (cm) で、( ) 内の数字は縄文時代の土坑の深さの平均 (cm)。右側の等高線入りの図と比べると、等高線がえぐれている H・G 区の土坑が浅いことがわかる。

第6表 集計に利用した土坑の深さ

\* (山元ほか 2000) 遺構データー覧表より作成。

番号	時期	深さ(cm)	地区	全平均(cm)	縄文平均(cm)
616	不明	17	A1	17	17
595	III	51	B1		
594	Y	44	B1		
598	不明	24	B1		
570	不明	28	B1		
560	不明	23	B1		
561	III	37	B1		
557	II	14	B1		
546	III	36	B1		
532	III	40	B1		
449	不明	19	B1		
1510	III	1	B1		
1511	III	37	B1	29.5	30.85714286
505	不明	27	C1		
504	H	31	C1		
500	III	33	C1		
248	III	27	C1		
495	II III	39	C1		
484	III	57	C1		
483	III	34	C1		
512	III	45	C1		
476	H	30	C1		
473	III	45	C1		
431	II	28	C1		
401	III	29	C1		
400	III	7	C1		
480	H	4	C1		
1500	II	25	C1		
258	II	33	C1		
259	II III	22	C1		
239	II III	49	C1		
1601	III	26	C1		
467	不明	54	C1		
461	III	43	C1		
457		22	C1		
433	III	33	C1		
452	不明	19	C1		
454	不明	11	C1		
422	IV	33	C1		
421	KB	43	C1		
424	不明	30	C1		
109	H	33	C1		
205	不明	19	C1		
216	II	25	C1	30.83871	33.8
416	H	26	C2	26	
264	II III	26	D1		
1602	III	38	D1		
277	III	35	D1		
283	不明	36	D1		
284	不明	31	D1		
286	III	36	D1		
280	不明	38	D1		
307	II III	40	D1		
308	II III	30	D1		
1610	III	23	D1		
330	KB	16	D1		
329	III	30	D1		

第6表つづき

番号	時期	深さ	地区	全平均	縦文平均
318	III	27	D1		
346	不明	22	D1		
350	III	22	D1		
351	不明	35	D1		
217	III	38	D1		
219	不明	24	D1		
227	II	27	D1		
361	不明	31	D1		
362	IV	19	D1		
371	II	9	D1	28.772727	27.73333333
387	II III	34	D2		
378	IV	33	D2	33.5	33.5
1608	II	29	E1		
1609	III	48	E1		
332	II III	32	E1		
337	III	29	E1		
345	不明	23	E1		
1603	III	36	E1		
1604	III	30	E1		
1612	II III	29	E1		
1611	III	39	E1	32.777778	34
734	II III	27	F1		
729	不明	13	F1		
735	KB	17	F1		
702	不明	12	F1		
1605	III	26	F1		
1613	KB	24	F1		
1606	III	32	F1		
1607	KB	35	F1		
626	III	37	F1		
380	III	48	F1		
663	H	21	F1		
698	III	35	F1	27.25	31.22222222
1614	不明	16	F2		
1615	III	26	F2	21	26
726	不明	14	G1		
1408	H	27	G1		
666	不明	25	G1		
667	II III	3	G1		
671	IV	32	G1		
798	不明	21	G1		
806	III	20	G1		
799	III	37	G1		
805	KB	17	G1		
676	III	22	G1		
645	III	24	G1		
647	IV	20	G1	21.833333	21.875
1196	不明	26	G2		
1528	不明	18	G2		
1526	不明	12	G2		
1387	IV	34	G2		
1368	III	56	G2		
804	IV	66	G2		
1369	III	18	G2		
1248	I	32	G2	32.75	41.2
757	KB	15	H1		
756	III	29	H1		

第6表つづき

番号	時期	深さ	地区	全平均	縄文平均
738	KB	7	H1		
1519	不明	13	H1		
1518	不明	13	H1		
739	III	13	H1		
755	IV	8	H1		
754	III	34	H1		
1174	III	18	H1		
1175	III	49	H1		
870	III	25	H1		
793	III	10	H1		
782	IV	27	H1		
745	IV	27	H1		
791	III	29	H1		
1517	III	17	H1		
833	H	14	H1		
834	III	16	H1		
836	IV	24	H1		
890	III	20	H1		
1164	III	18	H1		
911	III	55	H1		
916	III	35	H1		
1169	不明	12	H1		
1170	不明	9	H1		
913	III	26	H1		
915	III	26	H1		
934	III	19	H1		
932	III	29	H1		
926	II III	15	H1		
1362	IV	30	H1	22	23.88461538
1223	III	53	H2		
1225	不明	4	H2		
1255	III	19	H2		
1261	不明	21	H2		
1270	不明	15	H2		
886	IV	23	H2		
899	III	40	H2		
904	IV	16	H2		
937	不明	16	H2		
1272	IV	31	H2		
1396	III	23	H2		
1379	不明	16	H2		
1399	III	23	H2		
1347	KB	18	H2		
1355	H	17	H2		
1356	III	44	H2		
1295	III	31	H2		
1293	III	50	H2		
1291	Y	11	H2		
1303	II	22	H2	24.65	29.28571429
958	III	42	I1		
959	III	37	I1		
985	IV	34	I1		
1020	KB	34	I1		
1024	不明	18	I1		
1028	IV	42	I1		
1061	不明	32	I1		
1063	Y	27	I1		

第6表つづき

番号	時期	深さ	地区	全平均	繩文平均
1029	III	40	I1		
1072	III	17	I1		
1000	III	13	I1		
941	III	30	I1		
980	III	26	I1		
979	III	24	I1		
965	IV	33	I1		
1011	不明	31	I1		
1013	II III	20	I1		
1091	III	43	I1		
1115	III	25	I1	29.894737	30.66666667
1045	III	24	I2		
1044	III	30	I2		
1393	III	36	I2		
1102	III	34	I2		
1101	III	48	I2		
1103	III	40	I2		
1104	III	22	I2		
1109	III	10	I2		
1108	II III	16	I2		
1336	III	36	I2		
1338	III	8	I2		
1330	III	45	I2		
1304	III	24	I2	28.692308	28.69230769
1388	III	67	J1		
1127	KB	124	J1		
1145	不明	35	J1		
1146	不明	25	J1		
1144	IV	13	J1		
1124	IV	35	J1		
1116	不明	26	J1	46.428571	59.75
1110	III	3	J2		
1113	III	35	J2	19	19

I 中津～北白川上層式(後期前葉)

II 一乗寺K～元住吉山II式(後期中葉)

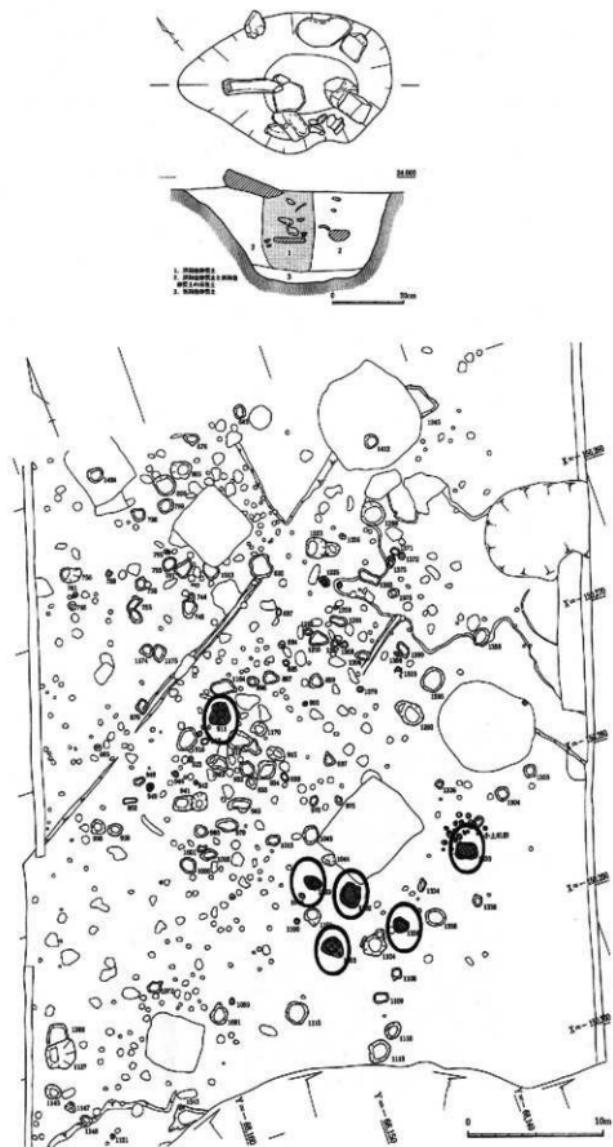
III 宮窪1～滋賀里II式(後期後葉～晚期前葉)

IV 滋賀里II式～船橋式(晚期中・後葉)

KB 繩文後晚期

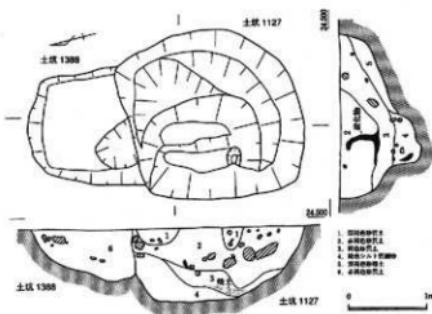
Y 弥生古墳

H 古墳以降



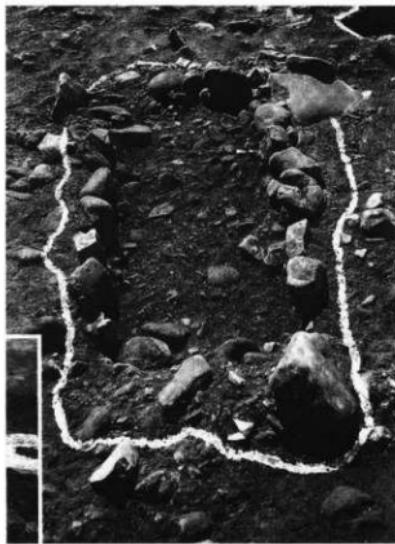
第 59 図 木柱痕のある土坑（上）とその分布（下）

\* (山元ほか 2000) 第 155 図（上）と第 111 図（下）を引用。



第 60 図 焼土がある土坑（上）

\* (山元ほか 2000) 第 193 図を引用。



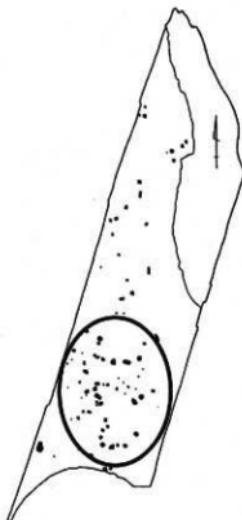
第 61 図 確実な墓

\* (山元ほか 2000) 卷頭図版 3 より引用

第7表 土坑の分類

\* (山元ほか 2000) 第6表を改変。線で囲んだ部分が宮滝2式期の成人一次葬の墓。

対象数	I期	II期	III期	宮滝		後期	IV期	後晩期	弥生 ・古墳	土師 ・須恵
	宮滝1	宮滝2	滋賀里							
長狭形	5			1	1	2	3	5		
小型正形	59	2	2	2	5	3	25	11	53	6
小型略正形	51	3	2	5	9	1	27	13	47	4
小型長形	37	1		2	2		13	14	31	2 4
正形	22	2	1	2	4		11	7	20	1 1
略正形	44	2	2	4	6		19	9	35	2 7
長形(乳幼児)	54	1	4	2	5	2	33	8	48	6
大型正形	38	4	2	16	18	6	33	2	37	
大型正形C	20			16	16	3	19		20	
超大型	4			1	1		2	2	4	
大型略正形A	10		1	2	2	4	6	3	9	1
大型略正形B	19	1	1	6	7	1	13	2	16	
大型略正形C	5			3	3	2	5		5	1 2
長形(北村)	22	1	2	2	4	2	10	7	21	1
(滋賀里)	47	1	5	7	9	17	1	28	13	45
(仲農)	10			2	3	5	7	1	10	
(超伸展)	6			3	1	5	6		6	
有段底型	11			2	5	7	1	9	1	10
その他	3			2	2		2	1	3	1
小計	467	3	26	30	87	124	23	270	97	425
									7	35

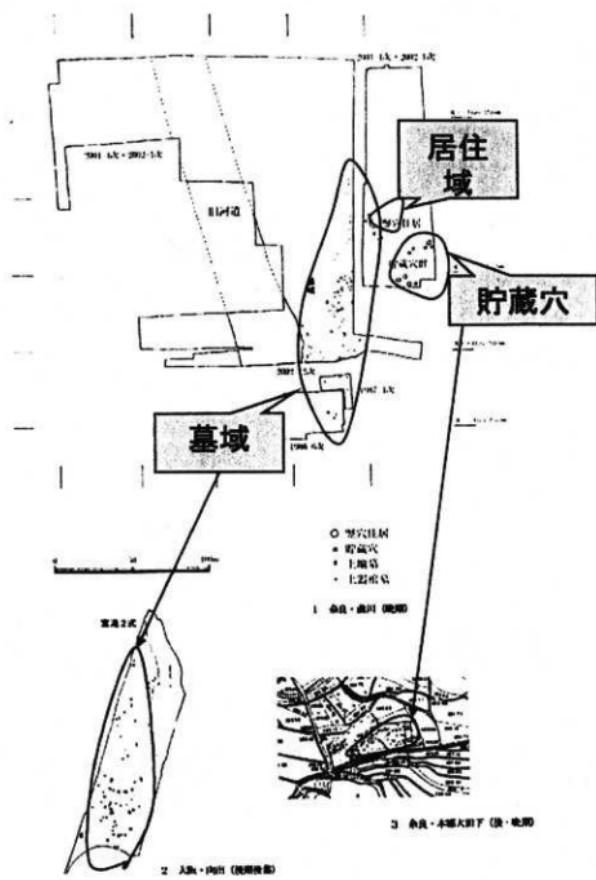


第62図 宮滝2式期の土坑の分布

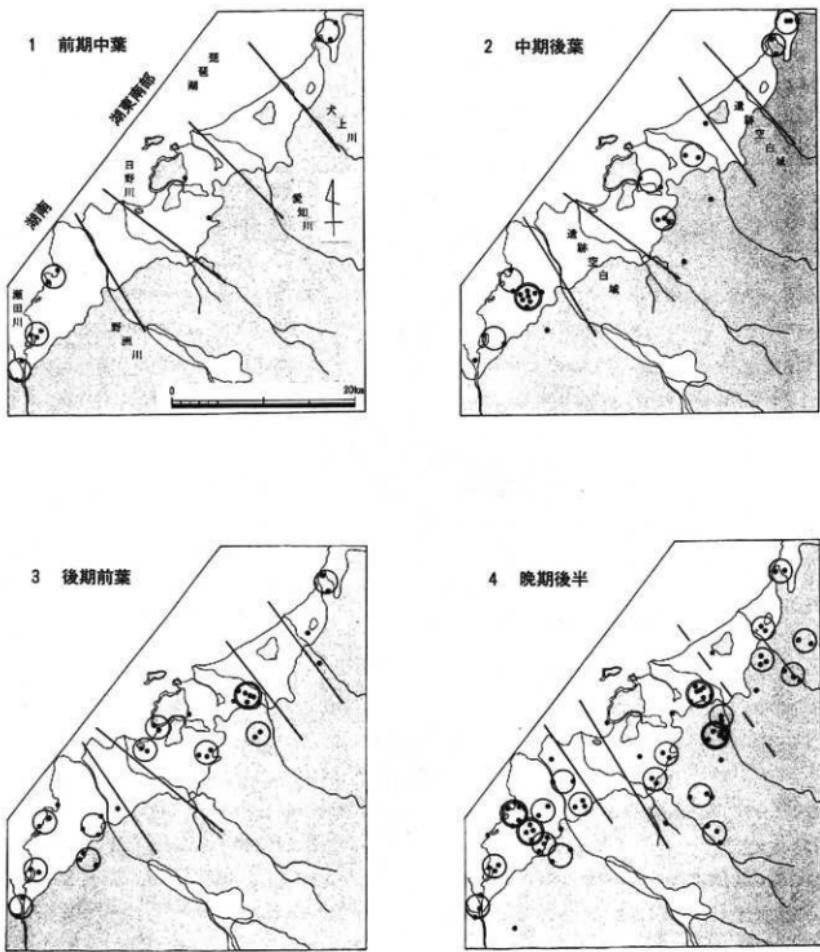
\* (山元ほか 2000) 第41図を改変。



第63図 縄文後期（宮滝2式期）における向出遺跡の集落構造推定案  
＊（山元ほか2000）第11図を改変。



第 64 図 奈良県曲川遺跡の縄文集落の構造と他遺跡との比較  
 \* (矢野 2006) 図 1 を改変。



第65図 滋賀県琵琶湖東南岸の縄文集落の分布

\* (矢野 2001) 図4を引用。円で囲った部分が遺跡が集中する径 2.5km の範囲で、この範囲内で移動を繰り返す1集落に対応していると考えている。

### 第3節 向出遺跡検出土坑の機能

中村健二（財団法人滋賀県文化財保護協会）

#### 1. はじめに

向出遺跡は、財団法人大阪府文化財調査研究センターや阪南市教育委員会の数次にわたる調査で、縄文時代後期前葉から晩期後葉の多くの遺構や遺物が出土し、特に後期後葉(宮窓式)から後期末(滋賀里I式)段階の遺構が多く見つかっている。財団法人大阪府調査研究センターが行った調査は面積的に最も広く、縄文時代後期後葉から晩期にかけての墓地の可能性が指摘されている。10月のシンポジウム(田中2009)においてもこの見解を支持する意見が多く、向出遺跡は墓地遺跡であるという評価が一般化されつつある。筆者はこうした評価に対して、墓だけではなく、墓以外の遺構を含む可能性があると考えている。本稿ではこうした点について述べていきたい。

#### 2. 遺跡の前提

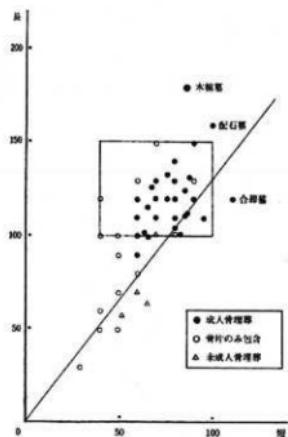
向出遺跡の縄文時代遺構が見つかった地点は、金熊寺川と山中川に挟まれた扇状地が第四紀以降の海面変動や隆起によって段丘化された中位段丘の先端に位置し、両川と比べて相対的に高い場所にある。遺構検出面は、扇状地性の礫を多く含み、現河川周辺に広がる扇状地も礫の堆積が厚く、弥生時代以降に一般化される水稻耕作に適した低地ではないとされている。このことは、遺構が形成される場所だけではなく、河川を除くと河川周辺でも充分な保水性のある土地ではないといえる。このような環境では、木質や人骨、植物等はほとんど残らない。その結果、多数の小穴・土坑については、内容物が残らず、直接、遺構の機能が特定できない状況になっている。

1998年の財団法人大阪府文化財調査研究センターによる調査では、縄文時代と弥生時代後期から古墳時代遺構は同一の遺構検出面で確認されており、縄文時代とそれ以降の遺構が層位的前後関係として検出されていない。したがって、1300基以上ある遺構の大半を占める長径50cm以下の遺構の時期的な位置づけができないものが多い点が挙げられる。このことからこれらの小穴を積極的に評価した形での評価は行わず、土器や石器が出土し、時期認定の確実な遺構を中心に報告および解釈を行っている(山元ほか2000)。

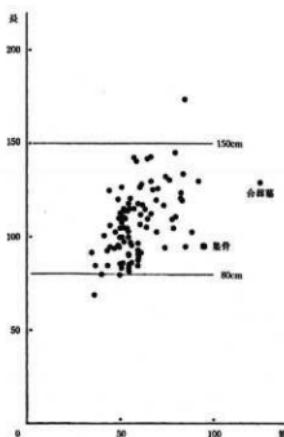
#### 3. 墓以外の遺構はあるのか

近畿地方の縄文遺跡から見つかる小穴や土坑は大きさ、形状、埋土・覆土や遺物の出土量や出土状況は多種多様であり、遺構の機能について明らかにできているものは少ない。こういった遺構の機能としては、墓、植物質食料の貯蔵穴、落し穴、柱穴、遺物廃棄穴など限られたものしかわかっていない。したがって、これらの機能の明らかな遺構から遺構の機能を類推し、遺跡の解釈を行っている。こうした現実から向出遺跡の縄文時代の遺構を報告した岡田憲一は、岡田の分類した長形土坑が、従来の先行研究から土坑墓として認識されている点を加味し、向出遺跡で見つかった遺構・遺物の情報を詳細に整理するとともに、土坑規模や土坑の長軸の方向を数値化、グラフ化し、墓という観点から検討を行った。検討にあたっては、縄文時代晩期の近畿地方の滋賀里遺跡・日下遺跡や縄文時代後期の長野県北村遺跡などの人骨が出土した単葬の墓の大きさや埋土の状況と比較して墓としての機能を導き出している。さらに、配石土坑や正形土坑についてはその検討対象を全国に広げて比較し、墓と認定し、正形土坑は再葬のための土坑と位置づけ、向出遺跡が墓地遺跡と結論づけている。

岡田の報告とその解釈の方法は精緻で説得力があるが、長形土坑の一部と正形土坑の一部は墓以外の機能を考える余地がある。第66図は向出遺跡の報告書に掲載された滋賀里・日下遺跡の土坑墓や北村遺跡の人骨出土土坑墓の長径と短径をグラフにした図で、滋賀里遺跡・日下遺跡・北村遺跡ともに長径が100~150cmのところに集中していることがわかる。これらの土坑墓から出土した人骨はいずれも単葬の単葬である。一方、長径150cm以上と100cm以下の土坑墓はあまりないということがわかる。

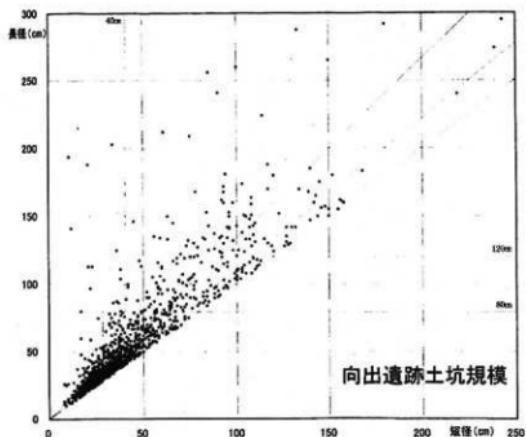


滋賀里・日下遺跡土坑墓の規模



北村遺跡土坑墓の規模

第 66 図 滋賀里・日下・北村遺跡土坑墓の規模（山元ほか2000）



第 67 図 向出遺跡土坑規模土坑墓の規模（山元ほか2000）

向出遺跡の小穴・土坑の大きさの法量を示した第67図では長径50cm以下の小穴や土坑が多く、長径150cm以上の土坑も比較的存続していることが明らかであり、第66図と第67図の比較から50cm以下と150cm以上の小穴や土坑は、墓以外の機能があるものが大半であると考えられる。特に長径50cm以下で、長径20~30cm程度の小穴は建物の柱穴の可能性がある。こうした小穴については、出土遺物が少なく、縄文時代かそれ以後の小穴か判断できないものが多く、向出遺跡の報告では、縄文時代・弥生時代から古墳時代のどちらの報告でも積極的には評価されていない。報告書の土坑一覧表をみれば、これらの中には、縄文土器が出土する小穴があることから、縄文時代の建物の復元はできないが、縄文時代のこうした小穴が一定量含まれていることは留意するべきである。こうした小穴が住居や建物の柱穴、

墓標、そのほかの機能をもつ遺構の可能性を含んでいる。

第67図のうち長径100~150cmの間にある長方形や楕円形の土坑、報告では長形土坑と呼ばれている土坑は、岡田の見解通り単葬の土坑墓と認定できる。長形土坑の埋土は单層で、土器・石器の出土が小さな破片が極少量のみ出土している点からも、近畿地方の人骨出土土坑墓との類似性が高く、これらの点からも土坑墓であることは裏付けられる。これらの長形土坑いいかえれば土坑墓だけでも、近畿地方の縄文時代後期後葉から末の墓地としては珍しく、この時期の墓制や集落を考える上では極めて重要な遺跡であるといえる。

それでは長径150cm以上の長方形や楕円形の長形土坑は墓であろうか。岡田はこれらの土坑を伸展葬された土坑墓と考えているが、滋賀里遺跡・日下遺跡の埋葬人骨はすべて屈葬であり、伸展葬は存在していない。また、晩期の大坂府藤井寺市国府遺跡や和歌山県和歌山市鳴神貝塚でも、鳴神貝塚の古い報告の1例を除き、すべて屈葬であるなど、近畿地方では伸展葬はほとんどないといえる。鳴神貝塚の1例についても詳細が不明であり、基本的には、近畿地方には伸展葬はないといつても問題はない。第68図は山田康弘による縄文時代の埋葬姿勢の地域性を表した図である。この図をみれば一目了然であり、関東・東海や九州では伸展葬が認められるが、近畿地方では認められないのがわかる。

近年、長径150cmを超える、特に、200cmを超える土坑墓が見つかっている。それらは、京都府長岡市伊賀寺遺跡の縄文時代後期後葉の火葬墓SK26の長軸約400cm、滋賀県多賀町土田遺跡の縄文晚期後葉の土坑墓SK8の長軸約200cmであり、いずれも焼人骨が土坑内の数ヶ所に分けて埋葬されている。このように再葬墓の中には、大型の長方形土坑を使用しており、向出遺跡の土坑の中にもこのような再葬墓が存在する可能性は否定できない。しかしながら、これらの大型の土坑を用いる土坑墓は、それぞれの遺跡でも極めて稀であり、現状では、このような土坑墓が1遺跡あたり1基以上存在する可能性はほとんどないといえる。以上の理由から長径150cmを超える長形土坑の大半は土坑墓以外の別の機能をもつ遺構である可能性が高い。

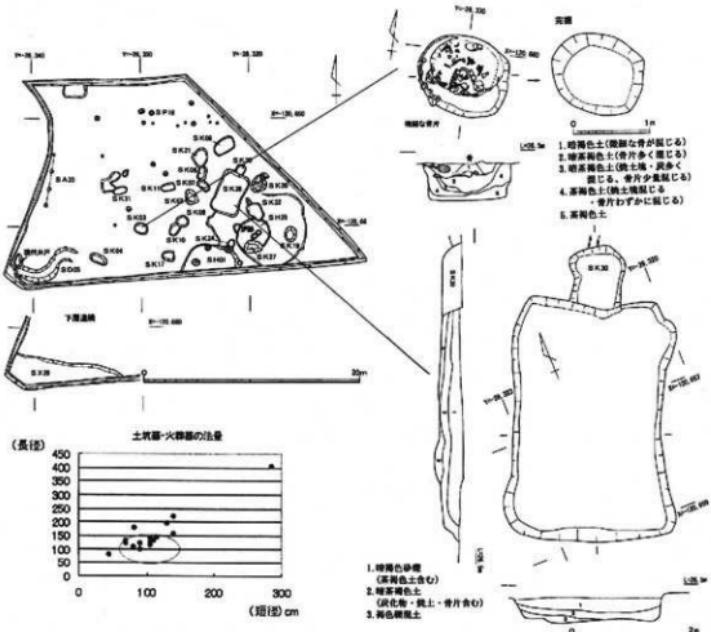
長形土坑とともに向出遺跡を特徴づける長径1mを超える正形土坑の機能は墓であろうか。長形土坑の多くが遺物の出土が少なく、埋土は单層が多く、焼土や炭化物などをあまり含まない状況とは違い、埋土が複層で、土器を多く含み、焼土や炭化物などを含むものや柱状の堆積がある土坑が比較的認められることが特徴としてある。このような土坑は再葬のために掘削された土坑であろうか。財団法人大阪府文化財調査研究センターの調査では、種別同定ができる焼骨は、すべてシカ、イノシシ、クジラなどのほ乳類ばかりであり、一方、大阪府文化財研究センターでの調査地周辺の阪南市教育委員会の調査では、後期後葉あるいは晩期中葉の円形土坑（正形土坑）から焼人骨が確認されている。

岡田は向出遺跡の正形土坑を後期初頭の大坂府和泉市池田寺遺跡や後期後葉の京都府長岡市伊賀寺遺跡の円形土坑（正形土坑）を埋葬施設とした火葬墓の平面形や堆積状況の類似性から焼人骨葬（火葬）による再葬墓と考えている（岡田2009）。岡田が着眼した両遺跡は、近畿地方の遺跡として向出遺跡の性格を類推する上、時期や地域あるいは立地の上から重要である。向出遺跡を含めて他の2遺跡とも遺跡立地が類似し、低湿地に隣接するような西日本の縄文集落の遺跡立地でというよりも、段丘上で河川とは比高差が比較的ある遺構検出面が疊を含む乾いた場所にある点で共通する。向出遺

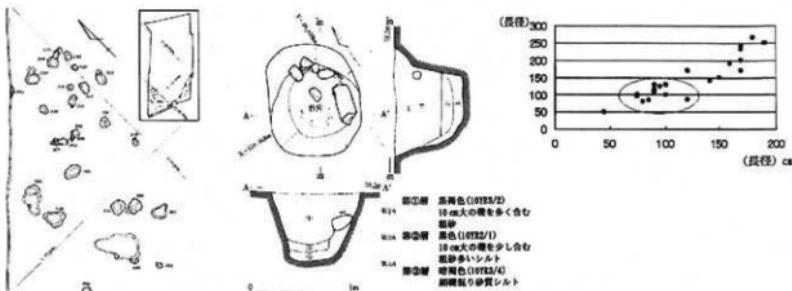


第68図 埋葬姿勢の地域性（山田2008より）

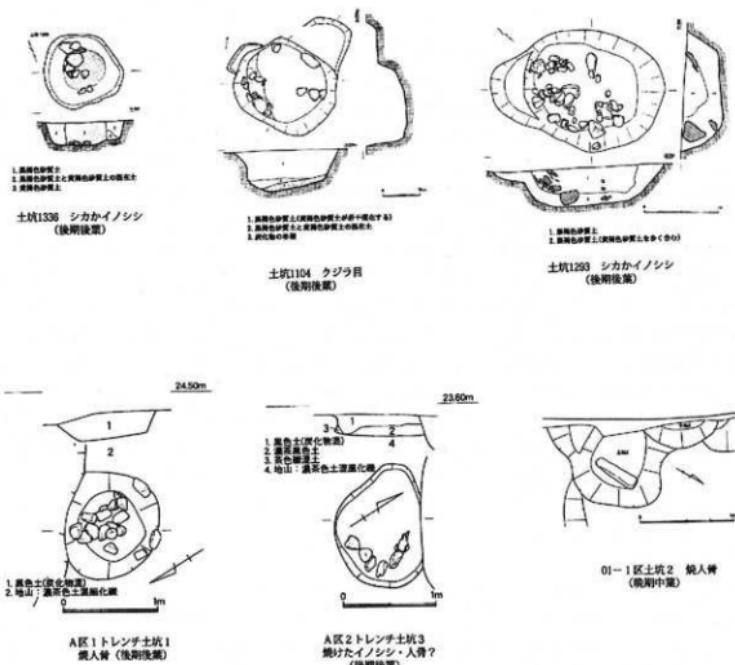
跡と立地の類似する2遺跡のうち、後期中葉から後葉にかけての伊賀寺遺跡では、堅穴住居の西側に土坑墓とされる長方形あるいは楕円形の土坑や火葬墓SK03やSK26が存在し、住居と墓は近接している。向出遺跡と比べた場合、向出遺跡に明確な堅穴住居が認められない点で違いがある。しかしながら、長方形や楕円形の土坑のほか、火葬墓SK03と土坑墓SK02が円形を呈し、向出遺跡の長形土坑と正形土坑に相当する2種類がある点で類似している。土坑墓とされる長形土坑のほとんどの埋土が単層であるのに対して、火葬墓SK03やSK26は複層の埋土が認められる。特に火葬墓SK03は円形を呈し、埋土が複層である点で、向出遺跡の正形土坑と類似する。土坑の大きさは長径100cm～150cm程度に集中し、150cm～200cmに僅かに分布する(第69図)。向出遺跡の土坑の規模(第67図)も長径50cm以下以下の土坑・小穴を除けば、おおむね類似している。



第69図 伊賀寺遺跡墓実測図および土坑法量図



第70図 池田寺遺跡墓実測図および土坑法量図



第71図 向出遺跡 烧骨出土土坑実測図

地理的に近い池田寺遺跡では、調査区の西端付近から中期末から後期初頭の土坑群が検出されている。遺跡の全体像は不明であるが、検出された遺構は向出遺跡の長形土坑、正形土坑と類似する土坑や屋外埋葬が検出され、土坑の規模（第70図）は伊賀寺遺跡の傾向と類似している。両遺跡との比較からみれば、向出遺跡にみられた正形土坑と長形土坑の組み合わせは、段丘等の比較的乾いた遺跡立地の遺跡においては後期初頭頃からは存在し、後期後葉に引き継がれると理解することも可能である。3遺跡で共通する長径1~1.5m程度の楕円形、長方形の土坑で、埋土が単層の土坑は、先に述べた理由から土坑墓としての機能を考えられ、1.5~2m程度の土坑は伸展葬の埋葬の可能性が少ない近畿地方では、墓以外の機能を考えざるを得ない。

それでは、正形土坑はどうであろうか。伊賀寺遺跡・池田寺遺跡・向出遺跡では、円形（正形）土坑から焼人骨の出土を見るが、伊賀寺遺跡と池田寺遺跡・向出遺跡とではその内容において、大きな違いがある。伊賀寺遺跡では火葬墓とされる2基の墓からは、焼人骨のみの出土であり、同じ土坑から焼人骨と焼獸骨が出土した池田寺遺跡や阪南市教育委員会調査の00-1A区2トレンチ土坑3（第71図）と同じ土坑から焼人骨の可能性のある焼骨と焼獸骨が一緒に出土したものとは焼獸骨を含まない点で区別できる。向出遺跡では、その他、焼人骨のみが出土した土坑や焼獸骨のみが出土した土坑もあり、さらに正形土坑の埋土の堆積状況や出土遺物量についてみた場合、埋土が複層であったり、焼土を含んだり、柱状の堆積が認められたり、さらに、長形土坑を墓の可能性が高いと判断した根拠の一つとした埋土内から遺物の出土が少ないと反対に多量の遺物が出土する。向出遺跡の円形（正形）土坑のあり方には、岡田が指摘するように多様性があり、すべての機能を一律に推定することは危険

かもしれない。

すでに述べたように岡田は正形土坑から焼人骨が出土した例を重視し、さらに池田寺遺跡や伊賀寺遺跡の事例をもって再葬としての火葬のための施設として考え、土坑から出土する焼獣骨も祭祀や葬送に関連する焼動物散布儀礼の先行研究と照らし合わせながら、こうした火葬に伴う葬送儀礼に関連すると考えている。焼人骨の出土から正形土坑の機能を再葬用の墓坑と考えることは、正しいと考えられるが、正形土坑の埋土に複層があることや遺物の多量出土がどのような意味をもつか説明する必要があろう。当然のことながら、当初から火葬用の墓坑として作られたのであれば、複雑な堆積状況はみられず、単葬用の墓坑と推定できる長形土坑と同様に埋土の状況は単層もしくはそれに近い状況を示していると考えられる。焼人骨が出土したA区1トレンチ土坑1（第71図）の埋土は単層であり、岡田が考えたような再葬用の墓坑として作られた可能性をもつが、その他の焼獣骨出土十坑の覆土は複層であるものが多い。また、岡田が正形土坑を特定する上で、重要な根拠となった焼人骨の出土した伊賀寺遺跡SK03（第69図）や池田寺遺跡の2503-OO（第70図）の墓坑内の埋土の堆積状況をみれば、複層の堆積があり、向出遺跡の一部の正形土坑の堆積の特徴と一致する。池田寺遺跡の例は、埋土から比較的土器が多く出土している点で類似する。伊賀寺・池田寺遺跡の土坑内の焼人骨の出土位置に着眼すれば、土坑内の底付近にあるのではなく、土坑内上部層から出土している。この事実からこれら2遺跡の土坑は土坑掘削から焼人骨の埋葬まで下層が堆積あるいは埋められるまでの時間の経過があり、再葬のために土坑を掘削したとはいはず、逆に当初、別の機能として作られたものが、再葬用の上坑として転用されたと考える方が理解しやすい。このような見方をすれば、焼土を含み覆土が複層の向出遺跡の正形土坑も、当初、別の機能であったものを再葬用として転用したものであった可能性もある。

それでは、これらの正形土坑の当初の機能は何であろうか。建物の柱穴、植物質食料の貯蔵穴、動物捕獲用の落し穴、炉などが考えられる。建物の柱穴としては、埋土の状況や土坑の配列からその可能性は薄く、炉もしくは貯蔵穴の可能性が高い。炉とすれば焼土や炭化物が出土している土坑の底面や壁の焼けが認められない点で、土坑内で火を燃やしたとはいはず、弥生時代にみられる堅穴住居内にある灰戸穴のようなものを想定すれば、炉としての可能性もある。しかしながら、上坑周辺に柱穴が巡る状況は認めにくい点からも炉の可能性は低いであろう。動物捕獲用の落し穴も墓に隣接して落し穴が作られることは考えにくい。植物質食料の貯蔵穴の可能性はどうであろう。貯蔵穴の平面形は円形のものが多く、断面形は袋状や皿状、円筒形を呈する。向出遺跡の正形土坑の中にもこれと類似する土坑を見つけることは容易である。近畿地方を中心とする西日本の縄文集落の貯蔵穴は一般に水辺付近の低湿地に作られることが多く、向出遺跡等の遺跡のように造構が掘り込まれた層のように礫を含む乾いた場所には作らないとされている。このような乾燥している場所に貯蔵穴を作る地域が台地など水辺より高い場所に遺跡を作る東日本地域に多く存在している。これらの地域では、貯蔵穴とされる土坑は数多くあるが、確実に貯蔵された植物質食料が出土した遺跡は、坂口隆の研究によれば、僅か27遺跡と少ない（坂口2003）。これは貯蔵された植物質食料が持ち出され、空になった貯蔵穴もあるが、乾燥しているため、低湿地の貯蔵穴に比べて遺存していた植物質食料が時間と共に消滅したものも多くあったと考えられる。

台地の発達しない近畿地方で、これに変わる遺跡立地が向出遺跡等のような隆起性の段丘や水の乏しい扇状地など乾燥した場所であり、こうした立地から正形土坑の機能の1つには東日本地域で多くみられる乾燥地型貯蔵穴が挙げられる。乾燥地型貯蔵穴は、埋土に炉内焼きだし物と考えられる焼土や灰あるいは粘土、さらには多量の土器や石器の出土をみる（海老原1992）、植物質食料の貯蔵以外の多目的利用のために転用されている。向出遺跡の正形土坑も焼土の出土や遺物の大量出土など類似点も多く、貯蔵穴の中には土坑中央に柱状の掘り込みがあるものもあり（坂口2003）、向出遺跡の柱状の堆積もこれらと同様な機能をもつ可能性も考えられる。こうした状況証拠を積み上げた場合、正形土坑の一部はこうした乾燥地型貯蔵穴として用いられた可能性を考えたい。

#### 4.まとめ

向出遺跡の最も栄えた縄文時代後期後葉から末にかけての時期の土坑は、単葬用の墓坑（長形土坑の一部）、乾燥地型貯蔵穴、貯蔵穴転用墓坑やゴミ穴および墓坑（正形土坑の一部）に機能が特定できない（長形土坑・正形土坑）があるといえる。墓と食生活にかかる貯蔵穴や居住関係の遺構と関連する柱穴状の小穴が時代の特定ができないものが多いため積極的には評価できないが、こうした中にこの時期の建物の存在の可能性があるとすれば、周囲より小高い、乾燥した場所での近畿地方の縄文集落の1つのあり方と考えられる。こういった建物あるいは住居の存在を補足するとすれば、遺跡から出土した石器に石鏃、スクレーパー、石錐、楔形石器、石皿類、敲石、砥石等があり、このような石器組成は縄文時代後期中葉～末頃の集落遺跡から出土する石器組成と類似している点が挙げられる。のことからも、この土坑群の周辺に居住関係の遺構が存在したと推定することもあるがち無理はないと考えられる。

向出遺跡はすでに述べたように近畿地方の一般的なイメージである低湿地に隣接した比較的水の豊富な場所に作られる集落というよりは、東日本的な乾いた遺跡立地の近畿的な適応の結果が現れた遺跡であると考えられ、墓、乾燥地型貯蔵穴、不確定ながら建物などで構成されている。こうした遺跡立地や遺構の組み合わせは、断片的にしか遺構は見つかっていないが、池田寺遺跡の例から中期末から後期初頭までは遡り、この時期、東日本から多くの遺物や遺構の情報が伝わる過程で、受け入れ側の近畿地方では、低湿地周辺以外に乾燥地した場所での生活様式も受け入れ、取り込んでいったと考えられる。向出遺跡はこうした生活様式を取り込んだ近畿の縄文集落の姿を表している。

また、後期後葉から末の近畿地方では、墓自体の類例が少なく、ましてや細別土器型式あたり最大数十基あるような墓地といえる例はほとんどない。後期前葉から墓が大規模化する晩期中葉以降の墓地へと構造上どのようにつながるのか、あるいはつながらないのか、単葬の土坑墓、石棺墓に加え、焼人骨が出土したことから再葬が後期後葉から晩期にかけてどのようにつながっていくかを検討する上でも、まだ多くの検討課題があるといえる。

#### 引用参考文献

- 海老原郁雄 1992 「北関東における縄文中期の群在性土壤」『縄文時代』3、縄文時代文化研究会  
大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1991 『池田寺遺跡IV』（『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第71輯）、財団法人大阪府埋蔵文化財協会  
岡田憲一 2009 「向出遺跡の発掘調査からわかること」『今、よみがえる向山遺跡—西日本縄文集落・墓地の転換期を考える—』（『向出遺跡評価検討委員会シンポジウム』）、阪南市教育委員会  
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2009 「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第133冊-3  
坂口 隆 2003 『縄文時代の貯蔵穴の研究』、アム・プロモーション  
田中早苗 2005 『向出遺跡範囲確認調査報告書』、（『阪南市埋蔵文化財報告』36）阪南市教育委員会  
田中早苗 2009 『向出遺跡発掘調査報告書-00-1区-』、（『阪南市埋蔵文化財報告』43）、阪南市教育委員会  
山田康弘 2008 『人骨山上例にみる縄文の墓制と社会』、同成社  
山元 建ほか 2000 『向出遺跡』（『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第55集）、財団法人大阪府文化財調査研究センター

## 第4節 繩文時代の集落と墓地 —集落からみた向出縄文墓地の評価—

大野 薫（大阪府教育委員会）

### 1. はじめに

近畿地方においては縄文時代中期後葉頃から遺跡の増加が認められ、後期前葉にはその傾向が一層顕著になる。後期中葉以降は遺跡数もそれほど多くはなく、増減にも波があるが、それでも中期中葉以前の遺跡の希薄な状況と比べると遺跡数が多いといえよう（大野2001）。その背景には人口・集落数の増加や、集落立地の変化、地域社会の変貌などがあると考えられる。

また近年の新たな調査・研究成果は当時の集落像・地域社会像を考える上で重要な視点を提供している。本報告ではそれらの新たな成果も踏まえ、近畿地方における後期前葉以降の集落と墓地を検討する。それらを地域社会と関連付けることによって、向出遺跡の占める歴史的位置を考えてみたい。

なお、時期区分については岡田憲一氏作成のもの（第8表）を用いる。また本報告で取り上げる縄文時代遺跡および関連する主要遺跡を第72図に掲げておく。

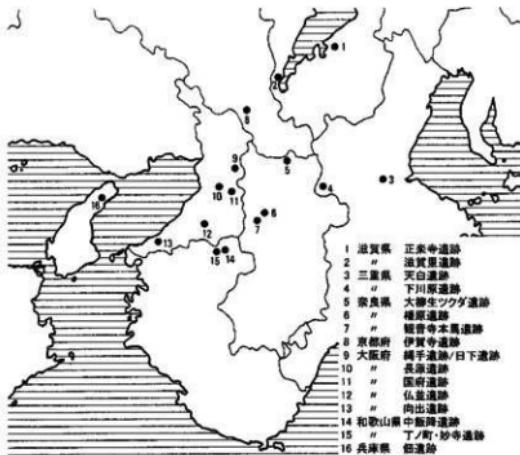
### 2. 近畿地方の縄文時代後晚期集落の特徴

近畿地方における縄文時代後晚期の集落は、大多数が1~3棟程度の住居とそれに伴う土坑などから構成されており、居住人数も十数人までの小規模なものであったと考えられる。これよりも大規模な集落も存在するが、大部分は小規模な集落なのである（大野2001）。そしてこのような小規模集落が当時の地域社会を構成していたと考えられるのである。

そのような小規模集落を具体的に示す例として、近年調査された和歌山県丁ノ町・妙寺遺跡をとりあげよう（田中元浩2008）。丁ノ町・妙寺遺跡では、東西約25m、南北約20mの範囲から、竪穴住居4棟（うち1棟は住居状遺構とされる）、配石遺構2基、土器棺墓3基、集石遺構（墓）9基、土坑などが検出された（第73図）。報告者は、板石を入れた土器棺墓1と立石のある配石遺構を中心に、竪穴住居・土器棺墓・集石遺構などが配置されていると考えている。北側には山裾が迫り、東側・西側には谷が入り、また発掘調査も行われているので、北・東・西には遺構は広がらない。一方、尾根筋が延びていく南側には遺構が広がる可能性がある。時期的には後期前葉の中津式期と福田K II式期の遺構が

時期区分		土器型式
中 期	前葉	鹿島 船元I
	中葉	船元II
	後葉	船元III 里木II・III 北白川C
後 期	前葉	中津I・II 福田K II 四ツ池・芥川 北白川上層1 北白川上層2
	中葉	北白川上層3 一乗寺K 元住吉山I
	後葉	元住吉山II 宮滝1・2 滋賀里I
晚 期	前葉	滋賀里2 滋賀里3a
	中葉	篠原
	後葉	滋賀里IV 口酒井・船橋 長原、水走

第8表 縄文時代の時期区分



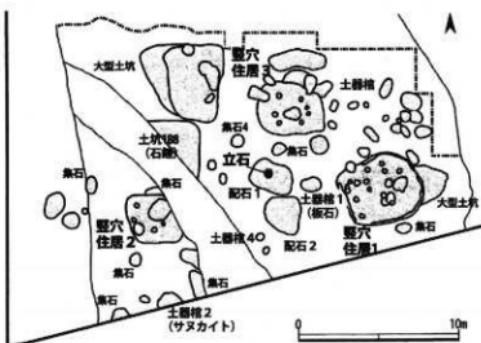
第72図 関連遺跡分布図

あり、竪穴住居も二時期に分かれている。したがって、未発見の竪穴住居を多少見込んだとしても、一時期1~3棟の竪穴住居と、それに伴う墓や配石遺構・土坑などから構成される小規模な集落が、二時期にわたって営まれたとみることができよう。ここではこのような小規模集落を、「小集落」とよんでおきたい。

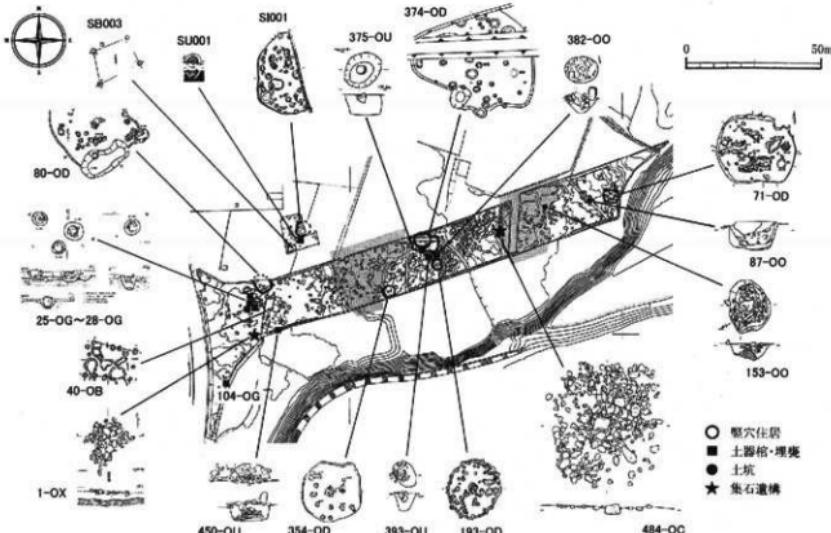
また、集落が営まれた時期は、細別土器型式では中津式・福田K II式で連続しているが、それぞれの土器型式が100年程度の時間幅を有していたとすると、長くても20年程度の耐用年数しか想定できない竪穴住居が、土器型式で2型式の間、連続して営まれていたとは考えられない。すなわち、中津式期に集落が営まれ、集落廃絶後しばらく期間を置いたのち、福田K II式期に再び集落が営まれた、と理解すべきなのである。

このように、丁ノ町・妙寺遺跡の調査成果は、後期前葉の集落が小規模なものであり、かつ集落が同一地点で連続して営まれたのではなく、途切れる期間がある、ということを示しているのである。そして、このようなことは後晩期全般にわたって認められる、と筆者は考えるのである。

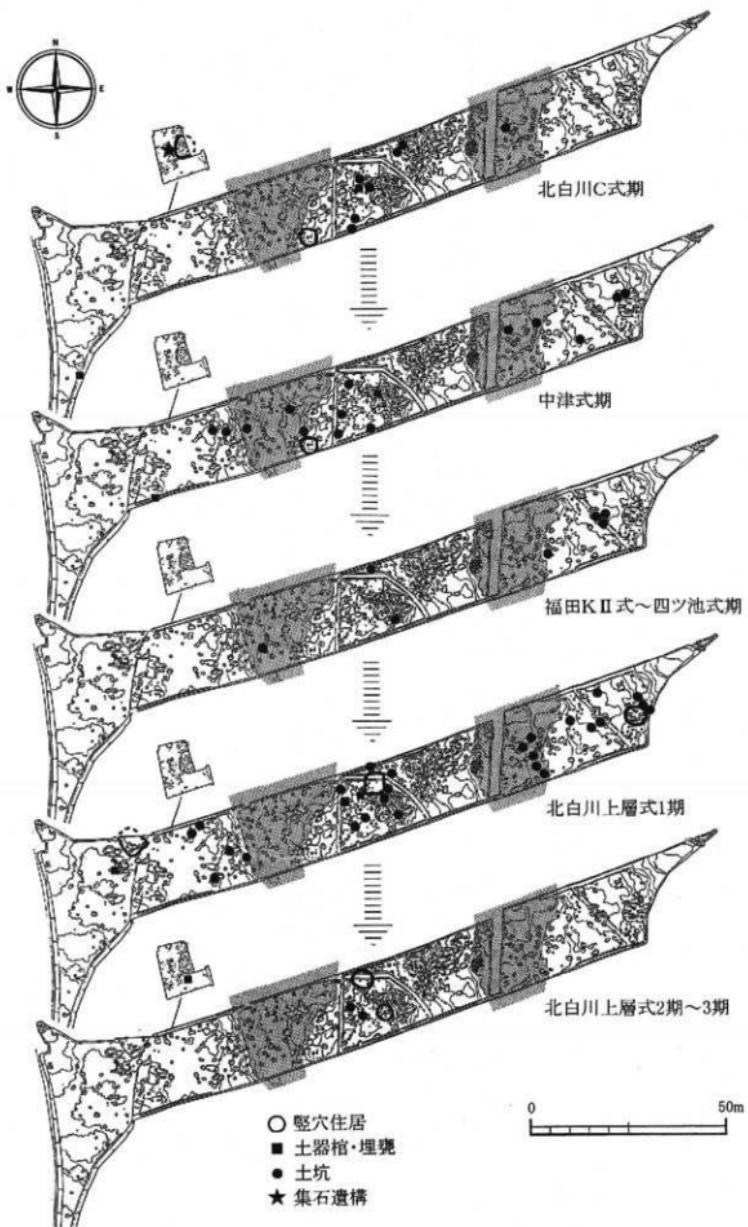
丁ノ町・妙寺遺跡で認められた小集落の非連続的居住についてさらに検討してみよう。大阪府仏並遺跡ではこれまでの調査（岩崎・松尾1986、乾・松村1993、西村1993）で、竪穴住居8棟（注1）、掘立柱建物2棟、埋甕・土器棺、配石遺構、多数の土坑などが検出されている（第74図）。2棟の掘立柱



第73図 丁ノ町・妙寺遺跡遺構図（田中元浩2008）



第74図 仏並遺跡縄文時代主要遺構図（大野2004を改変）



第75図 仏並遺跡時期別変遷図（大野2004を改変）

建物は時期の限定が困難なようだ。この2棟の掘立柱建物を加えると合計10棟になり、住居数からいうと縄手遺跡に次ぐ大阪府下第二の規模の集落ということができる。これらの遺構を時期別に整理すると下記のとおりである（第75図）。

北白川C式期：堅穴住居2棟、埋甕1基、土器棺1基、集石遺構1基、土坑多数

中津式期：堅穴住居1棟、配石遺構1基、埋甕1基、十数基の土坑、

福田K II式～四ツ池式期：土坑

北白川上層式1期：堅穴住居3棟、土器棺5基、土坑多数

北白川上層式2～3期：堅穴住居2棟、埋甕1基、土坑

福田K II式～四ツ池式期には住居が検出されていないが、土坑の存在から考えて、未発見の住居を想定することは許されよう。このようにみてくると各時期に住居があり、中期後葉から後期前葉にかけて継続して営まれた集落という評価が出てくる。

しかし、未発見の住居を多めに見積もったとしても、住居の少ない時期ならばせいぜい数棟の住居を復元しうるのみであり、細別土器型式の期間（100年程度）を通じて連続した居住を想定することは困難と言はぬかない。5期500年余を見渡しても、現時点で確認されている住居は掘立柱建物を含み10棟しかなく、継続居住は考えにくいだろう。また一時期における複数住居の同時存在を想定するなら、集落規模は大きくなる反面、継続居住の想定はなおさら困難となる（大野2004）。

結論から言うと、仏並遺跡では中期後葉から後期前葉にかけて断続的・回帰的に居住が行われたのであり、住居の存在していなかった時期も再々生じた、と筆者は理解するのである。一定期間の居住の後、居住地を移し、またいつの時期か回帰してきて居住したのであろう。このように、一定期間の居住と、その後の居住地の変更（注2）および市居住、すなわち断続的・回帰的居住が近畿地方の後晩期集落の特徴といえるのである。

### 3. 集落からみた地域社会

上述のような縄文時代後晩期の小集落は、消費と日常的資源獲得の単位と理解するのがよからう。ドングリなどの堅果類の採集や小動物の狩猟、口的に使用する樹木などの入手は、このような小集落単位でも可能であったと考えられる。しかし、集団で行う狩猟・漁撈や、遠隔地の稀少物資の獲得、大規模施設の建設などは小集落単独では無理な面があるとみてよからう。したがって、これら的小集落は、単独で自己完結的に存続していくことは困難であったと考えられるのである。

このような状況からみると、一定範囲に散在するいくつかの小集落が集まって一つのまとまり、すなわち地域集団、を作っていたと考えるのが合理的であろう。地域集団を構成する小集落は、一定範囲内でそれぞれ住み替えを行っており、繰り返される住み替えの結果、「遺跡が集中する範囲」というものが形成されてきたと考えられる。中期後葉以降、小集落が増加するとともに、「遺跡が集中する範囲」が顕著になってくる（矢野1997）。すなわち、地域集団がはっきりと姿を現してくるのである。その背景には、小集落間関係の緊密化があると考えられる。増加する小集落間に緊密な関係があったからこそ、一定範囲内での住み替えが繰り返され、「遺跡が集中する範囲」が明確化してくると考えるのである。

散在する小集落を地域集団として結びつけていた緊密な関係とは何か。それは日常生活における共同作業や相互依存がまず考えられよう。また、自分たちが共通の祖先をもっている、つまり何らかの血縁関係にあるという意識、を考えると説明がしやすい。上述のような共同作業・相互依存や、共通の祖先をもつという意識の強まりが、小集落間関係の緊密化をもたらしたのではなかろうか。

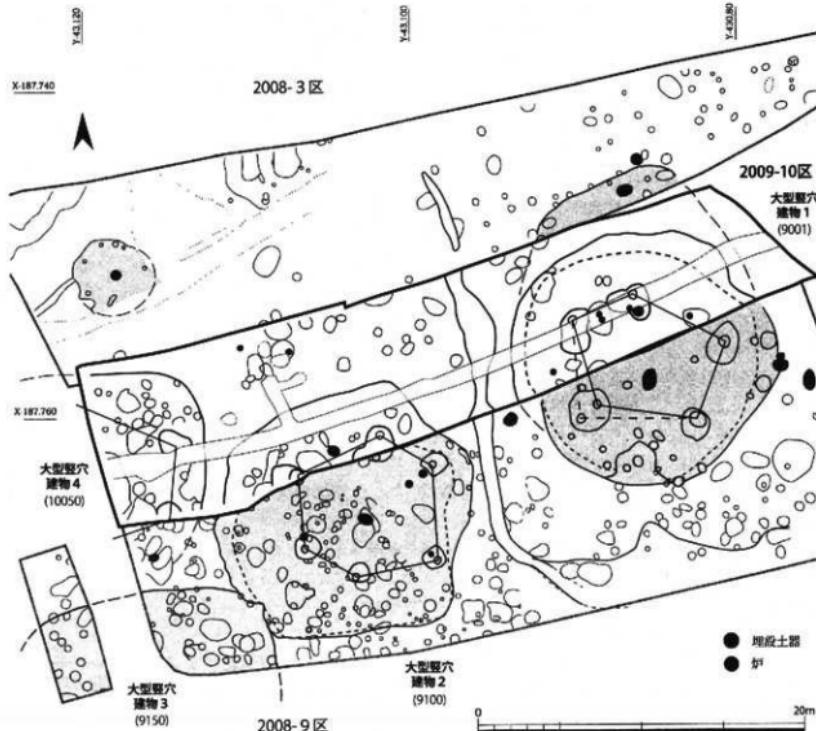
小集落間関係の緊密化を具体的に示すものとして、和歌山県中飯降遺跡で発見された大型堅穴建物を取り上げよう（第76図）。中飯降遺跡では後期前葉の大型堅穴建物が4棟検出された（富永2009）。大型堅穴建物1は直径約16mの略円形を呈し、床面積は約200m<sup>2</sup>に達する。主柱穴は5本あり、その中央南寄りに炉が1基ある。主柱穴は、大きいものでは掘方の直径が2m、深さ1m以上あり、柱の直径も40

cmに達する。時期は福田K II式・四ツ池式期～北白川上層式1期と考えられている。

上述の大型堅穴建物1のすぐ西南側で、大型堅穴建物2が検出された。大型堅穴建物1とほぼ同形同大で、長径約16m、短径約15m、床面積約188m<sup>2</sup>と推定される。主柱穴は6本で、そのほぼ中央に炉が1基ある。時期は大型堅穴建物1よりは新しく、北白川上層式2期に埋没したようだ。

大型堅穴建物3は、大型堅穴建物1・大型堅穴建物2と類似した大型堅穴建物の可能性があるが、その一部を検出したのみで、主柱穴も炉も明確でない。大型堅穴建物4は、大型堅穴建物2の西側にあり、4棟のなかでは最も高い場所に位置する。一部を検出したのみだが、長径約16mと推定され、主柱穴も確認されている。時期も4棟のなかで最も遅く、中津式期のものとされている。

このような大型堅穴建物はどのような目的で建てられたのであろうか。大型堅穴建物は床面積が180m<sup>2</sup>以上あり、通常住居の10倍以上の面積を有している。主柱も、通常住居が直径10～20cm程度であるのに対し、大型堅穴建物では直径40cmもの巨大な材を用いている（注3）。そもそも、このような大型堅穴建物は、建設そのものが小集落構成員のみでは困難であるし、また仮に建設されたとしても、小集団の居住には適さない。発見例が極めて稀であること、通常の居住用ではないことを示唆している。このようなことからみて、大型堅穴建物は地域集団全体の協力・協業によって建設され、地域集団全体の祭りや集まりに供されたと考えるのが適切である。地域集団の祭りの場、集まりの場が大型堅穴建物として現れたということは、地域集団内における小集落間の結合が強く、緊密な関係を有していたことを反映していると考えられるのである（大野2009）。



第76図 中飯降遺跡大型堅穴建物群遺構図（富永2009）

#### 4. 集落と墓地

集落には墓地がある。墓地は死者を葬る場・悼む場であり、祖先を祭る場であり、また集落を構成する集団の祭りの場ともなる。縄文時代後期前葉までの墓地は、一般的に、集落の居住域に隣接したり、あるいは居住域と不可分な配置であったりして、いわば居住域とともに集落を構成していた。このような墓地のあり方は、その規模を問わなければ、後期前葉以降も続いていったと考えられる。

一方、後期中葉頃になると、大型の墓地のみの遺跡が現れる（大野2001）。大阪府向出遺跡は山中川と菟砥川に挟まれた独立丘陵上に立地しており、縄文時代の土坑等約1300基を検出した（第77図・第79図、小林・山元・岡田2000）。すべての土坑が墓とは限らないが、ここが大型の墓地であることは認めてよいと考える。向出遺跡では、今まで独立丘陵上の各所で行われてきた範囲確認調査においても、土坑・土坑墓が検出されることはあるものの、住居は未だ1棟も検出されていない（田中早苗2009、三好ほか2009）。そのような調査の積み重ねからみて、筆者は、向出遺跡は個別の集落から独立した大型の墓地である、と考えている。

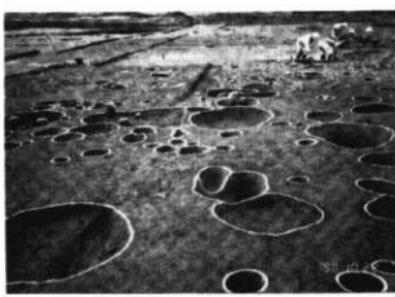
近畿地方においては、後期中葉頃になると向出遺跡のような大型の墓地が点々と現れてくる（岡田2005）。三重県天白遺跡では後期中葉～晚期前葉の配石遺構・埋設土器・土坑墓などが検出されており、土偶・石棒などの祭りの道具も多量に出土している。周辺で確認調査も行われているが、それにもかかわらず住居は見つかっていない（森川ほか1995）。天白遺跡は墓地と祭りの場の遺跡と考えてよからう。奈良県大柳生ツクダ遺跡（第78図）では、両側を谷で囲まれた舌状の丘陵状地形のところに、後期後葉～晚期中葉の土坑・ピット・埋設土器など約400基が検出されている（櫻原考古学研究所1998、水野・石井・湯本1999）。後世の水田造成の際に大規模な整地が行われており、消滅した遺構も多いとみられ、実数はさらに増えるであろう。大柳生ツクダ遺跡では住居は報告されていないが、住居の可能性のある大型の土坑が見られる。それでも大柳生ツクダ遺跡が大型の墓地遺跡であることは変わりない。

このような大型の墓地は、向出遺跡が端的に示しているように、個別の集落から独立して営まれたとみることができる。何故ならば、このような大型の墓地には住居が伴わないか、伴ったとしてもごく少数であったり、時期が異なったりしているのである。また墓地の規模において、従来の集落に伴う墓地とは著しい格差があり、個別の集落の墓地とは考えられないものである。すなわち、向出遺跡に代表される大型の墓地は、個別の集落からは独立しており、かつ複数の集落の共同墓地として営まれたと考えができるのである。

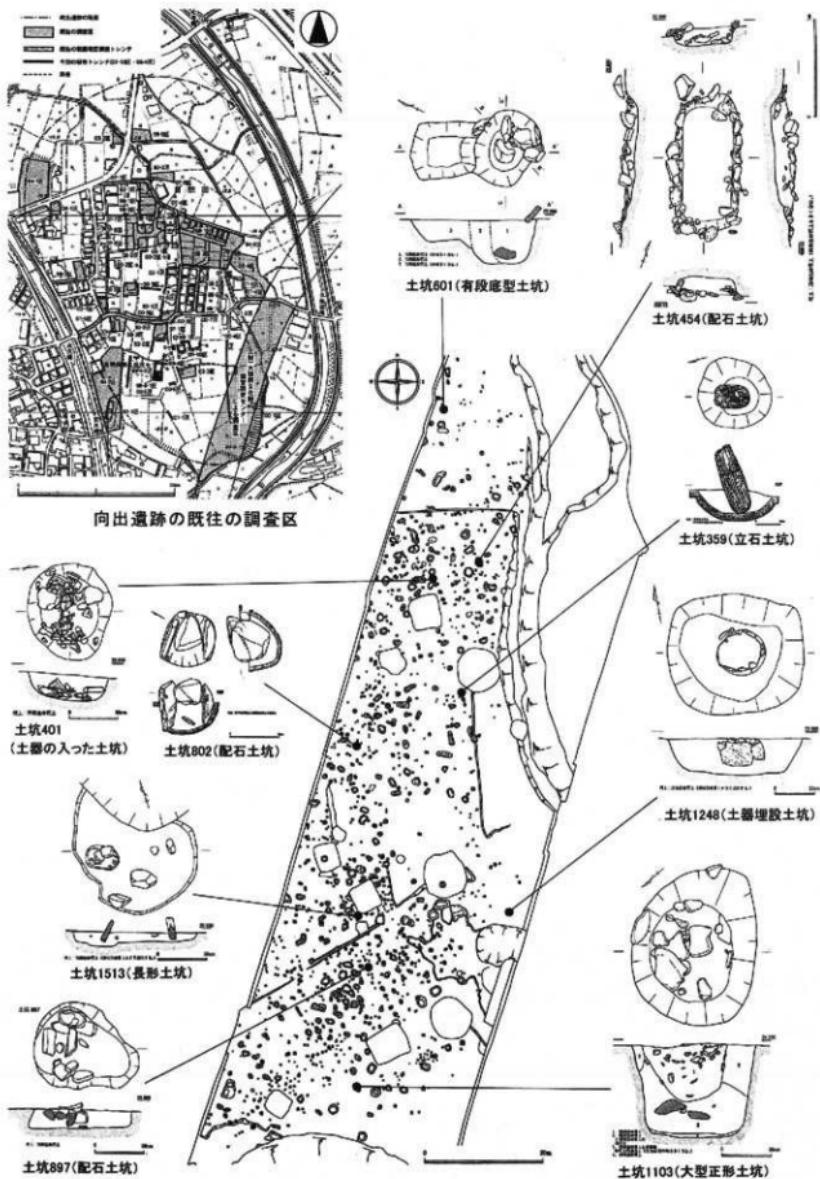
墓地が集落から独立し、かつ共同墓地となる背景には、いくつかの小集落が結びついた地域集団内の関係がより緊密化し、共通の祖先を祭る意識が強くなったことが想定できる。共通の祖先を祭るという意識が共同墓地という形で明確化し、そこに地域集団の構成員が集うことによって、互いの結びつきを再確認し、緊密化を図ったのではないかと考えられるのである。



第77図 向出遺跡（筆者撮影）



第78図 大柳生ツクダ遺跡（筆者撮影）



第79図 向出遺跡の既往の調査区と縄文時代主要遺構図（大野2009）

## 5. 結論

縄文時代後晩期の集落は押しなべてごく小規模なもので、そのような小集落がいくつかまとまって地域集団を構成していた。地域集団内の小集落は、一定範囲内で住み替えを繰り返しており、共同作業・相互依存・祖先を共通にするという意識などによって緊密な関係を維持していたと考えられる。

地域集団内の緊密な関係は大規模施設の建設として現れた。中飯降遺跡の大型堅穴建物は縄文時代後期前葉における地域集団内の緊密な関係を具体的に示すものと評価できるのである。加えて、「遺跡が集中する範囲」の明確化も、緊密な関係を有する小集落の断続的・回帰的居住の結果もたらされたものと考えられるのである。

緊密な関係は、また、個別的小集落から独立した大型の共同墓地として現れた。向出遺跡は小集落から独立した大型の共同墓地として、後期中葉頃における地域集団内関係の変化を示すものと評価できよう。向出遺跡は、近畿地方におけるこのような地域社会の変化を雄弁に物語る、特筆されるべき遺跡と評価できると考えるのである。

### 注

- 1) 墓穴住居の報告数は7棟だが、筆者はうち1棟（354-OD）が二時期の堅穴住居の重複したものと考えております、それを認めるならば堅穴住居は8棟となる。
- 2) 地域集団領域内の居住地の変更を、筆者は住み替えと呼んでいます。
- 3) 主柱を直径40cm、長さ7.5mのクリ材（気乾比重0.6）とすると、その重量は0.56tとなる。

### 引用参考文献

- 乾 哲也・松村まゆみ 1993 『仏並遺跡発掘調査報告書』、和泉市教育委員会  
岩崎二郎・松尾信裕 1986 『仏並遺跡』（『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第5輯）、財団法人大阪府埋蔵文化財協会  
大野 薫 2001 「近畿・中国・四国地方における集落変遷の歴史と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』、縄文時代文化研究会  
大野 薫 2004 「仏並縄文集落の変遷」『市大日本史』第7号、大阪市立大学日本史学会  
大野 薫 2009 「縄文時代の小規模集落と地域社会」『関西縄文時代の集落と地域社会』（『第10回関西縄文文化研究会発表要旨集』）、関西縄文文化研究会  
岡田憲一 2005 「大規模葬祭空間の形成－近畿地方における縄文時代後晩期集落のあり方－」『関西縄文時代における石器・集落の諸様相』（『関西縄文論集』2）、六一書房  
樋原考古学研究所 1998 『大柳牛ツクダ遺跡現地説明会資料』、奈良県立樋原考古学研究所  
小林義孝・山元 建・岡田憲一 2000 『向山遺跡』（『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第55集）、財団法人大阪府文化財調査研究センター  
田中早苗 2009 「向出遺跡発掘調査報告書-00-1区-」（『阪南市埋蔵文化財報告』43）、阪南市教育委員会  
田中元浩 2008 「丁ノ町・妙寺遺跡の発掘調査」『財団法人和歌山県文化財センター年報』2007、財団法人和歌山県文化財センター  
宮永里菜 2009 「中飯降遺跡の発掘調査」『関西縄文時代の集落と地域社会』（『第10回関西縄文文化研究会発表要旨集』）、関西縄文文化研究会  
西村 歩 1993 『仏並遺跡III』（『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第77輯）、財団法人大阪府埋蔵文化財協会  
水野敏典・石井香代子・湯本 整 1999 『大柳生遺跡群第7・8次（大柳生ツクダ遺跡・大柳生藤井遺跡）発掘調査概報』、奈良県立樋原考古学研究所  
三好義三ほか 2009 『向出遺跡範囲確認調査報告書II』（『阪南市埋蔵文化財報告』44）、阪南市教育委員会  
森川幸雄ほか 1995 『天白遺跡』（『三重県埋蔵文化財調査報告』108-2）、三重県埋蔵文化財センター  
矢野健一 1997 『西日本の縄文集落』『立命館大学考古学論集II』、立命館大学考古学論集刊行会

## 第5節 西日本縄文文化の転換という視点から見た向出遺跡

泉 拓良（京都大学大学院教授）

### 1.はじめに

向出遺跡がいかに重要な意味を持っているのかということは、発表者で一致を見ているが、個別の遺構の解釈や、遺跡の役割等については、発表者で意見の食い違いがある。西日本、近畿地方の縄文研究は未だに新発見が続いている、意見がまとまるに十分な資料がそろってはいないのが現状である。他の皆さんも、遺構や遺跡についての発表であったので、私は、土器型式の変化、系統の変化、土器胎土の変化、石器に使う石材の変化を資料に、向出遺跡の栄えた時期が、西日本縄文文化の転換期にあたることを述べる。

### 2. 縄文後期における土器型式系統の変化

向出遺跡に代表的な土器は、縄文が施されない西日本に典型的な土器で、後期末の宮内式（第80図）や滋賀里I式（第81図）と呼ぶ土器である。これらの土器の特徴は、第一に縄文が無いということである。器形を見ると変化に乏しく、深鉢と浅鉢と少量の注口土器とからなっている。このような土器は西日本一円に広く分布し、縄文を持ち装飾的な伝統の強い東日本の縄文土器と対峙している。その典型例として、縄文後期後葉と晚期前葉の土器型式の分布状況を見たのが第82図である。東日本には安行式や亀ヶ岡式といった極めて装飾に富み器形に変化の多い土器が分布し、西日本には縄文のない凹線文土器や文様の無い粗製深鉢と黒色に磨研された浅鉢からなる西日本・黒色磨研系の土器群が分布していた様子が分かる。このような縄文土器の東西の違いは、地域的にはおおよそフォッサマグナを境とし、時代的には後の弥生時代にまで引き継がれていた。

では、このような東西差はいつ生じたのであろうか。土器の東西差は、今から約1万年前の早期初頭の押型文土器の時代からあったが、先に述べたような「東の縄文プラス装飾的」対「西の縄文無文で非装飾的」と言うような極端な対立ではなかった。

向出遺跡と係わる縄文後晚期で考えると、少なくとも後期初頭の中津式（第83図）～称名寺式（第84図）の時期では、北九州から関東地方までよく似た土器が分布していた。

後期も前・中葉になると地域性が現れ、関東以西では、南九州、中北九州、瀬戸内、近畿、北陸、関東地方に分かれる。大きくくくると、口縁部に文様を集中させ沈線文主体の南九州（第85図a）、中九州から東海地方までは口縁部と胴部に分けて磨消縄文や条線文様を描く縁帯文土器（第85図b）、深鉢の上半に磨消縄文を描く堀之内式や加曾利B式（第85図c）にわけられる。深鉢や浅鉢の器形の上でも、この3地域では大きく異なっていた。

近畿地方では縁帯文土器の時代は6期に細分しているが、その終わりに変化が現れる。縁帯文土器の3期（第86図）（千葉2008、泉の北白川上層式2期）までは、縁帯文は、頸部を無文にして口縁部と胴部に沈線で文様を描く深鉢と、口縁と胴部に縄文を施文する鉢とが多く、磨消縄文を施文した土器は東日本の堀之内式系の形態と文様を持つものであった。しかし、4期（北白川上層式3期）になると深鉢が在地系の磨消縄文文様で飾られ、器形も湾曲した口縁部となり、東日本系の磨消縄文深鉢は無くなる。東日本系の土器は、加曾利B式の櫛描文土瓶形注口土器にはほとんど限られるようになってしまった。また、4期の終わりには、結節縄文や附加条縄文という特殊な縄文が多用されるようになる。5期（一乗寺K式）になると、この特殊な縄文が多用されるようになる。幅の狭い文様帶には、それまでの縄文施文ではなく、結節部だけを施文することが増え、脱縄文の流れが始まる。6期（元住吉山I式）になると、貝殻で施文した擬縄文やヘラ刻みが縄文に取って代わるようになり、この傾向はさらに進行し、幅の狭くなった文様帶の結節縄文や縄文が擬縄文や刻目列にかわる。この時期の終わり頃には、それまで回転させて擬縄文に用いていた巻貝（ニナ類）を、その巻貝の側面を回転せずに面を押し引いて、幅広い複数の沈線束を作る施文手法が出現し、凹線文が成立したと推測している。この

回線文の成立と文様を施文しなくなることをもって、元住吉山II式の成立と定義している。後期末以降の西日本に特徴の繩文を施文しない深鉢・浅鉢は、当該期の近畿地方において、以上のようにして出現したと考えられる。

西日本の深鉢無縄文化の原点である5期（一乗寺K式）の変化の様子を詳細に見ると、結節縄文や擬縄文という属性は中部瀬戸内地方にやや古い例がある。しかし一方で、深鉢の文様には関東地方加曾利B式に類似した文様と、九州地方系の鐘崎式系の文様に類似したものがあり、変化の起源の複雑さを示している。口縁部が屈折する特徴は未だに系譜がよく分からぬのが、おそらく飛騨や伊那谷あたりから波及したのではないかと考えられる。すなわち、繩文を失っていくことの出発点となつた一乗寺K式の諸属性が東と西の双方にある点が注目に値する。

5期の土器が発展した6期（元住吉山I式）の土器は、大分県から富山县・静岡県東部までそのものや類似した土器が分布していた。南九州地方では中期末ないし後期初頭以来続いた阿高式系の伝統が終わり、縁帶文土器系統の西平式が進出する。すなわち、繩文を失う直前時期の元住吉山I式が、後の繩文を施文しない西日本伝統の土器群のトポジカルな形成と深く関係する。

近畿地方における土器の以上のような大きな変革期に、まさにこの向出遺跡で墓の形成が始まるのだ。一乗寺K式・元住吉山I式（向出遺跡報告書のII期・岡田2000）である。それ故に、向出遺跡を考える上に、この時期の変化が何を示しているのかを知ることが重要と思われるのである。

### 3. 大阪湾沿岸における遺跡数の変遷

実は、今まで述べてきた時期の遺跡の変化に注目した研究が発表されている。京都大学の修士を終えた大阪文化財センターの河本純一さんの修士論文を、本人の了解を得たので、紹介する。河本さんは大阪湾沿岸の地域をいくつかの小地域、遺跡の群に分けた。その上で、遺跡の消長、遺跡が盛んであったり廃れてしまったりすることを調べた。その結果を第87・88図に示した。第87図は大阪府と和歌山県の繩文遺跡の分布図、この地域の繩文遺跡を様々な属性により i 群から x 群に分けている。この繩文遺跡群ごとの中期末以降の遺跡数の増減（繩文集落の盛衰・変遷）を示したのが第88図である。

i 群の遺跡数の推移は大変特徴的で、後期前葉（福田K II式、四ッ池式）と一乗寺K式に遺跡が極端に少なくなることを示している（この傾向は京都盆地での変遷にも確認されている）。同様な曲線は、この地域の vi 群や v 群にも認められる。問題点を絞り、今議論している後期中葉（一乗寺K式、元住吉山 I 式）での遺跡の急減少に限ると、大阪湾岸では、vi 群と遺跡の極端に少ない v 群を除き、他のすべての遺跡群にこの急減少が認められるのである。とくに、大阪湾岸地域で遺跡が集中する生駒山西麓地域の i 群と泉北地域の v 群でのこの時期の急激な遺跡の減少は、京都盆地の繩文遺跡の急減とも対応し、先述した後期中葉の土器交代期に当たるので、何かしら重要な意味があるのでないかと考えている。

一方、大阪府下でこの時期に遺跡が増加する群が一ヵ所ある。それが、ここ向出遺跡を含む vi 群である。vi 群の位置する泉州地域は、繩文遺跡はあまり多くはないのだが、他の群とは異なり後期中葉に遺跡数のピークがある。では、この違いにはどんな意味があるのだろうか、以下で土器系統の変化とあわせて、他の属性を検討しよう。

### 4. 土器胎土の変化

河本さんの研究にしたがい、土器系統の変化と遺跡数の変遷からみた後期中葉の転換点を、土器の胎土の変化で見ていく。第89～92図は大阪湾岸と紀北地域の代表的な遺跡について、出土した土器に含まれる砂粒の種類の比率を示した図である。本発表は詳細な繩文土器胎土の研究が目的ではないので、変化を特徴的に表す砂粒の特定の種類に絞って紹介する。それは、図に示した A 類の生駒山西麓に特徴的な角閃石、D 類の紀ノ川流域に特徴的な結晶片岩である。

第89図の後期前葉・北白川上層式2期（縁帶文3期）の土器を見ると、A 類がほぼすべての遺跡で見

られる。生駒山西麓の縄手遺跡では62%と非常に多く、泉南vi群の三軒家遺跡や淡輪遺跡では11~19%の土器に認められる。結晶片岩地域にある和歌山県海南市でも、溝ノ口遺跡では結晶片岩を含む土器が54%と多いのだが、角閃石の土器も4%出土している。結晶片岩を含む土器はこの時期には大阪湾岸には及んでいない。

第90図は後期中葉の北白川上層式3期（縁帯文4期）である。iii群の縄手遺跡ではこの時期の土器が発見されていないが、vi群の三軒家遺跡や淡輪遺跡では6~9%の土器に角閃石が含まれており、和歌山県海南市溝ノ口遺跡でも2%といえ出土している。この時期になると結晶片岩を含む土器が北上するようで、泉南vi群の淡輪遺跡で4%出土している。

第91図は後期中葉の一乗寺K式（縁帯文5期）になると、iii群では、上町台地に遺跡があるものの生駒山西麓では土器の出土する遺跡がなくなる。泉北v群では新たに始まる春木八幡山遺跡、中之社遺跡からは角閃石を含む土器はなく、vi群では前の時期から続く三軒家遺跡や淡輪遺跡でも、角閃石を含む土器は3~5%とさらに減少しているが、前時期からの残存かも知れない。一方、結晶片岩を含む土器は上層式、淡輪遺跡で8%と前段階の倍に増加している。和歌山県の溝ノ口遺跡では角閃石を含む土器は出土しなくなり、同じ群の岡村遺跡でも1%と極端に少ない。

第92図は後期中葉の元住吉山I式（縁帯文6期）である。この時期になると、角閃石を含む土器が再び増加し始める。泉北v群の鳳東町4丁遺跡、山ノ内遺跡で14~20%と急増し、泉南vi群の三軒家遺跡、向出遺跡で7~16%と増加している。一方、結晶片岩を含む土器は泉南vi群の向山遺跡で5%と減る。しかし、和歌山県のx群の岡村遺跡や溝ノ口遺跡では、この時期になってもまだ、角閃石を含む土器は増えないのである。

以上をまとめると、角閃石を胎土に含む土器は、その分布の中心は生駒山西麓にあり、後期前葉までは和歌山県海南市までも広がっていたが、北白川上層式3期になると生駒山西麓で遺跡が急減するとともに、周辺の地域では出土量が半減した。一乗寺K式期になると、生駒山西麓で遺跡が発見されなくなり、大阪湾岸ではほとんどの遺跡で角閃石を含む土器が発見されなくなる。特に新たに出現した遺跡では角閃石を含む土器は皆無であり、当時は角閃石を含む土器が流通していなかったのではないかと考えられる。向出遺跡のある泉州地域から見れば、生駒山西麓とのつながりが切れ、和歌山との関係が深くなると考えられる。しかし、次の元住吉山I式期になると生駒山西麓に遺跡が現れ、今度は急激に、角閃石を含む土器が大阪湾岸地域に広がる。しかし、その傾向は、元住吉山I式期では和歌山県までには及ばなかったようだ。

このような、胎土に含まれる産出地域のわかる砂粒（角閃石や結晶片岩）からみた土器関係の変遷は、土器系譜の交代や遺跡分布の変遷と対応しており、河本さんの研究が大変優れたものであるとともに、北白川上層式3期・一乗寺K式期に大阪や和歌山において大きな縄文集団の再編があったことを示していると考えた。そして、この時期に泉南vi群の地域、向出遺跡が特に重要な役割を果たした可能性が考えられる。

## 5. 石材の変化

向出遺跡の調査で、そのような転換期に関する興味あるもう一つの事実が明らかになっている。第93図は向出遺跡報告書に掲載されている図で、出土したサヌカイト（石器の材料となる石材）の原産地が時期ごとに変化したことが分かるようになっている。執筆した岡田憲一さんは、時期のわかる土坑の中から出土したサヌカイトの種類をA、B、Cの3種類に分け、その比率を示した。ちなみに、A類は大阪府・奈良県境にある二上山産のサヌカイト、B類は香川県金山産のサヌカイトである。第94図はこのデータを土器型式ごとに整理して、使用したサヌカイトの産出地の年代的変遷を示している。

第94図を見ると、元住吉山II式の段階は、9点と出土量が少なく信頼度は低いが、この時期だけはB類が非常に多いことが分かる。点数ではA:Bが3:7。重量比では2:8と、香川県金山産のサヌカイトであるB類が圧倒的に多いのである。近くの二上山産ではなく海を越えた四国香川県の金山産のサ

ヌカイトをより多く用いていたことがわかった。

宮滝2式以後は二上山産が増加し、後期最終末の滋賀里I式期では二上山産が7割を占めるようになる。土器や遺跡の変遷で問題となった後期中葉の一乗寺K式期については良好な遺構が検出されていないため、まったくわからないが、元住吉山I式期については図93には掲載されていないが、土坑1500とよぶ遺構があり、A類が3点、B類が5点出土している。これから想像するに元住吉山II式期と同じように金山産サヌカイトが多かったのではと推定できる。

一般的に近畿地方の縄文時代では、サヌカイトは二上山産が用いられたと考えられてきたので、元住吉山I・II式期の金山産のサヌカイト多用は驚きであった。ところで、京都大学が保管している京都市・一乗寺向畠遺跡から出土したサヌカイトを現在調査しているが、意外なことがわかつてきている。整理に当たっている京都大学（当時）の鈴木淳さんによれば、一乗寺K式が主に出土した北地点では、石鏡46点の石材は、奈良県二上山産サヌカイトと香川県金山産サヌカイトのものがほぼ同数あるとのことである。京都市では北白川小倉町遺跡から出土したサヌカイト製の石鏡（前期と少量の後期前葉）の大部分が二上山産のことであり、香川県からはより離れた京都市でも、後期中葉の時期にサヌカイトの供給地の変更が確認できるのである。また、京都盆地の東側、比叡山西南麓では、北白川扇状地を中心に、縄文時代の遺跡が前期から継続的に営まれていたのだが、先述した一乗寺K式の時期に、北白川扇状地から、一乗寺の扇状地へと遺跡が移動している。このように、近畿地方の他の地域でも、大阪湾岸地域で見られる遺跡の変化、土器の変化、石材の変化と同様な現象を確認できるのである。

## 6.まとめ

今まで述べてきたように、向出遺跡が本格的に利用されるようになる後期中葉の時期、近畿地方では、土器の系統に変化が起こり、遺跡が変わり、石材の供給源が変わった。原因はわからないが、生駒山西麓の遺跡群が壊滅することと関係がありそうである。その影響なのか、崩壊を招いたのと同様なことが起こったのか、京都盆地や泉北地域では伝統的な集落域の断絶が起こった。この混乱のなかで、従来の二上山産サヌカイトの供給システムが崩れて、西から瀬戸内海の石材が入って来るようになったのではと考えられる。墓制の変化や土器の文様や器形の系統からみて、東からの影響も確認できる。このように、向出遺跡が本格的に利用されるようになった後期中葉は、近畿の大きな転換点だったのだと思う。そう考えると、この地域で唯一増加地域である泉州の中心的遺跡である向出遺跡は、ひょっとするとその転換の中心であったかもしれないのだ。

## 引用参考文献

- 岡田憲一 2000 「西日本縄文後期後葉土器編年序論」『向出遺跡』（『(財)大阪府文化財調査研究センター 調査報告書』第55集）、財团法人大阪府文化財調査研究センター  
千葉 豊 2008 「縁帯文土器」『絶覧縄文土器』、『絶覧縄文土器』刊行委員会



第 80 図 向出遺跡出土宮滝式土器  
 (『向出遺跡』2000 卷首図版 宮滝式を引用)



第 81 図 向出遺跡出土滋賀里式土器



第 82 図 繩文後期後葉と晩期前葉の土器型式分布  
 (『総覧繩文土器』1989 折込図⑧⑨を引用)



第83図 中津式土器  
（『縄文土器大観4』1989 図49を引用）



第84図 称名寺式土器  
（『縄文土器大観4』1989 図39を引用）



a. 南九州の市来式（図542を引用）

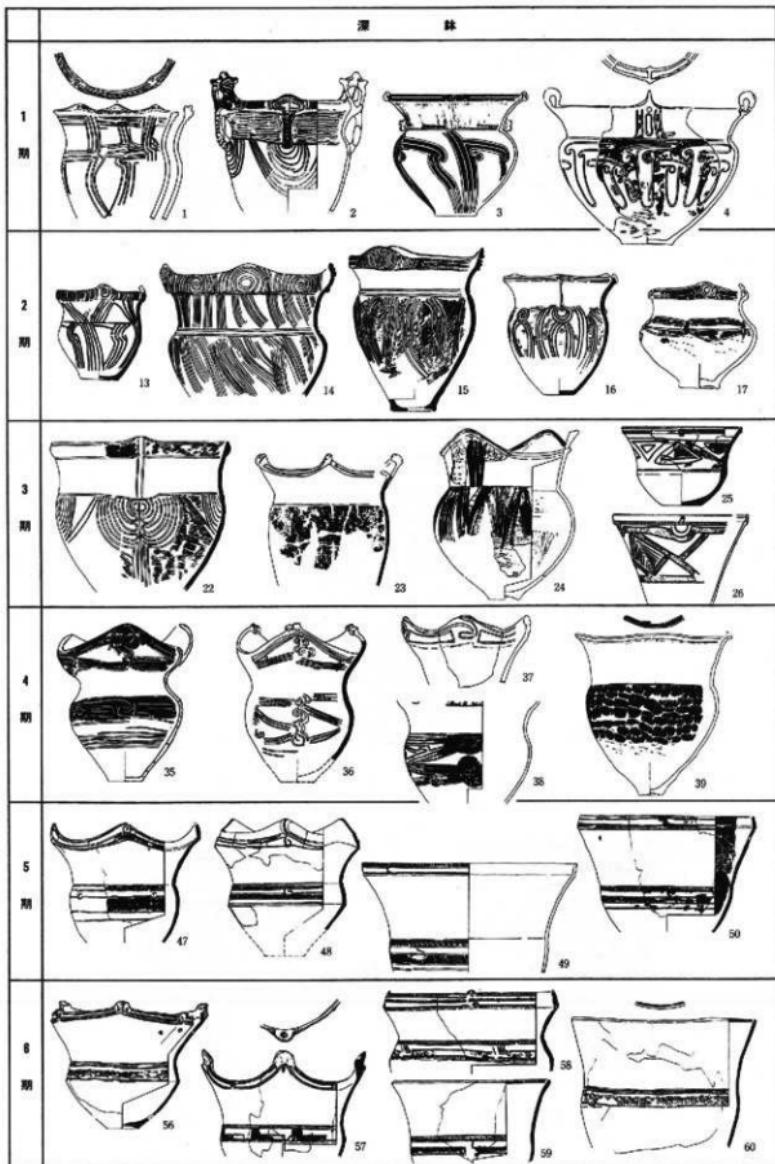


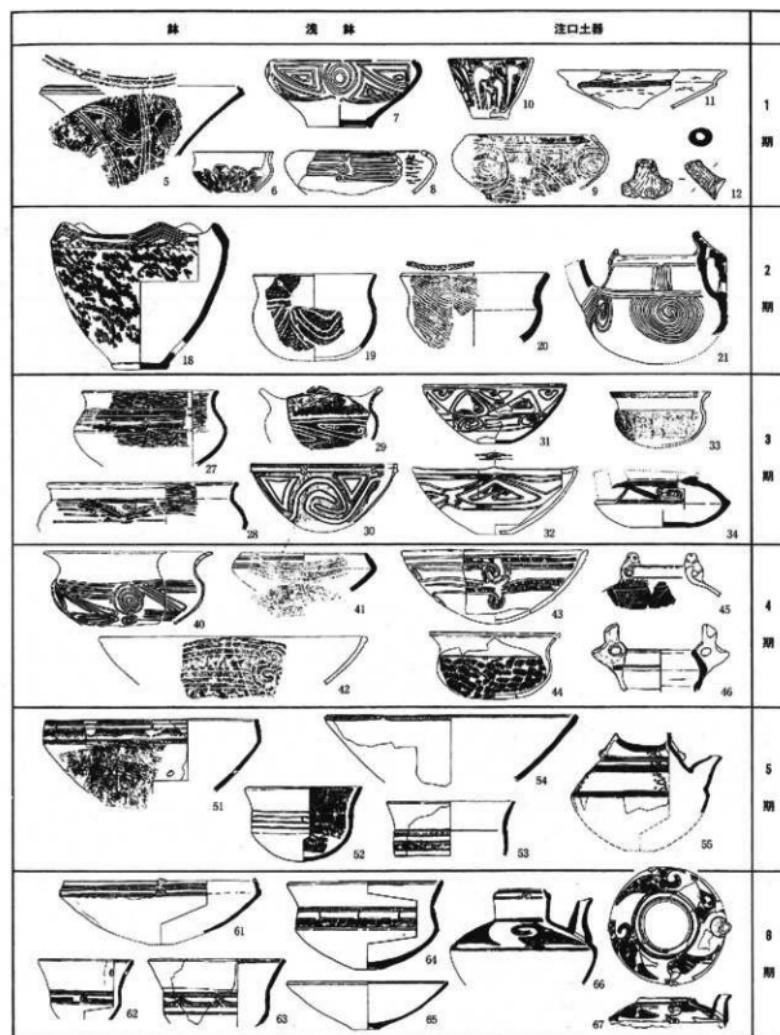
b. 近畿地方の縁带文土器（図168を引用）  
c. 関東地方の堀之内式土器（図274を引用）



第85図 後期前葉の土器（『縄文土器大観4』1989を引用）

漢 藝



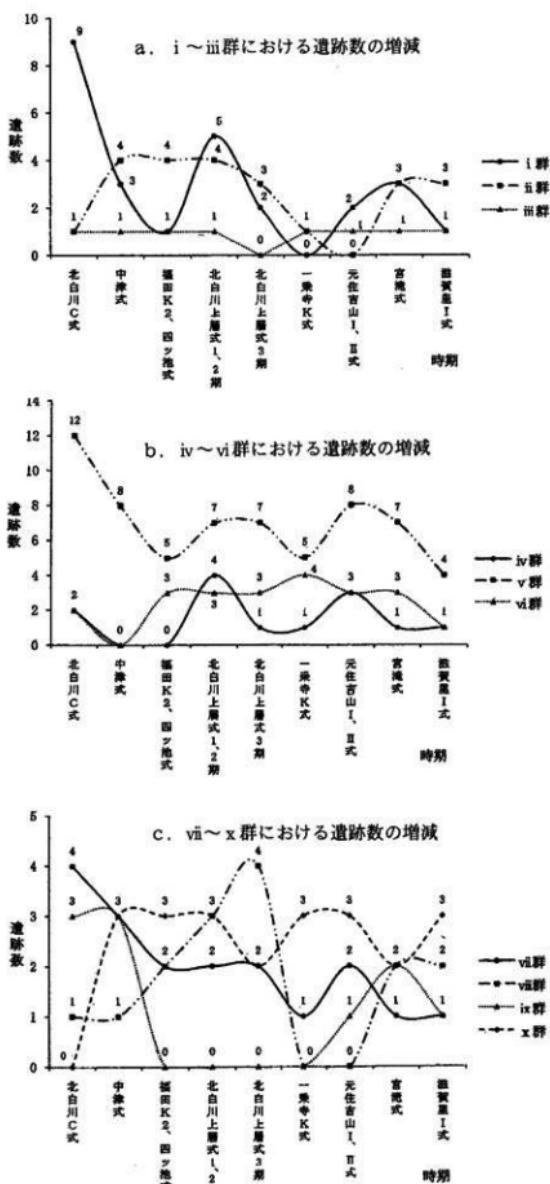


第 86 図 緑帯文土器 (千葉豊 2008「緑帯文土器」「総覧縄文土器」第 4 図を引用)

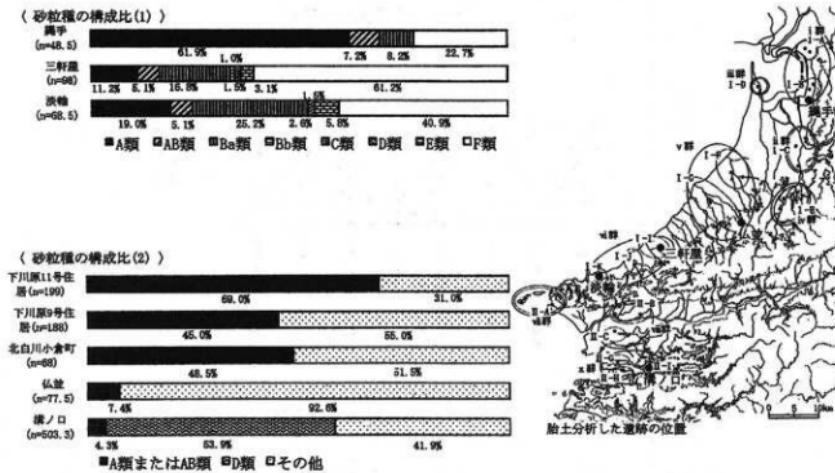
1：兔ヶ崎 A (道賀) 2：新御寺 (三重) 3：高桑第 1 (鳥取) 4：矢野 (島根) 5：箕藏廻 (兵庫) 6～8：10～12、17：松ノ木 (高知) 9：今つめの木 (香川) 13～16、21、22、27、28、34：正楽寺 (道賀) 18：雲取白石銅鏡 (広島) 19～20：北白川道分町 (京都) 23：小川原 (高賀) 24：若狭 (福井) 25～31：御殿尾西町 (京都) 26、29～30、33：興手 (大阪) 32：弘川館 (道賀) 35～40：曾万布 (福井) 36～41：下尾井 (佐久山) 37～39、43～44：津島開大 (岡山) 38：百聞川沢田 (岡山) 42、45：森洞下 (京都) 46～47、50～54、56～67：椎 (兵庫) 48～55：一乗寺向畠町 (京都) 49：森の音 (大阪) (縮尺 1～6、8～11、13～17、22～33、35～38、40～47、50～55、63～65、67：1/10 7～12、18～21、34～36、37～41～46、51～54、64～66：3/20)



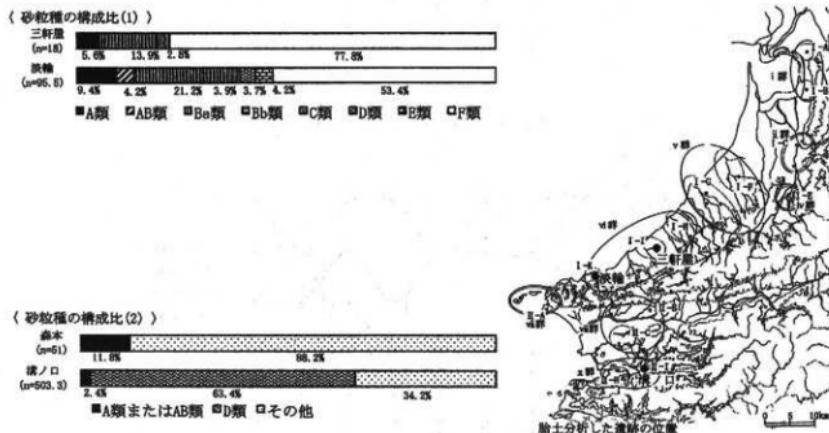
第87図 大阪府と和歌山県沿岸部の縄文遺跡と遺跡群（河本純一氏作）



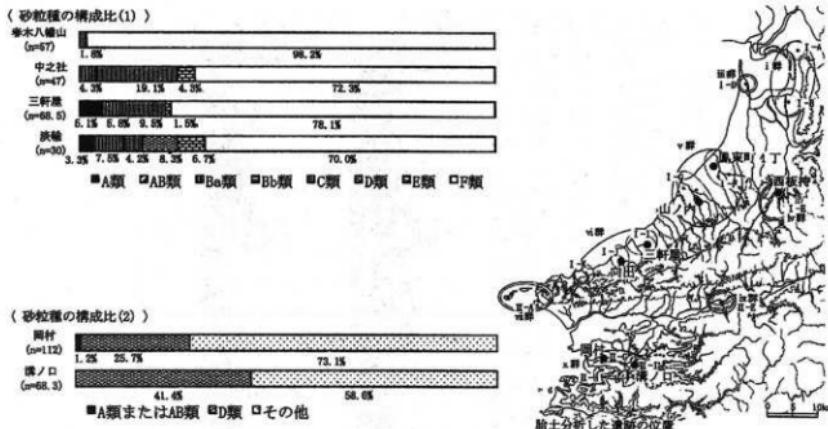
第 88 図 i ~ x群の遺跡の消長 (河本純一氏作)



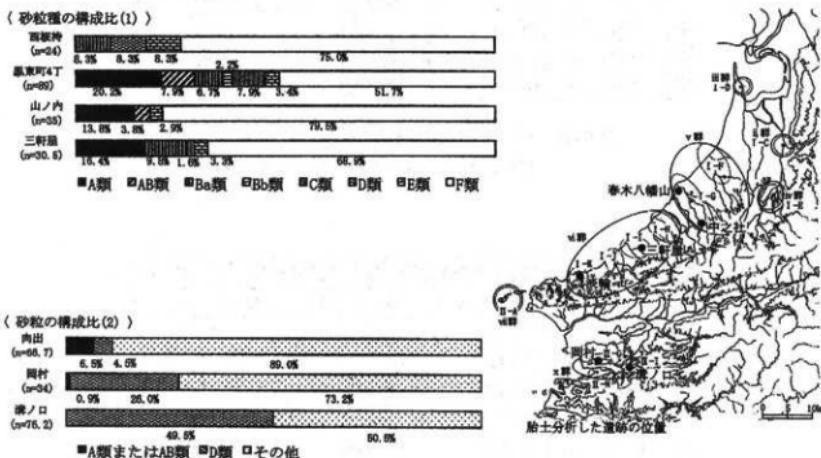
第89図 北白川上層式2期における土器の砂粒種構成（河本純一氏作）



第90図 北白川上層式3期における土器の砂粒種構成（河本純一氏作）



第91図 一乗寺K式期における土器の砂粒種構成（河本純一氏作）



第92図 元住吉山I式期における土器の砂粒種構成（河本純一氏作）

土坑名	総点数	總重量(g)	類型別点数比	類型別重量比	時期
① 698	9	91.29	A	A	元住吉山Ⅱ
② 1368	42	217.98			宮滝2(古)
③ 806	43	302.19			宮滝2
④ 1101	72	273.18			ク
⑤ 1103	61	262.57			ク
⑥ 1330	32	114.73			ク
⑦ 1412	25	73.92			ク
⑧ 473	13	97.71			宮滝2(新)
⑨ 756	19	70.84			ク
⑩ 899	21	128.93			ク
⑪ 1104	32	199.61			ク
⑫ 1113	25	93.48			ク
⑬ 1223	34	223.78			ク
⑭ 1393	42	254.62			ク
⑮ 1602	27	161.51			ク
⑯ 739	13	74.70			宮滝2(新)
⑰ 1293	313	277.00	C		ク
⑱ 793	12	61.52			宮滝2(新) 横更に近い
⑲ 941	55	208.42			ク
⑳ 1484	13	50.69			宮滝?
㉑ 913	29	137.53			滋賀里(古)
㉒ 433	15	51.42			滋賀里I
㉓ 1091	163	862.71			ク
㉔ 1102	28	184.82			ク
㉕ 804	80	260.53			口酒井

第 93 図 向出遺跡土坑出土のサヌカイト  
(『向出遺跡』2000 第 266 図を引用)

時期	総点数	總重量(g)	類型別点数比(数字は 個数)	類型別重量比(数字 はg)	備考
元住吉山Ⅱ	9	91.29	A	B	A
宮滝2(古)	42	217.98			②
宮滝2	190	722.40			④~⑦の 合計
宮滝2(新)	280	1,500.42			⑤~⑧の 合計
滋賀里I	235	1,236.48			⑨~⑫の 合計
口酒井	80	260.53			㉕

第 94 図 向出遺跡サヌカイト類型別出土量の変遷  
(『向出遺跡』2000 第 267 図を引用)

## 第5章 総括

### 第1節 再評価までの経過

向出遺跡が世間の脚光を浴びて10余年の年月が流れた。発掘当時は西日本における縄文遺跡の発掘事例が少なく、比較検討が困難であることから、遺跡 자체の性格を見ていくことが非常に難しく、1998年に開催したシンポジウムでは、東日本の事例から見た遺跡評価が中心となった。その後、西日本でも発掘事例が増加し、この流れを受けて関西縄文文化研究会により墓地や集落の集成が行われ、また、研究者の緻密な分析の積み重ねにより解明が進められた。

そこで今回、有識者を中心とした評価検討委員会を設置し、縄文遺跡としての位置付けを再度行った。すなわち、ひとつの遺跡を発掘し、そこから得た資料は紛れも無い事実であるが、研究の進展によりその評価がより詳細になされることとなった。

向出遺跡は、墓制を研究する資料であるだけでなく、西日本の縄文集落の構造を考察する上で重要な遺跡となった。西日本における縄文遺跡の中で向出遺跡が占める役割について、焦点を当てることが可能となったことは、大きな一歩である。このような飛躍は、本報告書の各論考で如実に現れている。

### 第2節 論点の整理

平成12(2000)年の(財)大阪府文化財調査研究センター(以下、「府センター」と記す)や、阪南市教育委員会が行った調査では、後期中葉～晩期後葉という長期に亘って遺跡形成が盛んであった様相を把握した。

また、縄文時代に属する遺構が主に分布する範囲は、向出遺跡を東西に横切る「段差」を境にした南部域であり、中でも南側の最も標高が高い地域において濃密であることは、既に述べた通りである。これにより、縄文時代における遺構の遺存している範囲が、最大で概ね東西150m、南北125m程度の約15,000m<sup>2</sup>であることが判明した。

この遺構が集中する地域を土台とし、第2章で各論が展開されているのであるが、中には対峙する意見も含まれた。解釈の差異は、大別すると3つの視点に基づくものである。

第1点は、墓の認識で、数や規模に係る問題である。岡田氏が論考に示されたように、土坑の内容としては、長方形や長楕円形、正円形、小穴に大別されるが、これらをどこまで墓と考えるかが大きく係る。

岡田氏が、土坑形態から「長形土坑」と称する中でも、「北村領域」や「滋賀里領域」に分類した縄文時代の屈葬となるものは65基となり、阪南市調査の98-4-1・00-5区検出のものを含むと66基となる。さらに、伸展葬の長形土坑の存在も指摘し、成人一次葬用の土坑墓の可能性が示唆されるものは、府センター調査区で123基に及ぶ。加えて、「正形土坑」は、再葬墓を含む儀礼用の葬送儀礼に関連した土坑であると解釈しており、儀礼関連の遺構を墓に直結することに対しては、慎重な意見が述べられているものの、墓認識の視点からすると最も認識範囲を広げた論である。

対して中村氏は、長形土坑のうち屈葬の土坑墓の存在は追認するものの、岡田氏が伸展葬とする長形土坑については、伸展葬が近畿地方に無いことから、土坑墓以外の機能を考える必要性を示す。また、特徴的な論として、正円形土坑が乾燥型貯蔵穴である可能性を示した。正円形の土坑には、出土遺物や堆積状況に多様性があり、その機能を一律に規定することは出来ないことから、解釈の差異が生じている。

第2点は、墓に加え住居はあったのか、という問題である。言い換えれば、墓に埋葬される人々が住居を構えていた場所は、遺跡の内か外かという事である。既往の調査では、サヌカイトの石鏃や剥片が多く出土し、また、99-2区、98-4-1・00-5区、00-1区からは、蔽石・石皿の出土が見られ、集落遺跡と同様の石器組成を示すことから、依然、居住域が発見される可能性は十分に存在する。しかし、豊穴住居や地床炉等、居住と直接結びつく遺構は検出されておらず、その存在の可否については、不詳のままである。

各論をまとめると、岡田氏と大野氏は、墓地のみで構成されている遺跡であると考え、矢野氏は遺跡内には墓地に加えて住居も存在したとする。また中村氏も、土坑群周辺に居住関係遺構が存在する

という想定について可能性を示している。

墓地のみであるという立場をとる岡田氏は、複数の集団が寄り集まつた墓地遺跡で、時期ごとに設営場所を移したとする。大野氏は、さらに踏み込んだ解釈を持ち、複数の集落の共同墓地として営まれた遺跡とし、個別の集落からは独立した大型墓地であると指摘する。

これに対し矢野氏は、発掘区域内の分析とその復元から、遺跡が墓だけで特化していたとは考えず、奈良県曲川遺跡等の事例を取り上げ、墓・住居・貯蔵穴からなる構造を想定する。さらに、既往調査区外では、後期の墓は少ないと考え、墓の数から集落構成員の人数を想定した。

第3点は、墓のありかたについてであり、先の2点に密接に関連した問題である。大野氏は、向出遺跡土坑墓の規模は、緊密な関係を築いた近隣のいくつかの集団の結節点であることに起因すると考える。また、複数集団の集合を想定する岡田氏の見解も含めると、前述のように、複数集団ないし複数集落によって墓が営まれることにより、規模が大きくなつたという認識に繋がる。

これに対し、長期的かつ継続的に土坑墓が営まれたという特性で、結果的にこのように大規模な墓地が形成されたという意見が挙げられた。矢野氏の論は各時期に属する上坑墓の数から実数を取上げて、墓を営む集落の人員数を分析し、1つの集落に対応する墓地であるとの結果を示している。

このように、墓の構成員について各論に見解の相違が見られるが、共通して言えることは、向出遺跡は比較的長期間に亘り、存続するということである。

以上、3つの視点による問題点を取上げたが、さらに視点を広げると、泉氏の考察では、向出遺跡の地が本格的に利用された後期中葉が、西日本縄文文化の中で、変化が起こる時期に一致するとの指摘がなされている。土器の系統や、石器供給システムが変化する流れの中で興った向出遺跡は、その変換を担った中心的な遺跡であるとし、周辺の縄文遺跡を含めた遺跡の消長について、今後注目される。

### 第3節 向出遺跡の評価検討

既往の調査及び、委員の考察、評価から、当市としての向出遺跡の評価をここに記したい。

まず、縄文時代の遺構が存在する可能性のある15,000m<sup>2</sup>という範囲は、縄文遺跡を通して検討しても、平凡な規模ではなく、関東地方の拠点集落と言われている遺跡と比較しても見劣りしない規模である。その範囲において、これまでに実施された調査面積は、約3分の1であるが、調査により検出された縄文時代の遺構は、約1,600基を超える。よって、未調査の範囲を含んだ地域における縄文時代の遺構数は、数千基となる可能性がある。これらの遺構の全てが墓でないとしても、遺構数のみを基準として見れば、他の調査事例からも、向出遺跡は突出する規模とは言えないものの、比較的大きな規模を有する縄文時代の遺跡の範疇に含まれることは明らかである。

向出遺跡において、成人一次葬の土坑墓として確実に認識されている「長形土坑」に限ると、現時点で66基の検出例がある。「長形土坑」が属する元住吉山～滋賀里式に併行する時期に、このような規模を有する遺跡は、西日本では他に発見されていない。

さらに、時期の限定だけでなく墓の種類についても一言付け加えておくと、縄文時代では後晩期に甕棺墓が隆盛し、その数が増加する。甕棺のみで墓地が構成される遺跡もあり、甕棺の事例を含むと、向出遺跡を凌ぐ規模の墓地は多数存在するのである。しかし、甕棺の多くは、胎兒・新生児・乳児用の墓であるとされている。よって、成人の埋葬を想定した墓に限って取上げると、向出遺跡は西日本において他に類を見ない規模の墓地を営んだ遺跡となる。ただし、成人の墓については不明点が多いことが実状である。

向出遺跡は、突出した規模の縄文時代の墓地であるという訳ではないが、これらの様相を知ることのできる遺跡であることは重要であり、指標的な位置として捉えることが可能であろう。時間軸の視点で見ると長期的かつ継続的に使用されたことにより、大規模なものになったと言える。

また、墓地のみで構成された遺跡であるか否かで見解が分かれているところであるが、前者の立場からは、向出遺跡は大型の共同墓地であり、近畿地方で縄文時代後期中葉頃におこる地域社会の変化

を雄弁に物語る、特筆されるべき遺跡と評価され、後者の立場からも、全ての上坑が墓でないとしても、近畿地方では縄文時代後期後葉から末の墓地として珍しく、この時期の墓制や集落を考える上では、極めて重要な遺跡であると評価されている。

以上のように、向出遺跡は縄文時代の成人一次葬墓が営まれる墓地遺跡として、その規模や継続性において、近畿地方さらには西日本屈指の遺跡であり、西日本における縄文時代後期から晩期における葬制や墓制研究、これらの制度と集落との関係、さらには、西日本における縄文文化、社会の変化を研究するうえで、欠くことのできない重要遺跡であるといえよう。

#### 第4節 現状と課題

現在、西日本での発掘事例は飛躍的に増加している。縄文時代の典型的な集落構造とされていた環状集落が、関東地方、中部地方、東北地方南部に限られることが明らかになりつつあり、西日本の集落がこれとは別の構造であったと理解されている。そこで、向出遺跡の南部域を調査することにより、その構造理解が前進すると、非常に有益な資料となる。今のところ向出遺跡は、中心部に居住区が無いことから、環状集落ではないことが判明しており、西日本の傾向に沿うはずである。現在、縄文時代の集落研究には、西日本の小規模集落論や、集落の定着性、さらに集落の構造など、多岐にわたる研究視点がある。

これらの研究において、居住痕跡が未だ発見されていない向出遺跡は、直接的に分類の俎上にのらないが、集落と墓地が密接した関係であることは当然であり、集落論の動向が向出遺跡の評価に影響すると思われる。これが、過去の遺跡評価においてあまり意識されなかった点である。今後の発掘調査において実証的な資料を見落とさず、成果を精緻に積み上げていくよう努めねばならない。特に住居や炉等の検出があるか否かということが重要な点であり、住居については堅穴住居だけでなく、掘立柱建物等の平地式住居の可能性も含め、調査には細心の注意を払う必要がある。

西日本の縄文時代研究は、現在も研究の途上にある。しかし、研究は着実に進んでいる。向出遺跡の重要性を多くの方にご理解いただきたい。そして、これからも継続的に発掘調査および研究を行い、次世代に継承しなければならない。

#### 第5節 今後の取り組み

本市では、2025年（平成37年）を見通した「阪南市新総合計画」を、平成21年度から市民との協働による手法で策定すべく、計画作成に着手した。現行の総合計画においても向出遺跡の位置づけはあるが、このたびの評価結果を踏まえると、向出遺跡の存在は非常に重要であり、さらに積極的な方策を検討し推進していかなければならない。市民の持つ認識はまだ浅く、縄文時代研究者が持つ重要性への認識とかなりの温度差があることから、向出遺跡が注目に値する遺跡であるということについて、周知を図ることが必要である。特に、認識不足に起因した開発等の破壊行為は、阪南市ひいては日本の歴史的文化遺産を失うこととなり、このような事は絶対にあってはならない。

具体的な手段としては、ホームページや広報誌による周知普及活動、遺跡解説チラシの定期的発行による市民への啓発、遺跡周辺における案内板の設置、ボランティアの活用によるエクスカーション（現地見学）の実施、歴史講座の開催、教育施設との連携による児童や生徒、学生を対象とした体験学習の実施、文化財専門分野における各種研究団体との連携により、研究会や例会の開催を阪南市へ招致するなど、様々な取り組みが挙げられる。

このような取り組みは、阪南市の歴史資源の活用から始まり、市民活動の活発化の一助にもなり得る。新たなまちづくりの推進に、この遺跡を地域の特色ある素材として活用することができるのである。また、中・長期的に遺跡認識の向上に努め、将来的には遺跡を国の史跡に指定することを視野に入れ、公有化、整備を進めていきたい。公有化や史跡指定等については、周辺地域の土地所有者の理解と協力が何よりも必要であることから、当面は耕作地の現状維持と推移に注視し、從来の景観を保つ状況での活用を計画していくこととする。さらに、周辺住民や地権者の理解を得た上で向出遺跡の保存・活用について方法を模索し、本市の歴史・文化の拠点として事業推進をめざすものとする。

## あとがき

かつて「西日本最大級の縄文墓地遺跡」としてマスコミ報道で全国的にその名が知られた向出遺跡は、10年以上の年月を経て関心が薄れ、大規模な調査もなく世間の目に触れる機会が少なかったことから、重要性への意識が低下していた。一方、縄文時代研究者の中では依然として良好な調査事例として取り上げられ、西日本縄文墓地遺跡の研究においては、指標的な遺跡として位置付けがなされている。

今回、向出遺跡を今後どのように取り扱うかという課題に対し、向出遺跡評価検討委員会を設置することにより、遺跡についての評価、位置付けを行い、本書を取りまとめた。

また、委員会設置に伴い、阪南市教育委員会では、シンポジウム等を通して市民をはじめとする一般の人々への周知を図った。

本書を受け、阪南市全体の「まちづくり」において、周知活動や市民参加の諸活動などに、向出遺跡の様々な応用を反映すべきであり、向出遺跡自体のあり方については、史跡指定および公有化による保存を将来の到達点として捉え、様々な施策を計画、展開していくことをめざすことが望ましい。しかし、一方においては阪南市を取り巻く行財政等の状況は非常に厳しく、課題も多く存在することから、現況を慎重に見据えつつ最優先課題を見極め、課題をひとつずつ解決し地道に施策の取り組みを推進する必要がある。向出遺跡に対する取り組みは短期的な取り組みを効率的かつ継続的に実施することにより、その積み重ねによって、史跡指定を目標にした最終到達点へと繋げていかなければならない。

文化財たる向出遺跡が地元住民を中心とした阪南市民、ひいては国民の共有財産として受容され、共通認識されることをめざし、施策を展開することが、今後の阪南市教育委員会に課せられた責務であることを最後に明記し、本書のまとめとする。

(添付CD-R)  
参考資料 関西における縄文時代の墓地遺跡集成

「関西の縄文墓地遺跡」  
「大阪府の縄文土坑出土遺跡」

凡　　例

1. 本資料は、近畿2府5県（滋賀県、京都府、奈良県、和歌山県、大阪府、兵庫県、三重県）および愛知県、岐阜県における縄文墓地遺跡のうち、平成12(2000)年以降に発行された報告書の一覧及び遺跡の詳細を集成した資料である。
2. 本資料は関西縄文文化研究会資料である『関西の縄文墓地—葬り葬られた関西縄文人—』(2000年発行)を参考にして集成した。
3. 「関西の縄文墓地遺跡」は、各報告書で墓と報告されている遺構(土坑墓・土器棺墓)に加え、縄文時代の墓制に関わると想定される遺構(配石遺構・集石遺構・埋設土器)を集成する。
4. 大阪府に限っては、縄文時代の土坑およびピットを集成した「大阪府の縄文土坑遺跡」を作成した。ただし、墓に関連した遺構を検出している遺跡については「関西の縄文墓地遺跡」に掲載している。
5. 掲載した資料は、発掘調査報告書等から引用転載したものであり、個々の遺跡の情報については各調査担当者の解釈が含まれる。ここでは報告書での表現を尊重し、用語の統一を極力行わない。
6. 各遺跡の図面は、遺跡位置図、調査区位置図、遺構配置図、遺構実測図、出土遺物実測図を掲載している。

目　　次

「関西の縄文墓地遺跡」

遺跡一覧表

1 愛知県	.....	No. 1～6
2 岐阜県	.....	No. 7～16
3 滋賀県	.....	No. 17～25
4 京都府	.....	No. 26～32
5 奈良県	.....	No. 33～44
6 和歌山県	.....	No. 45～47
7 大阪府	.....	No. 48～52
8 兵庫県	.....	No. 53～55
9 三重県	.....	No. 56～63

「大阪府の縄文土坑出土遺跡」

遺跡一覧表

大阪府	.....	No. 1～22
-----	-------	----------

「関西の縄文墓地遺跡」掲載内容例

三重・権現坂遺跡

三重 権現坂遺跡

- 1 所 在 いなべ市(旧員弁郡北勢町)東村字治田外面
- 2 立 地 員弁川の支流である多志田川と青川に挟まれた段丘面の北端に突き出た丘陵の北東側の裾部、標高は83~85m
- 3 遺 構 土器棺墓2
- 4 参考遺構等 土坑2(後期の土器が出土)
- 5 報告書 清水正明、森川幸雄、片岡博、角正芳浩 2002『権現坂遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター

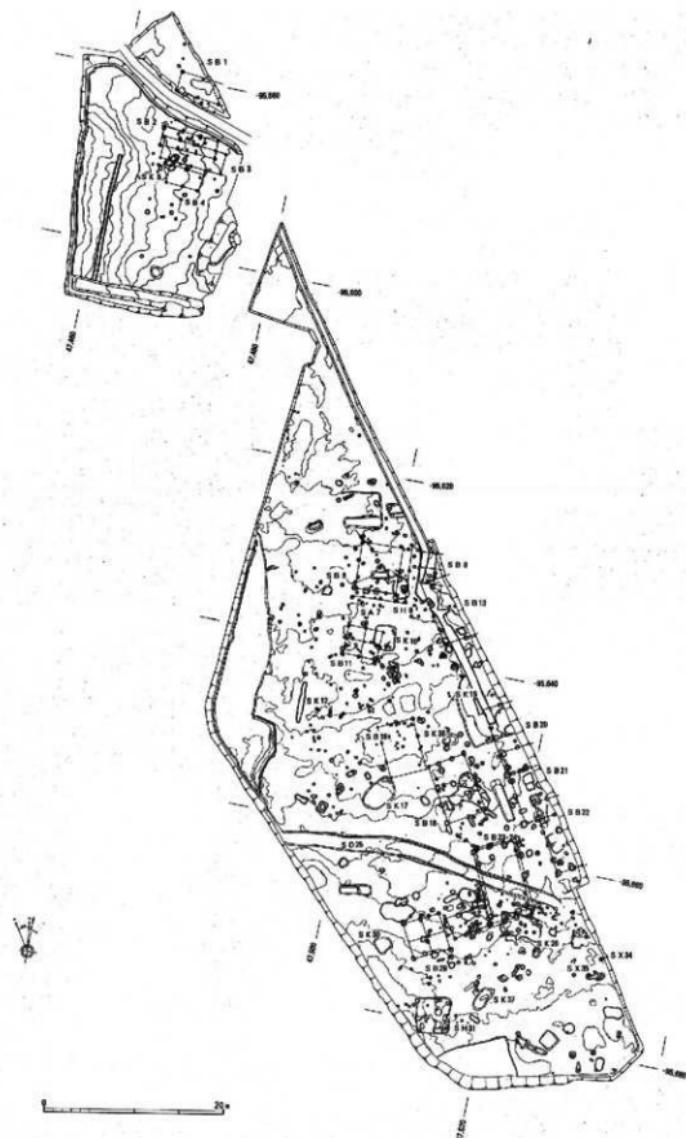
6 遺構一覧

遺構名	時期	遺構形状	規模・深さ(核 出面から) cm	残存骨	副葬品	備考
SX34	晩期	土器棺墓	堀形未検出	土器の中の土 に細片	なし	横位、刻日突帯文深鉢、合口土器棺 墓や蓋を伴う土器棺墓の可能性あり
SX35	晩期	土器棺墓	堀形未検出	なし	なし	横位、合口土器棺墓や蓋を伴う土器 棺墓の可能性あり

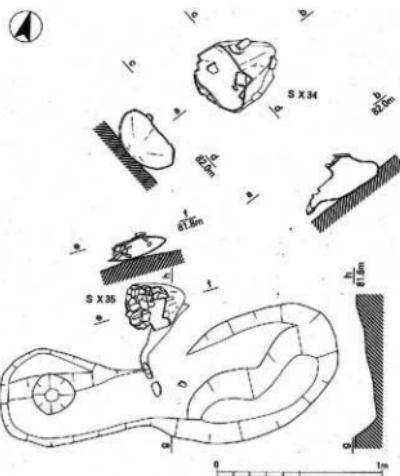


権現坂遺跡 位置図 (S=1/50,000)

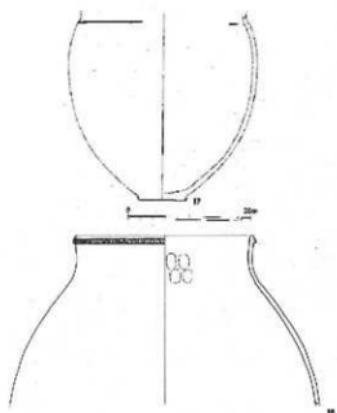
(1が権現坂遺跡)



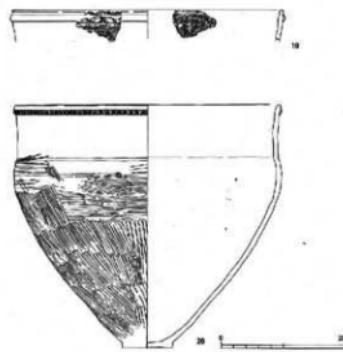
遺構配置図



SX34・35 遺構実測図



SX34 土器棺実測図



SX35 土器棺実測図

「大阪府の縄文土坑出土遺跡」掲載内容例

大阪土坑・水越遺跡

大阪

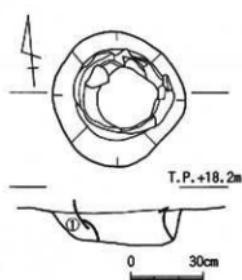
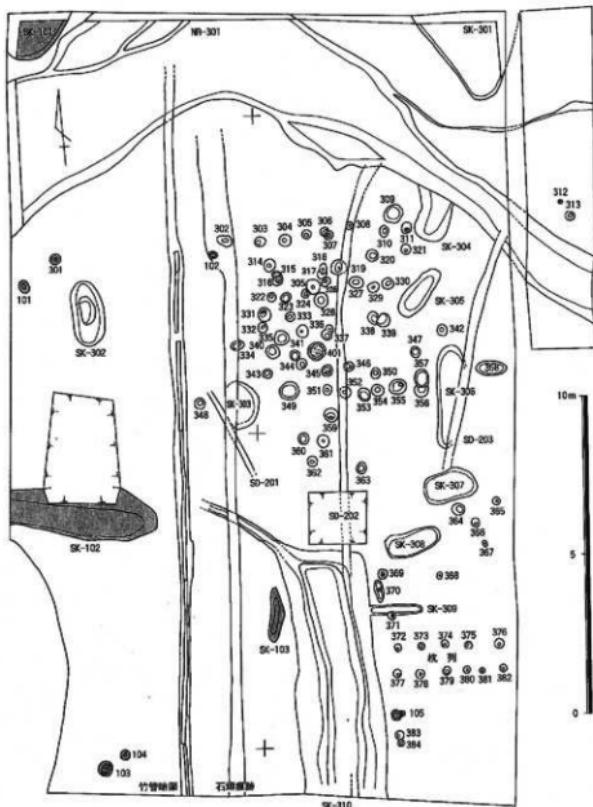
みず ごく  
水越遺跡

- 1 所 在 八尾市服部川3丁目
- 2 立 地 生駒山地西麓の扇状地上
- 3 遺 構 ピット1
- 4 参考遺構等
- 5 報告書 橋口薰、成海佳子 2001『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告2』八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会

6 遺構一覧

遺構名	時期	遺構形状	規模・深さ(検出面から) cm	共伴遺物等	備考
SP-401	滋賀里Ⅲ式	ピット 梢円形	60×55+15	深鉢	平坦に掘り進められた底に深鉢が伏せられていた

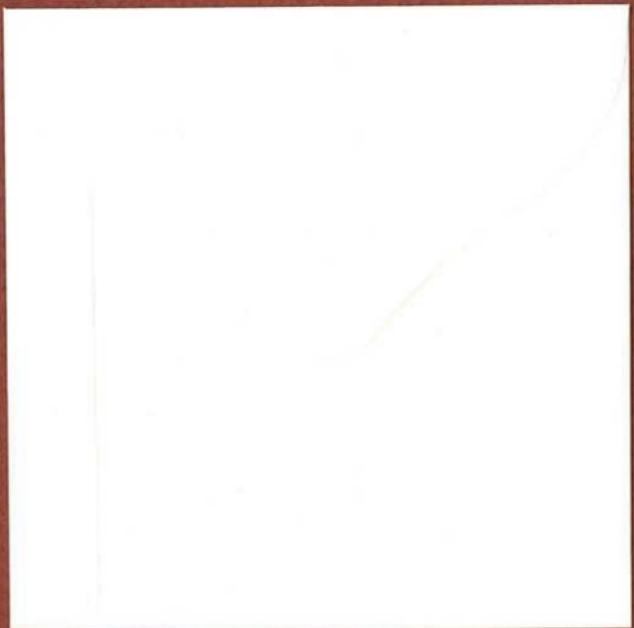




①暗褐色粗砂混砂質シルト

SP-401 遺構実測図

SP-401 出土遺物実測図



阪南市埋蔵文化財報告 47

大阪府阪南市自然田所在  
向出遺跡評価検討委員会報告書

2010年3月

発行：阪南市教育委員会生涯学習部  
生涯学習推進課  
大阪府阪南市尾崎町35の1  
印刷者：三和印刷株式会社

